FDPS Fortran/C言語 インタフェース 仕様書

行方大輔, 岩澤全規, 似鳥啓吾, 谷川衝, 村主崇行, Long Wang, 細野七月, and 牧野淳一郎

理化学研究所 計算科学研究センター 粒子系シミュレータ研究 チーム

目 次

第1章	この文書について	11
1.1	文書の構成	11
1.2	ライセンス	12
1.3	ユーザーサポート	13
	1.3.1 コンパイルできない場合	13
	1.3.2 コードがうまく動かない場合	13
	1.3.3 その他	13
第2章	FDPS 概要	15
2.1	開発目的	15
2.2	基本的な考えかた	15
	2.2.1 大規模並列粒子シミュレーションの手順	15
	2.2.2 ユーザーと FDPS の役割分担	16
	2.2.3 ユーザーのやること	17
	2.2.4 補足	17
2.3	コードの動作	17
	2.3.1 FDPS 本体	17
	2.3.2 Fortran/C 言語 インターフェース	18
第3章	Fortran/C 言語 インターフェースのファイル構成と概要	21
3.1		21
	3.1.1 FDPS 本体	21
	3.1.2 Fortran インターフェース	21
	3.1.3 C 言語 インターフェース	24
	3.1.4 Fortran/C 言語 インターフェースを使ったコード開発の流れ	24
	3.1.5 インターフェースプログラム生成の必要性	26
3.2	ドキュメント	27
3.3	サンプルコード	27
第4章	FDPS で提供されるデータ型	29
4.1	基本データ型 (C 言語のみ)	29
4.2	ベクトル型	29
4.3	対称行列型	31
4.4	超粒子型	33

4.5	時間プロファイル型	38
4.6	列拳型	40
	4.6.1 境界条件型	40
	4.6.2 相互作用リストモード型	41
第5章	ユーザー定義型・ユーザー定義関数	45
5.1	ユーザ定義型	45
	5.1.1 共通規則	45
	5.1.1.1 Fortran 文法に関する要請	45
	5.1.1.2 C 言語 文法に関する要請	46
	5.1.1.3 FDPS 指示文 (共通項目のみ)	47
	5.1.1.3.1 ユーザ定義型の種別を指定する FDPS 指示文	47
	5.1.1.3.2 必須物理量を指定する FDPS 指示文	48
	5.1.1.3.3 FDPS 指示文の記述例	50
	5.1.2 FullParticle 型	51
	5.1.2.1 常に必要な FDPS 指示文とその記述法	
	5.1.2.2 場合によっては必要な FDPS 指示文とその記述法	52
	5.1.3 EssentialParticleI 型	
	5.1.3.1 常に必要な FDPS 指示文とその記述法	
	5.1.3.2 場合によっては必要な FDPS 指示文とその記述法	
	5.1.4 EssentialParticleJ 型	
	5.1.4.1 常に必要な FDPS 指示文とその記述法	
	5.1.4.2 場合によっては必要な FDPS 指示文とその記述法	
	5.1.5 Force 型	
	5.1.5.1 常に必要な FDPS 指示文とその記述法	
	5.1.5.2 場合によっては必要な FDPS 指示文とその記述法	
5.2	ユーザ定義関数	
	5.2.1 共通規則	
	5.2.1.1 Fortran 文法に関する要請 および FDPS 本体の仕様による要語 なけな 関する要請 および FDPS 本体の仕様による要語	
	5.2.1.2 C 言語 文法に関する要請 および FDPS 本体の仕様による要認 5.2.1.2 R 2	
	5.2.2 関数 calcForceEpEp	
	5.2.3 関数 calcForceEpSp	61
第6章	Fortran/C 言語 インターフェースの生成	65
6.1	スクリプトの動作条件	65
6.2	スクリプトの使用方法	66
第7章	Fortran/C 言語 インターフェースのコンパイル	69
7.1	コンパイル	69
	7.1.1 コンパイルの基本手順	69
	7.1.1.1 Fortran インターフェースを利用する場合	69

		7.1.1.2 C 言語インターフェースを利用する場合 71
	7.1.2	GCC を用いたコンパイルの仕方
		7.1.2.1 Fortran インターフェースを利用する場合
		7.1.2.1.1 MPI を使用しない場合
		7.1.2.1.2 MPI を使用する場合
		7.1.2.2 C言語インターフェースを利用する場合
		7.1.2.2.1 MPI を使用しない場合
		7.1.2.2.2 MPI を使用する場合
7.2	コンパ	イル時マクロ定義
	7.2.1	座標系の指定 75
		7.2.1.1 直角座標系 3 次元
		7.2.1.2 直角座標系 2 次元
	7.2.2	並列処理の指定 75
		7.2.2.1 OpenMP の使用
		7.2.2.2 MPI の使用
	7.2.3	データ型の精度の指定 75
		7.2.3.1 超粒子型のメンバ変数の型の精度の指定
	7.2.4	拡張機能 Particle Mesh の使用
	7.2.5	デバッグ用出力の指定 76
第8章		仕様一覧 77
8.1		*よび終了処理に関わる API
	8.1.1	ps_initialize
	8.1.2	ps_finalize
	8.1.3	ps_abort
8.2		オブジェクト用 API
	8.2.1	create_psys
	8.2.2	delete_psys
	8.2.3	init_psys
	8.2.4	get_psys_info
	8.2.5	get_psys_memsize
	8.2.6	get_psys_time_prof
	8.2.7	clear_psys_time_prof
	8.2.8	set_nptcl_smpl
	8.2.9	set_nptcl_loc
	8.2.10	get_nptcl_loc
	8.2.11	get_nptcl_glb
		fdps_get_psys_cptr (C 言語のみ)
		exchange_particle
	8 2 15	add particle 98

	8.2.16	remove_particle
	8.2.17	adjust_pos_into_root_domain
	8.2.18	sort_particle
8.3	領域情	報オブジェクト用 API 10
	8.3.1	create_dinfo
	8.3.2	delete_dinfo
	8.3.3	init_dinfo
	8.3.4	get_dinfo_time_prof
	8.3.5	clear_dinfo_time_prof
	8.3.6	set_nums_domain
	8.3.7	set_boundary_condition
	8.3.8	get_boundary_condition
	8.3.9	set_pos_root_domain
	8.3.10	collect_sample_particle
	8.3.11	decompose_domain
	8.3.12	decompose_domain_all
8.4	ツリー	オブジェクト用 API
	8.4.1	ツリーの種別
		8.4.1.1 長距離力用ツリーの種別
		8.4.1.2 短距離力用ツリーの種別
	8.4.2	create_tree
	8.4.3	delete_tree
	8.4.4	init_tree
	8.4.5	get_tree_info
	8.4.6	get_tree_memsize
	8.4.7	get_tree_time_prof
	8.4.8	clear_tree_time_prof
	8.4.9	get_num_interact_ep_ep_loc
	8.4.10	get_num_interact_ep_sp_loc
	8.4.11	get_num_interact_ep_ep_glb
	8.4.12	get_num_interact_ep_sp_glb
	8.4.13	clear_num_interact
	8.4.14	get_num_tree_walk_loc
	8.4.15	get_num_tree_walk_glb 13
	8.4.16	set_particle_local_tree
	8.4.17	get_force
	8.4.18	calc_force_all_and_write_back
	8.4.19	calc_force_all
	8.4.20	calc_force_making_tree
	8 4 21	calc force and write back

	8.4.22	get_neighbor_list
	8.4.23	get_epj_from_id
8.5	通信用	API
	8.5.1	get_rank
	8.5.2	get_rank_multi_dim
	8.5.3	get_num_procs
	8.5.4	get_num_procs_multi_dim
	8.5.5	get_logical_and
	8.5.6	get_logical_or
	8.5.7	get_min_value
	8.5.8	get_max_value
	8.5.9	get_sum
	8.5.10	broadcast
	8.5.11	get_wtime
	8.5.12	barrier
8.6	Particl	e Mesh 用 API
	8.6.1	create_pm
	8.6.2	delete_pm
	8.6.3	get_pm_mesh_num
	8.6.4	get_pm_cutoff_radius
	8.6.5	set_dinfo_of_pm
	8.6.6	set_psys_of_pm
	8.6.7	get_pm_force
	8.6.8	get_pm_potential
	8.6.9	calc_pm_force_only
	8.6.10	calc_pm_force_all_and_write_back
8.7	その他	<i>Φ</i> API
	8.7.1	create_mtts
	8.7.2	delete_mtts
	8.7.3	mtts_init_genrand
	8.7.4	mtts_genrand_int31
	8.7.5	mtts_genrand_real1
	8.7.6	mtts_genrand_real2
	8.7.7	mtts_genrand_real3
	8.7.8	mtts_genrand_res53
	8.7.9	mt_init_genrand
	8.7.10	mt_genrand_int31
	8.7.11	mt_genrand_real1
	8.7.12	mt_genrand_real2
	8 7 13	mt genrand real3

	8.7.14	$\mathrm{mt_genr}$	and_res53	202
第9章	エラー	-メッセー	ジ	203
9.1	FDPS	本体 .		203
	9.1.1	概要 .		203
	9.1.2	コンパイ	'ル時のエラー	203
	9.1.3	実行時の)エラー	203
		9.1.3.1	PS_ERROR: can not open input file	204
		9.1.3.2	PS_ERROR: can not open output file	204
		9.1.3.3	PS_ERROR: Do not initialize the tree twice	204
		9.1.3.4	PS_ERROR: The opening criterion of the tree must be $>= 0$.	0204
		9.1.3.5	PS_ERROR: The limit number of the particles in the leaf cell	
			$must be > 0 \dots \dots \dots \dots \dots$	205
		9.1.3.6	PS_ERROR: The limit number of particles in ip groups msut	
			be $>=$ that in leaf cells	205
		9.1.3.7	PS_ERROR: The number of particles of this process is be-	
			yond the FDPS limit number	206
		9.1.3.8	PS_ERROR: The forces w/o cutoff can be evaluated only	
			under the open boundary condition	206
		9.1.3.9	PS_ERROR: A particle is out of root domain	206
		9.1.3.10	PS_ERROR: The smoothing factor of an exponential moving	
			average is must between 0 and 1	206
		9.1.3.11	PS_ERROR: The coodinate of the root domain is inconsistent	t.207
		9.1.3.12	PS_ERROR: Vector invalid accesse	207
9.2	FDPS	Fortran/	C 言語 インターフェース	207
	9.2.1	コンパイ	'ル時のエラー検出	207
	9.2.2	実行時の)エラー検出	207
		9.2.2.1	FullParticle '派生データ型名 ' does not exist	208
		9.2.2.2	An invalid ParticleSystem number is received	
		9.2.2.3	cannot create Tree 'ツリーの種類 '	208
		9.2.2.4	An invalid Tree number is received	208
		9.2.2.5	The combination psys_num and tree_num is invalid	208
		9.2.2.6	tree_num passed is invalid	208
		9.2.2.7	EssentialParticleJ specified does not have a member variable	
			representing the search radius or Tree specified does not sup-	
			port neighbor search	209
		9.2.2.8	Unknown boundary condition is specified	209
第 10 章	・ 限界と	制約		211
10.1	FDPS	本体 .		211
10.2	FDPS	Fortran/	C 言語 インターフェース	911

第 11 章 変更履歴 213

第1章 この文書について

1.1 文書の構成

この文書は大規模並列粒子シミュレーションの開発を支援する Framework for Developing Particle Simulator (FDPS) の Fortran 及び C言語 インターフェース (以降、単に Fortran/C 言語インターフェースと略記する) の仕様書である。この文書は理化学研究所計算科学研究センター粒子系シミュレータ研究チームの行方大輔、岩澤全規、似鳥啓吾、谷川衝、細野七月、村主崇行、Long Wang、牧野淳一郎によって記述された。

この文書は以下のような構成となっている。

第2、3、7章には、FDPS Fortran/C言語 インターフェースを使ってプログラムを書く際に前提となる情報が記述されている。第2章には、FDPS の概要として、FDPS の基本的な考えかたや動作が記述されている。第3章には、FDPS Fortran/C言語 インターフェースのファイル構成とその概要が記述されている。第7章には、FDPS Fortran/C言語 インターフェースを使用したコードをコンパイルする時にどのようなマクロを用いればよいかが記述されている。

第4、5、8章には、FDPS Fortran/C言語 インターフェースを使ってプログラムを書く際に必要となる情報が提供されている。第4章には、FDPS で独自に定義されている派生データ型 (Fortran)、或いは、構造体 (C言語) が記述されている。第5には、FDPS の API を使用する際にユーザーが定義する必要がある Fortran の派生データ型やサブルーチン (C言語では構造体や関数) について記述されている。第8章には、Fortran、或いは、C言語から FDPSを操作するための API について記述されている。

第9、10章には、FDPSのAPIを使用したコードを記述したがコードが思ったように動作しない場合に有用な情報が記載されている。第9章にはエラーメッセージが記述されている。第10章には、FDPSの限界について記述されている。

最後に第11章にはこの文書の変更履歴が記述されている。

1.2 ライセンス

MIT ライセンスに準ずる。標準機能のみ使用する場合は、Iwasawa et al. (2016, Publications of the Astronomical Society of Japan, 68, 54)、及び、Namekata et al. (2018, Publications of the Astronomical Society of Japan, 70, 70) の引用をお願いします。

拡張機能の Particle Mesh クラスは GreeM コード (開発者: 石山智明、似鳥啓吾) (Ishiyama, Fukushige & Makino 2009, Publications of the Astronomical Society of Japan, 61, 1319; Ishiyama, Nitadori & Makino, 2012 SC'12 Proceedings of the International Conference on High Performance Computing, Networking Stroage and Analysis, No. 5) のモジュールを使用している。GreeM コードは Yoshikawa & Fukushige (2005, Publications of the Astronomical Society of Japan, 57, 849) で書かれたコードをベースとしている。Particle Mesh クラスを使用している場合は、上記3つの文献の引用をお願いします。

拡張機能のうち x86 版 Phantom-GRAPE を使用する場合は Tanikawa et al.(2012, New Astronomy, 17, 82) と Tanikawa et al.(2012, New Astronomy, 19, 74) の引用をお願いします。

Copyright (c) <2015-> < FDPS developer team>

Permission is hereby granted, free of charge, to any person obtaining a copy of this software and associated documentation files (the "Software"), to deal in the Software without restriction, including without limitation the rights to use, copy, modify, merge, publish, distribute, sublicense, and/or sell copies of the Software, and to permit persons to whom the Software is furnished to do so, subject to the following conditions:

The above copyright notice and this permission notice shall be included in all copies or substantial portions of the Software.

THE SOFTWARE IS PROVIDED "AS IS", WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR IMPLIED, INCLUDING BUT NOT LIMITED TO THE WARRANTIES OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE AND NONINFRINGEMENT. IN NO EVENT SHALL THE AUTHORS OR COPYRIGHT HOLDERS BE LIABLE FOR ANY CLAIM, DAMAGES OR OTHER LIABILITY, WHETHER IN AN ACTION OF CONTRACT, TORT OR OTHERWISE, ARISING FROM, OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE SOFTWARE OR THE USE OR OTHER DEALINGS IN THE SOFTWARE.

1.3 ユーザーサポート

FDPS を使用したコード開発に関する相談は fdps-support <at>mail.jmlab.jp で受け付けています (<at>は@に変更お願い致します)。以下のような場合は各項目毎の対応をお願いします。

1.3.1 コンパイルできない場合

ユーザーには以下の情報提供をお願いします。

- コンパイル環境
- コンパイル時に出力されるエラーメッセージ
- ソースコード (可能ならば)

1.3.2 コードがうまく動かない場合

ユーザーには以下の情報提供をお願いします。

- 実行環境
- 実行時に出力されるエラーメッセージ
- ソースコード (可能ならば)

1.3.3 その他

思い通りの性能がでない場合やその他の相談なども、上のメールアドレスにお知らせください。

第2章 FDPS概要

この章ではFDPSの概要を記述する。FDPSの開発目的、FDPSの基本的な考えかた、FDPSを使用して作成したコードの動作について概説する。

2.1 開発目的

粒子シミュレーションは、重力 N 体シミュレーション、SPH シミュレーション、渦糸法、MPS 法、分子動力学シミュレーションなど理学工学の様々な分野で使用されている。より大きい空間スケール、より高い空間分解能 (または質量分解能)、より長い時間スケールの物理現象を追跡するために、高性能な粒子シミュレーションコードへの要請はますます強くなっている。

高性能な粒子シミュレーションコードを組むためには、シミュレーションコードの大規模並列化を避けることはできない。粒子シミュレーションコードの大規模並列化をする際には、ロードバランスのため動的領域分割、領域分割に合わせた粒子交換、ノード間通信の削減と最適化、キャッシュ利用効率の向上、SIMD ユニット利用効率の向上、アクセラレータへの対応など、数多くの困難な処理を行う必要がある。現在、研究グループは個別にこれらの処理へ対応している。

しかし、上記の処理は粒子シミュレーション共通のものである。FDPSの開発目的は、これらの処理を高速に行うライブラリを提供し、大規模並列化への対応に追われていた研究者の負担を軽くすることである。FDPSを使うことで、研究者がよりクリエイティブな仕事に専念できるようになれば、幸いである。

2.2 基本的な考えかた

ここでは FDPS の基本的な考えかたについて記述する。

2.2.1 大規模並列粒子シミュレーションの手順

まず FDPS において、大規模並列粒子シミュレーションがどのような手順で行われることを想定しているかを記述する。粒子シミュレーションは、以下のような微分方程式を時間発展させるものである。

$$\frac{d\mathbf{u}_i}{dt} = \sum_j f(\mathbf{u}_i, \mathbf{u}_j) + \sum_s g(\mathbf{u}_i, \mathbf{v}_s)$$
(2.1)

ここで u_i は粒子 i の物理量ベクトルであり、この物理量には質量、位置、速度など粒子が持つあらゆる物理量が含まれる。関数 f は粒子 j から粒子 i への作用を規定する。以後、作用を受ける粒子を i 粒子、作用を与える粒子を j 粒子と呼ぶことにする。 v_s は i 粒子から十分遠方にある粒子を i つの粒子としてまとめた粒子 (以後、この粒子を超粒子と呼ぶ)の物理量ベクトルである。関数 g は超粒子から i 粒子への作用を規定する。式 (2.1) の第 2 項は、重力やクーロン力など無限遠まで到達する長距離力の場合はゼロではない。しかし流体の圧力のような短距離力はゼロである。

大規模並列化された粒子シミュレーションコードは以下の手順で式 (2.1) を時間発展させる。ここではデータの入出力や初期化は省略している。

- 1. 以下の2段階の手順でどのプロセスがどの粒子の式(2.1)を時間発展させるか決める。
 - (a) プロセスの間でロードバランスを取れるように、シミュレーションで扱っている 空間の領域を分割し、各プロセスの担当領域を決める(領域分割)。
 - (b) 各プロセスが、自分の担当する領域に存在する全粒子の物理量ベクトル u_i を持つように、他のプロセスと物理量ベクトル u_i を交換する (粒子交換)。
- 2. 各プロセスは、自分の担当する全粒子の式 (2.1) の右辺を計算するのに必要な j 粒子の物理量ベクトル \mathbf{u}_j と超粒子の物理量ベクトル \mathbf{v}_s を他のプロセスと通信することで集めて、j 粒子のリストと超粒子のリスト (まとめて相互作用リストと呼ぶ) を作る (相互作用リストの作成)。
- 3. 各プロセスは自分の担当する全粒子に対して、式 (2.1) の右辺を計算し、 $d\mathbf{u}_i/dt$ を求める (相互作用の計算)。
- 4. 各プロセスは、自分の担当する全粒子の物理量ベクトル \mathbf{u}_i とその時間導関数 $d\mathbf{u}_i/dt$ を使って、全粒子の時間積分を実行し、次の時刻の物理量ベクトル \mathbf{u}_i を求める (時間 積分)。
- 5. 手順1に戻る。

2.2.2 ユーザーと FDPS の役割分担

FDPS は、プロセス間の通信が発生する処理は FDPS が担当し、プロセス間の通信の発生しない処理はユーザーが担当するという役割分担を基本としている。従って、前節に挙げた、領域分割・粒子交換 (項目 1)・相互作用リストの作成 (項目 2) を FDPS が、相互作用の計算 (項目 3)・時間積分 (項目 4) をユーザーが担当することになる。ユーザーは FDPS の API を呼び出すだけで、大規模並列化に関わる煩雑な処理を避けつつ、高性能な任意の相互作用の粒子シミュレーションコードを手に入れることができる。

2.3. コードの動作 第 2. FDPS 概要

2.2.3 ユーザーのやること

ユーザーが FDPS を使って粒子シミュレーションコードを作成するときにやることは以下の項目である。

- 粒子の定義 (第5章)。粒子の持つ物理量 (式 (2.1) で言えば u_i) の指定。例えば質量、位置、速度、加速度、元素組成、粒子サイズ、など。
- 相互作用の定義 (第5章)。粒子間の相互作用 (式 (2.1) で言えばで関数 f,g) を指定。例えば、重力、クーロン力、圧力、など。
- FDPSのAPIの呼出(第8章)

2.2.4 補足

式 (2.1) の右辺は 2 粒子間相互作用の重ね合わせである。従って、FDPS の API を呼ぶだけでは、3 つ以上の粒子の間の相互作用の計算を行うことはできない。しかし、FDPS はネイバーリストを返す API を用意している。ネイバーリストを用いれば、ユーザーはプロセス間の通信の処理をすることなく、このような相互作用の計算をできる。

第2.2.1 節で示した手順は、全粒子が同じ時間刻みを持っている。そのため、FDPSの API を呼び出すだけでは、独立時間刻みで時間積分を効率的に行うことができない。しかし、上と同じくネイバーリストを返す API があるため、Particle Particle Particle Tree 法を用いて独立時間刻みを実装することは可能であろう。

2.3 コードの動作

ここでは FDPS を使用して作成したコードの動作の概略を記述する。まずはじめに C++ で記述された FDPS 本体の動作の概略を説明し、その後、Fortran/C 言語 インターフェース の動作を解説する。

2.3.1 FDPS 本体

FDPS 本体のコードには4つのモジュール $^{i\pm 1}$ がある。3つは FDPS のモジュールで、1つはユーザー定義のモジュールである。まとめると以下のようになる。

- 領域クラス:全プロセスが担当する領域の情報と、領域分割を行う API を持つ
- 粒子群クラス:全粒子の情報と、プロセスの間での粒子交換を行う API を持つ

 $^{^{\}pm 1)}$ 1 つの大きな機能を提供するためのデータと手続きの集まりという意味。FDPS ではモジュールを C++のクラス機能によって実現している。

2.3. コードの動作 第 2. FDPS 概要

● 相互作用ツリークラス: 粒子分布から作られたツリー構造と、相互作用リストを作成 する API を持つ

● ユーザー定義クラス: ある1粒子を定義するクラス、粒子間の相互作用を定義する関数オブジェクトを持つ

これら4つのモジュールの間で情報がやり取りされる。これは図2.1で概観できる。図2.1に示された情報のやりとりは、第2.2.1節に記述された手順1から3と、これらの手順以前に行われる手順(手順0とする)に対応する。以下はこれらの手順の詳細な記述である。

- 0. ユーザー定義クラスのうち 1 粒子を定義するクラスが粒子群クラスへ、粒子間の相互作用を定義する関数オブジェクトが相互作用ツリークラスへ渡される。これはクラスの継承ではなく、粒子を定義するクラスは粒子群クラスのテンプレート引数として、粒子間の相互作用を定義する関数オブジェクトは相互作用ツリークラスの API の引数として渡される
- 1. 以下の2段階でロードバランスを取る
 - (a) 領域クラスが持つ領域分割の API が呼ばれる。このとき粒子情報が粒子群クラスから領域クラスへ渡される (赤字と赤矢印)
 - (b) 粒子群クラスが持つ粒子交換の API が呼ばれる。このとき領域情報が領域クラスから粒子群クラスへ渡される (青字と青矢印)
- 2. 相互作用ツリークラスが持つ相互作用リストを作成する API が呼ばれる。このとき領域情報が領域クラスから相互作用ツリークラスへ、粒子情報が粒子群クラスから相互作用ツリークラスへ渡される (緑字と緑矢印)
- 3. 相互作用ツリーククラスが持つ相互作用を定義した関数オブジェクトを呼び出す API が呼ばれる。相互作用計算が実行され、相互作用計算の結果が相互作用ツリークラス から粒子群クラスへ渡される (灰色の字と灰色矢印)

2.3.2 Fortran/C言語 インターフェース

次章以降で詳しく述べるが、前節で述べた API は Fortran インターフェース及び C 言語 インターフェースにも用意されている。したがって、Fortran 或いは C 言語においても、第 2.2.1 節に記述された手順は、対応する API の適切な呼び出しにより実現できる。

2.3. コードの動作 第 2. FDPS 概要

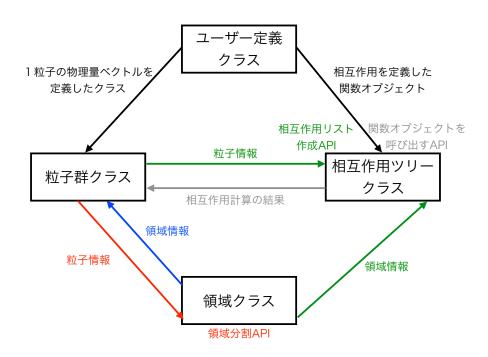


図 2.1: モジュールインターフェースと情報の流れの模式図。

第3章 Fortran/C言語 インターフェースのファイル構成と概要

この章では、FDPS Fortran/C言語 インターフェースのファイル構成と概要について記述する。はじめにソースファイルの構成とインターフェース概要について記述し、その後、ドキュメントとサンプルコードについて記述する。

3.1 ファイル構成と概要

3.1.1 FDPS 本体

FDPS 本体のソースファイルはディレクトリ src の下にある。FDPS 本体は C++ で記述されており、FDPS の標準機能関係のソースファイルはすべて src の 直下にある。FDPS には拡張機能が用意されており、現時点では、Particle Mesh と x86 版 Phantom-GRAPE が実装されている。それぞれのソースファイルが、 $src/particle_mesh$ と $src/phantom_GRAPE_x86$ にある。これら拡張機能は静的ライブラリとして使用される。そのため、各ディレクトリにおいて、ユーザ自身の手で、静的ライブラリを作成する必要がある。詳細は FDPS 本体の仕様書 ($doc/doc_specs_cpp_ja.pdf$) をご覧頂きたい。

3.1.2 Fortran インターフェース

前節で述べた機能の内、Fortran から利用可能なのは、FDPS 標準機能 (一部 API は除く)と拡張機能 Particle Mesh である。ユーザは Fortran インターフェースプログラムを通して、これらの機能を使用することとなる。この Fortran インターフェースは、ユーザがディレクトリ scripts の下に置かれたスクリプト gen_ftn_if.py を実行することで生成される (スクリプトの仕様は第 6 章で解説する)。このインターフェース生成用スクリプトは、FDPS を利用するにあたってユーザ自身が定義 (実装) しなければならない派生データ型 (ユーザ定義型;第 5 章参照) を解析して、インターフェースプログラムを生成する。したがって、ユーザ最初にしなければならないことはユーザ定義型の実装である。FDPSのFortran 用のインターフェースがライブラリの形ではなく、このようなインターフェースプログラムの生成という形で提供される理由については別途第 3.1.5 節で解説する。Fortran でユーザ定義型を実装するのに必要となる Fortran ファイルが src/fortran_interface/modules に、インターフェース生成時に設計図として使用されるファイル群が src/fortran_interface/blueprints に配置されている。

図 3.1 に、Fortran 用インターフェースプログラムの生成が正常に行われた場合の Fortran インターフェースのファイル構成とその役割を示している。図の破線で囲まれた 4つのファイル (FDPS_module.F90, FDPS_ftn_if.cpp, FDPS_Manipulators.cpp, main.cpp) がスクリプトによって生成される Fortran インターフェースプログラムであり、 $f_main.F90$ がユーザ側が用意するプログラムである。図の点線で囲まれたファイル (FDPS_vector.F90、FDPS_matrix.F90、FDPS_super_particle.F90 等) は、前述したように、ユーザがユーザ定義型およびユーザ定義関数 (第 2 章参照) を記述するのに必要な派生データ型の定義を与える。以下、それぞれのインターフェースプログラムの役割について説明を行う。

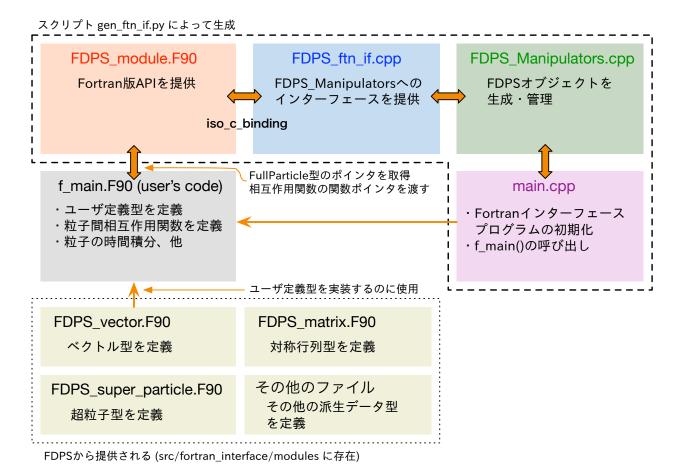


図 3.1: Fortran インターフェースとユーザコードの関係。

まず FDPS_Manipulators.cpp と main.cpp について説明する。FDPS 本体は C++で記述されているため、第 2 章「FDPS 概要」で説明した領域クラス、粒子群クラス、相互作用ツリークラスの C++オブジェクトは、すべて C++ファイル内で生成し、管理する必要がある。これを行うのが、FDPS_Manipulators.cpp である。同様の理由によって、実行プログラムの main 関数は C++ファイルに置く必要がある。そのため、main.cpp が生成される。この main.cpp では f_main() という名称の Fortran のサブルーチンを呼び出す。したがって、ユーザは Fortran サブルーチン f_main() を用意し、その中にユーザコードを実装する必要がある。詳細は第 8 章「API 仕様一覧」に譲るが、FDPS_Manipulators.cpp で生成される C++オブジェクトは、Fortran の整数変数に割り当てられる。したがって、ユーザはこれら

のオブジェクトを整数変数を使って管理することとなる。

次に FDPS_ftn_if.cpp について説明する。Fortran は C++の関数を直接呼び出して使用することはできないが、Fortran 2003 の機能 (Fortran モジュール iso_c_binding で提供される機能のこと) を使用することで、C 言語の関数を呼び出すことが可能になる。そこで、本 FDPS Fortran インターフェースでは、FDPS_Manipulators.cpp 内で定義される各種の C++関数の C 言語インターフェースを別途用意し、これらを Fortran から呼び出して、FDPS を操作する仕組みとした。これら C 言語インターフェースが FDPS_ftn_if.cpp に実装されている。

最後に、FDPS_module.F90 について説明する。FDPS_module.F90 は、C言語インターフェースを呼び出すための派生データ型 FDPS_controller をユーザに提供する。この FDPS_controller は、Fortran 2003のクラス (メンバ関数を持つ派生データ型のこと) であり、そのメンバ関数が FDPS の Fortran 用インターフェースを与える。メンバ関数、すなわち、Fortran インターフェースの一覧は第8章「API 仕様一覧」で記述する。FDPS_controller は、FDPS_module.F90 において、以下のように定義されている (リスト 3.1):

Listing 3.1: FDPS_module.F90 の構造

```
1 module FDPS_module
2
    use, intrinsic :: iso_c_binding
3
      implicit none
4
      !**** FDPS controller
5
6
      type, public :: FDPS_controller
7
      contains
8
         ! APIs are defined here.
9
10
11
      end type FDPS_controller
12
13 end module FDPS_module
```

見やすさのため、上記のリストにおいて、メンバ関数の宣言部の記述は省略している。実際には、各メンバ関数の宣言が、文字列 contains と文字列 end type FDPS_controller の間の領域に記述される。このような仕様のため、ユーザはユーザコードにおいて、以下の手順で Fortran インターフェースを使用する必要がある:

- (1) モジュール FDPS_module を use する
- (2) クラス FDPS_controller のオブジェクトを生成する
- (3) 生成した FDPS_controller オブジェクトのメンバ関数を呼び出す

最も単純な使用例をリスト 3.2 に示す:

Listing 3.2: Fortran インターフェースの使用例

```
1 subroutine f_main()
2    use FDPS_module ! Step (1)
3    implicit none
4    type(FDPS_controller) :: fdps_ctrl ! Step (2)
5
6    ! Call Fortran interface
```

```
call fdps_ctrl%PS_initialize() ! Step (3)
```

9 end subroutine f_main

リスト中にコメントで示された番号は、上の手順の番号に対応している。

3.1.3 C言語 インターフェース

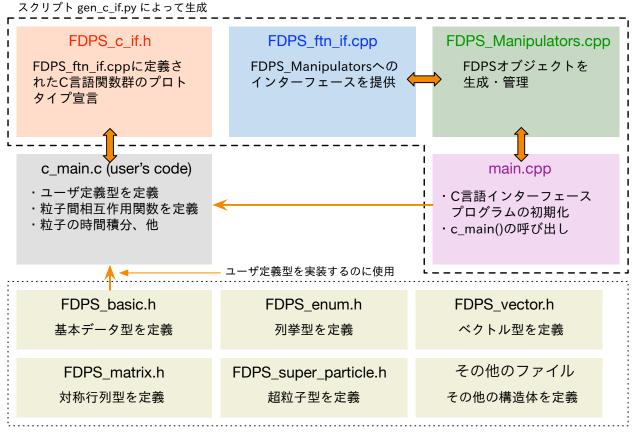
C言語の場合も Fortran の場合と全く同様に、C言語 インターフェースプログラムを通して、FDPS の機能を使用することになる。C言語 インターフェースプログラムの生成は、ユーザがディレクトリ scripts の下に置かれたスクリプト gen_c_if.py を実行することで行われる。このスクリプトは、FDPS を利用するにあたってユーザ自身が定義 (実装) しなければならない構造体 (同様にユーザ定義型と呼称) を解析して、インターフェースプログラムを生成する。C言語でユーザ定義型を実装するのに必要となる C言語へッダーファイルが src/c_interface/headers に、インターフェース生成時に設計図として使用されるファイル群が src/c_interface/blueprints に配置されている。

図 3.2 に、C 言語用インターフェースプログラムの生成が正常に行われた場合の C 言語 インターフェースのファイル構成とその役割を示している。図の破線で囲まれた 4つのファイル (FDPS_c_if.h, FDPS_ftn_if.cpp, FDPS_Manipulators.cpp, main.cpp) がスクリプトによって生成される C 言語インターフェースプログラムであり、c_main.c がユーザ側が用意するプログラムである。図の点線で囲まれたファイル (FDPS_basic.h、FDPS_enum.h、FDPS_vector.h、FDPS_matrix.h、FDPS_super_particle.h等) は、前述したように、ユーザがユーザ定義型およびユーザ定義関数 (第 2 章参照) を記述するのに必要な構造体の定義を与えるものである。図からわかるように、ファイル構成は、Fortran インターフェースプログラムと非常に類似した構成となっており (図 3.1 参照)、特に同名のファイルの役割は Fortran インターフェースで説明したファイルと全く同じである。以下、異なる部分についての注意書きのみを記す。

- 実行ファイルの main 関数は main.cpp にある。この main.cpp では c_main() という名称 の void 関数を呼び出す。したがって、ユーザは void 関数 c_main() を用意し、その中に ユーザコードを実装する必要がある。
- FDPSのC言語用 APIのプロトタイプ宣言は FDPS_c_if.h に記述されている。したがって、ユーザは FDPS の機能を利用するため、このファイルをインクルードする必要がある。FDPS_c_if.h では、FDPS が提供する構造体の定義が記述されたヘッダーファイル群 (FDPS_basic.h等) がインクルードされているため、ユーザはこのファイルのみをインクルードすれば、これら構造体をユーザコードの中で利用することができる。

3.1.4 Fortran/C言語 インターフェースを使ったコード開発の流れ

本節では、FDPSのFortran/C言語 インターフェースを使ったユーザコード開発の流れについて記述する。大まかな流れは以下のようになる:



FDPSから提供される (src/c_interface/headers に存在)

図 3.2: C言語 インターフェースとユーザコードの関係。

[1] ユーザ定義型の実装

前節で述べた通り、FDPSのFortran/C言語インターフェースを生成するためには、はじめにユーザ定義型を実装しなければならない。ユーザ定義型はFortranでFDPSを利用する場合には派生データ型で、C言語でFDPSを利用する場合には構造体として実装する。ユーザ定義型の記述方法の詳細は、第5章で説明する。

[2] インターフェースプログラムの生成

ユーザ定義型の実装が完了したら、インターフェース生成用スクリプト gen_ftn_if.py または gen_c_if.py を使って、インターフェースプログラムを生成する。生成が完了した時点で、ユーザは FDPS の Fortran/C 言語用インターフェースをユーザコードの中で使用することができるようになる。スクリプトの使用法と仕様については第6章で説明する。

[3] ユーザ定義関数の実装

ユーザは相互作用を記述する関数 (ユーザ定義関数) を実装しなければならない。ユーザ 定義関数は、Fortran ではサブルーチン、C 言語では void 関数として実装する。ユーザ 定義関数の記述方法の詳細は、第5章で説明する。

[4] ユーザコードの開発

ユーザ定義型、ユーザ定義関数、FDPS API を用いて、ユーザが行いたい粒子シミュレーションコードを開発する。この際、次の点に注意して開発を行う必要がある:

- ユーザコードは Fortran のサブルーチン f_main()、或いは、C 言語の void 関数 c_main() の中に実装しなければならない。
- FDPS Fortran インターフェースの API は、クラス FDPS_controller のメンバ関数 として提供される。したがって、FDPS API はメンバ関数を呼び出して使用する。一方、FDPS C言語 インターフェースの API のプロトタイプ宣言は、FDPS_c_if.h でなされているため、このファイルをインクルードすることで API を呼び出すことが可能となる。

Fortran インターフェースを用いたコードの例に関しては、sample/fortran の下で提供されているサンプルコードを参照して頂きたい (第 3.3 節も参照のこと)。一方、C 言語インターフェースを用いたサンプルコードは、sample/C の下に用意されている。

[5] コンパイル

ユーザコードの実装が完了したら、コンパイルを行い、実行プログラムを得る。前節で述べたように、インターフェースプログラムは C++言語と、Fortran 言語或いは C 言語のソースファイルが混在した構成となっており、単一の言語のみで構成されたプログラムとは異なる仕方でコンパイルする必要がある。この点に関しての詳細は、第7章で解説する。FDPS ではコンパイル時のマクロ定義を使い、いくつかの設定を行うことが可能である。これに関しても、第7章で解説する。拡張機能 Particle Mesh を使用する場合には、事前に必要なライブラリをインストールし、コンパイル時に適切にライブラリを指定することが必要である。

[6] 実行

コンパイルして得られる実行ファイルは、通常の実行ファイルと違いはない。ユーザが 利用している計算機環境の利用規則に則って、実行ファイルを実行する。

3.1.5 インターフェースプログラム生成の必要性

前々節で述べたように、FDPSのFortran/C言語用インターフェースはライブラリの形で提供されるものではなく、インターフェースプログラムのソースコードの形で提供される。本節では、この理由について解説を行う。

まず、準備として、C++での FDPS の使用について概説する。第 2 章 2.2.3 節で述べた通り、FDPS ではユーザは粒子や相互作用の定義を自由に行うことができ、これによって、FDPS は様々なタイプの粒子シミュレーションに対して適用可能となっている。この自由度を実現するため、FDPS 本体の関数は C++のテンプレート機能を用いて記述されている。ここで、テンプレート機能とは、Fortran でいうサブルーチンや関数 (或いは C 言語の関数) に、(変数ではなく) データ型を引数として受け取れるようにする機能のことである。この機能によって、C++では仮のデータ型を使用して関数を記述することが可能となる (この仮の

データ型はコンパイル時に具体的なデータ型になってさえいればよい)。また、FDPS 本体は C++のヘッダファイルの形で提供される。したがって、C++で FDPS を使用する場合、ユーザは FDPS のヘッダファイルをユーザコードの中でインクルードし、FDPS API のテンプレート引数にユーザが定義した粒子型を指定して使用する。ユーザコードのコンパイル時には、FDPS API の関数で使用されるすべての変数のデータ型が決定されているため、コンパイラは問題なくユーザプログラムをコンパイルすることが可能となっているのである。

FortranやC言語にはテンプレート機能に相当するものは存在しないため、仮の(或いは、未定の)データ型を用いてサブルーチンや関数を実装する、ということはFortranやC言語では不可能である。これが、Fortran/C言語用インターフェースをライブラリの形で提供できない1つの理由である。我々は、FortranやC言語においてもユーザが粒子や相互作用の定義を自由に行えるようにするため、ユーザが実装した粒子の派生データ型/構造体等を調べ、それに応じて適切なAPIを自動的に生成する方法を採用している。

もう1つの理由は、C++で実装された FDPS をそのまま使用しているからである。C++で記述された FDPS と Fortran 或いは C 言語のプログラムの間でデータをやり取りするためには、Fortran や C 言語で記述された粒子型と同等な粒子クラスを C++側に用意する必要がある。これにもユーザが実装した派生データ型や構造体を解析して生成するという作業が必要となる。

以上の理由により、FDPS Fortran/C 言語 インターフェースは、ソースコードで提供される形となっている。

3.2 ドキュメント

ドキュメント関係のファイルはディレクトリ doc の下にある。サンプルコードを使って FDPS Fortran インターフェースの基本的な使用法を解説するチュートリアル文書が doc_tutorial_ftn_ja.pdf である。C言語 インターフェースの基本的な使用方法についてのチュートリアル文書は doc_tutorial_c_ja.pdf である。仕様書 (本文書) が doc_specs_ftn_ja.pdf である。

3.3 サンプルコード

Fortran と C 言語のサンプルコードが、それぞれ、ディレクトリ sample/fortran 及び sample/c の下にある。サンプルコードは4つ用意されており、それぞれ、無衝突系の重力 N 体シミュレーションコード (sample/fortran/nbody, sample/c/nbody)、固定長カーネルを 使った SPH シミュレーションコード (sample/fortran/sph, sample/c/sph)、 $P^3M(Particle-Particle-Particle-Mesh)$ 計算用コード (sample/fortran/p3m, sample/c/p3m)、円盤銀河の N 体/SPH シミュレーションコード (sample/fortran/nbody+sph, sample/c/nbody+sph) と なっている。

第4章 FDPSで提供されるデータ型

FDPS Fortran/C言語 インターフェースでは独自のデータ型が定義されている。データ型には、ベクトル型、対称行列型、超粒子型、時間プロファイル型、列挙型がある。これらに加え、C言語では基本データ型もある。これらのデータ型は第5章で説明するユーザ定義型やユーザ定義関数の実装に必要となる他、いくつかの API の引数に指定したり、返り値を受け取る際に必要となる。

4.1 基本データ型 (C 言語のみ)

基本データ型はC言語インターフェースでのみ提供されるデータ型で、fdps_s32, fdps_u32, fdps_f32, fdps_s64, fdps_u64, fdps_f64の6種類がある。これらは、FDPSが提供する他の構造体の定義に使用される。src/c_interface/headers/FDPS_basic.hにおいて、以下のように定義されている。

Listing 4.1: 基本データ型 (C 言語のみ)

```
1 #pragma once
2
3 /* 32 bit data types */
4 typedef int
                        fdps_s32;
5 typedef unsigned int fdps_u32;
6 #ifdef PARTICLE_SIMULATOR_ALL_64BIT_PRECISION
7 typedef double
                        fdps_f32;
8 #else
9 typedef float
                        fdps_f32;
10 #endif
12 /* 64 bit data types */
13 typedef long long int
                                   fdps_s64;
14 typedef unsigned long long int fdps_u64;
15 typedef double
                                   fdps_f64;
```

ただし、マクロ PARTICLE_SIMULATOR_ALL_64BIT_PRECISION は現時点では正式にはサポートしておらず、C 言語インターフェースが正しく動作するのは、このマクロが未定義の場合のみである。

4.2 ベクトル型

ベクトル型は fdps_f32vec と fdps_f64vec の 2 種類がある。これらは、Fortran では src/fortran_interface/modules/FDPS_vector.F90、C言語では src/c_interface/headers/

FDPS_vecotr.hで、以下のように定義される。それぞれ、32 bit と 64 bit の浮動小数点数をメンバ変数として持つベクトルを表す。ベクトルの空間次元はデフォルトでは3であり、コンパイル時にマクロ PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION が定義されている場合のみ2となる。

Listing 4.2: ベクトル型 (Fortran)

```
1 module fdps_vector
2
      use, intrinsic :: iso_c_binding
3
      implicit none
4
5
      type, public, bind(c) :: fdps_f32vec
  #ifdef PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION
7
         real(kind=c_float) :: x,y
8
   #else
9
         real(kind=c_float) :: x,y,z
10 #endif
11
      end type fdps_f32vec
12
13
      type, public, bind(c) :: fdps_f64vec
14 #ifdef PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION
15
         real(kind=c_double) :: x,y
16 #else
17
         real(kind=c_double) :: x,y,z
18 #endif
19
      end type fdps_f64vec
20
21 end module fdps_vector
```

Listing 4.3: ベクトル型 (C 言語)

```
1 #pragma once
2 #include "FDPS_basic.h"
4 //**** PS::F32vec
5 typedef struct
6 #ifdef PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION
7
      fdps_f32 x,y;
8 #else
9
      fdps_f32 x,y,z;
10 #endif
11 } fdps_f32vec;
12
13 //**** PS::F64vec
14 typedef struct {
15 #ifdef PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION
16
      fdps_f64 x,y;
17 #else
18
      fdps_f64 x,y,z;
19 #endif
20 } fdps_f64vec;
```

Fortran においては、これらベクトル型に対して、代入 (=) と演算子 (+,-,*,/) が表 4.1 のように拡張されている。詳細に関しては、FDPS_vector.F90 を参照して頂きたい。

記号	左辺	右辺	定義	
	ベクトル	スカラー [†]	左辺に右辺を代入する。但し、右辺がスカラー	
=	ベクトル	スカラー値の配列‡	の場合、左辺の各成分すべてに右辺を代入し、 右辺が配列の場合、配列の先頭から順に、左辺	
	ベクトル	ベクトル	ベクトルの x,y(,z) 成分に配列要素を代入。 	
	ベクトル	スカラー値の配列	左辺と右辺を加算する。但し、オペランドの1	
+	スカラー値の配列	ベクトル	_ つが配列の場合、配列の各要素は先頭から順番	
	ベクトル	ベクトル	රි.	
	なし	ベクトル	何も行わない	
	ベクトル	スカラー値の配列	左辺から右辺を減算する。但し、オペランドの	
_	スカラー値の配列	ベクトル	1 つが配列の場合、配列の各要素は先頭から 番に、ベクトル成分 x,y(,z) に対応するもの。	
	ベクトル	ベクトル	する。 	
	なし	ベクトル	ベクトルの各成分の符号反転	
	ベクトル	スカラー		
*	スカラー	ベクトル		
	ベクトル	スカラー値の配列	 内積。但し、オペランドの 1 つが配列の場合、	
	スカラー値の配列	ベクトル	配列の各要素は先頭から順番に、ベクトル成分 x,y(,z) に対応するものとする。	
	ベクトル	ベクトル	()=)	
/	ベクトル	スカラー	左辺を右辺で除算する	

[†]ここでスカラー型はFortranの基本データ型である必要がある。

表 4.1: ベクトル型に対して拡張された代入と演算子

4.3 対称行列型

対称行列型には、fdps_f32mat と fdps_f64mat の2種類がある。Fortranではsrc/fortran_interface/modules/FDPS_matrix.F90、C言語ではsrc/c_interface/headers/FDPS_matrix.h において、以下のように定義される。それぞれ、32 bit と 64 bit の浮動小数点数をメンバ変数として持つ対称行列を表す。行列の次元はデフォルトでは3であり、コンパイル時にマクロ PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION が定義されている場合のみ2となる。

Listing 4.4: 対称行列型 (Fortran)

[‡]配列の要素数は、コンパイル時にマクロ PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION が定義されている場合には 2、それ以外の場合には 3 である必要がある。

```
1 module fdps_matrix
2
      use, intrinsic :: iso_c_binding
3
      implicit none
4
5
      !**** PS::F32mat
      type, public, bind(c) :: fdps_f32mat
7
  #ifndef PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION
8
         real(kind=c_float) :: xx,yy,zz,xy,xz,yz
9
10
         real(kind=c_float) :: xx,yy,xy
11 #endif
12
      end type fdps_f32mat
13
14
      !**** PS::F64mat
      type, public, bind(c) :: fdps_f64mat
15
16 #ifndef PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION
17
         real(kind=c_double) :: xx,yy,zz,xy,xz,yz
18 #else
19
         real(kind=c_double) :: xx,yy,xy
20 #endif
      end type fdps_f64mat
21
22
23 end module fdps_matrix
```

Listing 4.5: 対称行列型 (C 言語)

```
1 #pragma once
2 #include "FDPS_basic.h"
4 //**** PS::F32mat
5 typedef struct {
6 #ifndef PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION
7
      fdps_f32 xx,yy,zz,xy,xz,yz;
8 #else
9
      fdps_f32 xx,yy,xy;
10 #endif
11 } fdps_f32mat;
12
13 //**** PS::F64mat
14 typedef struct {
15 #ifndef PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION
16
      fdps_f64 xx,yy,zz,xy,xz,yz;
17 #else
      fdps_f64 xx,yy,xy;
18
19 #endif
20 } fdps_f64mat;
```

Fortran では、これら対称行列型に対して、代入 (=) と演算子 (+,-,*,-) が表 4.2 のように拡張されている。詳細に関しては、FDPS_matrix.F90 を参照して頂きたい。

記号	左辺	右辺	定義
=	対称行列	スカラー†	左辺に右辺を代入。但し、右辺がスカラーの場合、左辺の各成分すべ てに右辺が代入される。
	対称行列	対称行列	
	対称行列	対称行列	左辺に右辺を加算する
	なし	対称行列	何も行わない
	対称行列	対称行列	左辺から右辺を減算する
	なし	対称行列	行列の各成分の符号反転
*	対称行列	スカラー	スカラー行列積
	スカラー	対称行列	
	対称行列	対称行列	行列積
/	対称行列	スカラー	左辺を右辺で除算する

[†]ここでスカラー型はFortranの基本データ型である必要がある。

表 4.2: 対称行列型に対して拡張された代入と演算子

4.4 超粒子型

超粒子型は、粒子-超粒子間の相互作用計算を記述するのに必要となるデータ型である。ここで超粒子とは、FDPS 本体で長距離力計算の方法として採用しているツリー法において、力を計算する対象の粒子に対して、十分に遠くにある複数の粒子を1つの粒子として表現したものである。これら超粒子型は、FDPS 本体から超粒子のデータを受け取るのに使用される。

超粒子型には、fdps_spj_monopole、fdps_spj_quadrupole、fdps_spj_monopole_geomcen、fdps_spj_dipole_geomcen、fdps_spj_quadrupole_geomcen、fdps_spj_monopole_scatter、fdps_spj_quadrupole_scatter、fdps_spj_monopole_cutoffがある。Fortranではsrc/fortran_interface/modules/FDPS_super_particle.F90、C言語ではsrc/c_interface/headers/FDPS_super_particle.hにおいて、以下のように定義される。ここで、各超粒子型のメンバ変数には前述したベクトル型および対称行列型が使用されていることに注意されたい。

Listing 4.6: 超粒子型 (Fortran)

```
1 module fdps_super_particle
2    use, intrinsic :: iso_c_binding
3    use fdps_vector
4    use fdps_matrix
5    implicit none
6
```

```
7
      !**** PS::SPJMonopole
8
      type, public, bind(c) :: fdps_spj_monopole
9
         real(kind=c_double) :: mass
10
         type(fdps_f64vec) :: pos
11
      end type fdps_spj_monopole
12
13
      !**** PS::SPJQuadrupole
14
      type, public, bind(c) :: fdps_spj_quadrupole
15
         real(kind=c_double) :: mass
16
         type(fdps_f64vec)
                            :: pos
17
         type(fdps_f64mat)
                            :: quad
18
      end type fdps_spj_quadrupole
19
20
      !**** PS::SPJMonopoleGeometricCenter
      type, public, bind(c) :: fdps_spj_monopole_geomcen
21
22
         integer(kind=c_long_long) :: n_ptcl
23
         real(kind=c_double) :: charge
24
         type(fdps_f64vec) :: pos
25
      end type fdps_spj_monopole_geomcen
26
27
      !**** PS::SPJDipoleGeometricCenter
28
      type, public, bind(c) :: fdps_spj_dipole_geomcen
29
         integer(kind=c_long_long) :: n_ptcl
30
         real(kind=c_double) :: charge
31
         type(fdps_f64vec) :: pos
32
         type(fdps_f64vec) :: dipole
33
      end type fdps_spj_dipole_geomcen
34
35
      ! **** PS::SPJQuadrupoleGeometricCenter
36
      type, public, bind(c) :: fdps_spj_quadrupole_geomcen
         integer(kind=c_long_long) :: n_ptcl
37
38
         real(kind=c_double) :: charge
39
         type(fdps_f64vec) :: pos
40
         type(fdps_f64vec) :: dipole
41
         type(fdps_f64mat) :: quadrupole
42
      end type fdps_spj_quadrupole_geomcen
43
44
      !**** PS::SPJMonopoleScatter
      type, public, bind(c) :: fdps_spj_monopole_scatter
45
         real(kind=c_double) :: mass
46
         type(fdps_f64vec) :: pos
47
48
      end type fdps_spj_monopole_scatter
49
50
      !**** PS::SPJQuadrupoleScatter
51
      type, public, bind(c) :: fdps_spj_quadrupole_scatter
52
         real(kind=c_double) :: mass
53
         type(fdps_f64vec) :: pos
         type(fdps_f64mat) :: quad
54
55
      end type fdps_spj_quadrupole_scatter
56
      !**** PS::SPJMonopoleCutoff
57
      type, public, bind(c) :: fdps_spj_monopole_cutoff
58
59
         real(kind=c_double) :: mass
60
         type(fdps_f64vec) :: pos
61
      end type fdps_spj_monopole_cutoff
```

62

end module fdps_super_particle

Listing 4.7: 超粒子型 (C言語)

```
1 #pragma once
 2 #include "FDPS_basic.h"
 3 #include "FDPS_vector.h"
 4 #include "FDPS_matrix.h"
 5
 6 #ifdef PARTICLE_SIMULATOR_SPMOM_F32
7 typedef fdps_s32
                        fdps_sSP;
 8 typedef fdps_f32
                        fdps_fSP;
9 typedef fdps_f32vec fdps_fSPvec;
10 typedef fdps_f32mat fdps_fSPmat;
11 #else
12 typedef fdps_s64
                        fdps_sSP;
13 typedef fdps_f64
                        fdps_fSP;
14 typedef fdps_f64vec fdps_fSPvec;
15 typedef fdps_f64mat fdps_fSPmat;
16 #endif
17
18 //**** PS::SPJMonopole
19 typedef struct {
20
      fdps_fSP mass;
      fdps_fSPvec pos;
21
22 } fdps_spj_monopole;
23
24 //**** PS::SPJQuadrupole
25 typedef struct {
26
      fdps_fSP mass;
27
      fdps_fSPvec pos;
28
      fdps_fSPmat quad;
29 } fdps_spj_quadrupole;
30
31 //**** PS::SPJMonopoleGeometricCenter
32 typedef struct {
      fdps_sSP n_ptcl;
33
34
      fdps_fSP charge;
35
      fdps_fSPvec pos;
36 } fdps_spj_monopole_geomcen;
37
38 //**** PS::SPJDipoleGeometricCenter
39 typedef struct {
40
      fdps_sSP n_ptcl;
41
      fdps_fSP charge;
42
      fdps_fSPvec pos;
43
      fdps_fSPvec dipole;
44 } fdps_spj_dipole_geomcen;
45
46 //**** PS::SPJQuadrupoleGeometricCenter
47 typedef struct {
      fdps_sSP n_ptcl;
48
49
      fdps_fSP charge;
50
      fdps_fSPvec pos;
51
      fdps_fSPvec dipole;
```

```
fdps_fSPmat quadrupole;
53 } fdps_spj_quadrupole_geomcen;
54
55 //**** PS::SPJMonopoleScatter
56 typedef struct {
      fdps_fSP mass;
57
58
      fdps_fSPvec pos;
59 } fdps_spj_monopole_scatter;
60
61 //**** PS::SPJQuadrupoleScatter
62 typedef struct {
      fdps_fSP mass;
63
64
      fdps_fSPvec pos;
      fdps_fSPmat quad;
65
66 } fdps_spj_quadrupole_scatter;
67
68 //**** PS::SPJMonopoleCutoff
69 typedef struct {
70
      fdps_fSP mass;
71
      fdps_fSPvec pos;
72 } fdps_spj_monopole_cutoff;
```

それぞれの超粒子型は、FDPS 本体の相互作用ツリークラスの種類と対応している。したがって、ユーザは生成した相互作用ツリーオブジェクトの種類に応じて、対応する超粒子型を用いる必要がある。相互作用ツリーオブジェクトの種類と超粒子型の対応関係を表 4.3 に示す。超粒子は長距離力の計算でのみ使用されるため、短距離力用のツリーはこの表に含まれていないことに注意されたい。他の種類の相互作用ツリーおよび相互作用ツリーオブジェクトを生成する方法に関しては、第8章8.4節のツリー用 API の説明とともに行う。

ツリーの種別	モーメント情報の計算方法†	相互作用範囲	超粒子型
Long-Monopole 型	単極子 (重心)	計算領域全域	fdps_spj_monopole
Long-Quadrupole 型	四重極子 (重心) まで	計算領域全域	fdps_spj_quadrupole
Long-MonopoleGeometricCenter 型	単極子 (幾何中心)	計算領域全域	fdps_spj_monopole_geomcen
Long-DipoleGeometricCenter 型	双極子 (幾何中心) まで	計算領域全域	fdps_spj_dipole_geomcen
Long-QuadrupoleGeometricCenter 型	四重極子 (幾何中心) まで	計算領域全域	fdps_spj_quadrupole_geomcen
Long-MonopoleWithScatterSearch 型‡	単極子 (重心)	計算領域全域	fdps_spj_monopole_scatter
Long-QuadrupoleWithScatterSearch 型‡	四重極子 (重心) まで	計算領域全域	fdps_spj_quadrupole_scatter
Long-MonopoleWithCutoff 型	単極子 (重心)	カットオフ半径内	fdps_spj_monopole_cutoff

[†]モーメントを粒子の重心を中心として計算する場合には「(重心)」、幾何中心を中心として計算する場合には「(幾何中心)」を付けて表している。

表 4.3: 長距離力計算用ツリーの種類と対応する超粒子型

[‡] ユーザ指定された半径を用いた近傍粒子探索が可能。

4.5 時間プロファイル型

時間プロファイル型は、FDPS 内部で行われる各種計算に要した時間を取得するのに使用される。時間プロファイル型は fdps_time_profile の 1 種類が存在し、Fortran では src/fortran_interface/modules/FDPS_time_profile.F90、C言語では src/c_interface/headers/FDPS_time_profile.h において、以下のように定義される。このデータ型はもっぱら時間取得用 API で使用される (詳細は第8章参照)。

Listing 4.8: 時間プロファイル型 (Fortran)

```
1 module fdps_time_profile
2
      use, intrinsic :: iso_c_binding
3
      implicit none
4
5
      !**** PS::TimeProfile
6
      type, public, bind(c) :: fdps_time_prof
7
         real(kind=c_double) :: collect_sample_particle
8
         real(kind=c_double) :: decompose_domain
9
         real(kind=c_double) :: exchange_particle
10
         real(kind=c_double) :: set_particle_local_tree
11
         real(kind=c_double) :: set_particle_global_tree
         real(kind=c_double) :: make_local_tree
12
13
         real(kind=c_double) :: make_global_tree
         real(kind=c_double) :: set_root_cell
14
         real(kind=c_double) :: calc_force
15
         real(kind=c_double) :: calc_moment_local_tree
16
17
         real(kind=c_double) :: calc_moment_global_tree
18
         real(kind=c_double) :: make_LET_1st
19
         real(kind=c_double) :: make_LET_2nd
20
         real(kind=c_double) :: exchange_LET_1st
21
         real(kind=c_double) :: exchange_LET_2nd
22
23
         real(kind=c_double) :: morton_sort_local_tree
24
         real(kind=c_double) :: link_cell_local_tree
25
         real(kind=c_double) :: morton_sort_global_tree
26
         real(kind=c_double) :: link_cell_global_tree
27
         real(kind=c_double) :: make_local_tree_tot
28
         ! = make_local_tree + calc_moment_local_tree
29
30
         real(kind=c_double) :: make_global_tree_tot
31
         real(kind=c_double) :: exchange_LET_tot
32
         ! = make_LET_1st + make_LET_2nd + exchange_LET_1st +
                exchange_LET_2nd
33
34
         real(kind=c_double) :: calc_force__core__walk_tree
35
36
         real(kind=c_double) :: calc_force__make_ipgroup
37
         real(kind=c_double) :: calc_force__core
38
         real(kind=c_double) :: calc_force__copy_original_order
39
40
         real(kind=c_double) :: exchange_particle__find_particle
41
         real(kind=c_double) :: exchange_particle__exchange_particle
42
43
         real(kind=c_double) :: decompose_domain__sort_particle_1st
```

```
44
         real(kind=c_double) :: decompose_domain__sort_particle_2nd
         real(kind=c_double) :: decompose_domain__sort_particle_3rd
45
46
         real(kind=c_double) :: decompose_domain__gather_particle
47
         real(kind=c_double) :: decompose_domain__setup
48
         real(kind=c_double) :: decompose_domain__determine_coord_1st
49
50
         real(kind=c_double) :: decompose_domain__migrae_particle_1st
         real(kind=c_double) :: decompose_domain__determine_coord_2nd
51
52
         real(kind=c_double) :: decompose_domain__determine_coord_3rd
53
         real(kind=c_double) :: decompose_domain_exchange_pos_domain
54
55
         real(kind=c_double) :: exchange_LET_1st__a2a_n
56
         real(kind=c_double) :: exchange_LET_1st__icomm_sp
57
         real(kind=c_double) :: exchange_LET_1st__a2a_sp
         real(kind=c_double) :: exchange_LET_1st__icomm_ep
58
         real(kind=c_double) :: exchange_LET_1st__a2a_ep
59
      end type fdps_time_prof
60
61
62 end module fdps_time_profile
```

Listing 4.9: 時間プロファイル型 (C言語)

```
//**** PS::TimeProfile
   typedef struct {
2
3
      double collect_sample_particle;
      double decompose_domain;
 4
      double exchange_particle;
5
6
      double set_particle_local_tree;
7
      double set_particle_global_tree;
8
      double make_local_tree;
      double make_global_tree;
9
      double set_root_cell;
10
11
      double calc_force;
12
      double calc_moment_local_tree;
13
      double calc_moment_global_tree;
      double make_LET_1st;
14
      double make_LET_2nd;
16
      double exchange_LET_1st;
      double exchange_LET_2nd;
17
      double write_back;
18
19
20
      double morton_sort_local_tree;
21
      double link_cell_local_tree;
22
      double morton_sort_global_tree;
23
      double link_cell_global_tree;
24
25
      double make_local_tree_tot; // = make_local_tree +
             calc_moment_local_tree
26
      double make_global_tree_tot;
27
      double exchange_LET_tot; // = make_LET_1st + make_LET_2nd +
             exchange_LET_1st + exchange_LET_2nd
28
      double calc_force__core__walk_tree;
29
30
      double calc_force__core__keep_list;
31
      double calc_force__core__copy_ep;
32
      double calc_force__core__dispatch;
```

```
33
      double calc_force__core__retrieve;
34
35
      double calc_force__make_ipgroup;
36
      double calc_force__core;
37
      double calc_force__copy_original_order;
38
39
      double exchange_particle__find_particle;
      double exchange_particle__exchange_particle;
40
41
42
      double decompose_domain__sort_particle_1st;
43
      double decompose_domain__sort_particle_2nd;
      double decompose_domain__sort_particle_3rd;
44
45
      double decompose_domain__gather_particle;
46
47
      double decompose_domain__setup;
      double decompose_domain__determine_coord_1st;
48
49
      double decompose_domain__migrae_particle_1st;
50
      double decompose_domain__determine_coord_2nd;
      double decompose_domain__determine_coord_3rd;
51
52
      double decompose_domain__exchange_pos_domain;
53
      double exchange_LET_1st__a2a_n;
54
      double exchange_LET_1st__icomm_sp;
55
56
      double exchange_LET_1st__a2a_sp;
      double exchange_LET_1st__icomm_ep;
57
58
      double exchange_LET_1st__a2a_ep;
59
60
      double add_moment_as_sp_local;
      double add_moment_as_sp_global;
61
62 } fdps_time_prof;
```

4.6 列挙型

本節では、FDPS Fortran/C 言語 インターフェースで定義されている列挙型について記述する。

4.6.1 境界条件型

境界条件型は、境界条件を指定する API set_boundary_condition (Fortran) または fdps_set_boundary_condition (C 言語) で使用される (第 8 章 8.3 節「領域情報オブジェクト用 API」参照)。Fortran では FDPS_module.F90 において、C 言語では src/c_interface/headers/FDPS_enum.h において、以下のように定義されている。

Listing 4.10: 境界条件型 (Fortran)

```
1 module FDPS_module
2   use, intrinsic :: iso_c_binding
3   implicit none
4
5   !* Enum types
```

```
6
      !**** PS::BOUNDARY_CONDITION
7
      enum, bind(c)
8
         enumerator :: fdps_bc_open
9
         enumerator :: fdps_bc_periodic_x
10
         enumerator :: fdps_bc_periodic_y
11
         enumerator :: fdps_bc_periodic_z
         enumerator :: fdps_bc_periodic_xy
12
         enumerator :: fdps_bc_periodic_xz
13
         enumerator :: fdps_bc_periodic_yz
14
15
         enumerator :: fdps_bc_periodic_xyz
16
         enumerator :: fdps_bc_shearing_box
17
         enumerator :: fdps_bc_user_defined
18
      end enum
19
20
  end module FDPS_module
```

Listing 4.11: 境界条件型 (C言語)

```
typedef enum {
      FDPS_BC_OPEN,
2
3
      FDPS_BC_PERIODIC_X,
4
      FDPS_BC_PERIODIC_Y,
5
      FDPS_BC_PERIODIC_Z,
6
      FDPS_BC_PERIODIC_XY,
7
      FDPS_BC_PERIODIC_XZ,
      FDPS_BC_PERIODIC_YZ,
8
      FDPS_BC_PERIODIC_XYZ,
9
10
      FDPS_BC_SHEARING_BOX,
11
      FDPS_BC_USER_DEFINED,
12 } FDPS_BOUNDARY_CONDITION;
```

表 4.4 に、Fortran の各列挙子に対応する境界条件を示す。C 言語の列挙子名は文字の大小を除き、Fortran の列挙子名と同じである。したがって、適切に読み替えて頂きたい。

4.6.2 相互作用リストモード型

相互作用リストモード型は、相互作用計算時に相互作用リストを使い回すかどうかを決定するためのデータ型である。これは、Fortranでは、ツリーオブジェクト用 API calc_force_all_and_write_back 及び calc_force_all において、C言語では、API fdps_calc_force_all_and_write_back 及び fdps_calc_force_all において、引数として使われる (第8章8.4節「ツリーオブジェクト用 API」参照)。このデータ型は、Fortranでは FDPS_module.F90において、C言語では src/c_interface/headers/FDPS_enum.h において、以下のように定義されている。

Listing 4.12: 相互作用リストモード型 (Fortran)

```
1 module FDPS_module
2    use, intrinsic :: iso_c_binding
3    implicit none
4
5    !* Enum types
```

列挙子	境界条件
fdps_bc_open	開放境界となる。デフォルトではこの境界条件となる。
fdps_bc_periodic_x	x 軸方向のみ周期境界、その他の軸方向は開放境界となる。周期の境界の下限は閉境界、上限は開境界となっている。この境界の規定はすべての軸方向にあてはまる。
fdps_bc_periodic_y	y 軸方向のみ周期境界、その他の軸方向は開放境界となる。
fdps_bc_periodic_z	z 軸方向のみ周期境界、その他の軸方向は開放境界となる。
fdps_bc_periodic_xy	x,y 軸方向のみ周期境界、その他の軸方向は開放境界となる。
fdps_bc_periodic_xz	x,z軸方向のみ周期境界、その他の軸方向は開放境界となる。
fdps_bc_periodic_yz	y,z軸方向のみ周期境界、その他の軸方向は開放境界となる。
fdps_bc_periodic_xyz	全方向周期境界条件。
fdps_bc_shearing_box	シアリングボックス境界条件 (<mark>現時点では未実装</mark>)。
fdps_bc_user_defined	ユーザ定義の境界条件 (<mark>現時点で未実装</mark>)。

表 4.4: 境界条件型の列挙子に対応する境界条件

```
6  !**** PS::INTERACTION_LIST_MODE
7  enum, bind(c)
8    enumerator :: fdps_make_list
9    enumerator :: fdps_make_list_for_reuse
10    enumerator :: fdps_reuse_list
11  end enum
12
13  end module FDPS_module
```

Listing 4.13: 相互作用リストモード型 (C 言語)

```
typedef enum {
    FDPS_MAKE_LIST,
    FDPS_MAKE_LIST_FOR_REUSE,
    FDPS_REUSE_LIST,
} FDPS_INTERACTION_LIST_MODE;
```

表 4.5 に、Fortan の各列挙子に対応する動作モードを示す。C 言語の列挙子名は Fortran の列挙子名と文字の大小を除き一致している。したがって、適切に読み替えて頂きたい。

列拳子	機能
fdps_make_list	相互作用リストを毎回作り相互作用計算を行う場合に用いる。相互作用リストの再利用はできない。デフォルトではこの動作が仮定される。
fdps_make_list_for_reuse	相互作用リストを再利用し相互作用計算を行いたい場合に用いる。このオプションを選択する事で FDPS は相互作用リストを作りそれを保持する。作成した相互作用リストはfdps_make_listfdps_make_listを用いて相互作用計算を行った際に破棄される。
fdps_reuse_list	事前に作成された相互作用リストを再利用して相互作用計算を行う。再利用される相互作用リストはfdps_make_list_for_reuseを選択時に作成した相互作用リストである。相互作用リストに含まれる超粒子のモーメント情報は最新の粒子情報で再計算されたものが使用される。

表 4.5: 相互作用リストモード型の列挙子に対応する動作モード

第5章 ユーザー定義型・ユーザー定義関数

本章では、ユーザーが定義しなければならない派生データ型 (Fortran) 或いは 構造体 (C言語) (ユーザ定義型) と相互作用関数 (ユーザ定義関数) について記述する。ユーザー定義型には、FullParticle 型、EssentialParticle 型、EssentialParticle 型、Force 型がある。また、ユーザー定義関数には、粒子-粒子相互作用を記述する calcForceEpEpと、粒子-超粒子間相互作用を記述する calcForceEpSp がある。本章で記述するのは、ユーザ定義型やユーザ定義関数を定義する際の規定である。FDPS は、ユーザ定義型が粒子の位置等、粒子計算に必須の物理量を持つことを仮定する。したがって、ユーザは FDPS に必須物理量がユーザ定義型のどのメンバ変数に対応するかを教える必要がある。また、FDPS 内部では、ユーザ定義型の間でデータのやりとりを行うが、それをユーザが指定した方法で行うことになる。したがって、ユーザはその方法をコードに書く必要がある。これら FDPS への指示や方法の記述はすべてコード内に特別な指示文 (FDPS 指示文) を記述することによって行う。以下、まずはじめにユーザ定義型について記述し、その後ユーザ定義関数について記述する。

5.1 ユーザ定義型

まず概要を述べる。FullParticle 型は、ある 1 粒子の情報すべてを持つ派生データ型 (Fortran) 或いは 構造体 (C 言語) であり、粒子群クラスのオブジェクトの生成に使用されるものである (第 2 章 2.3 節の手順 0)。EssentialParticleI 型、EssentialParticleJ 型、Force 型は粒子間の相互作用の定義を補助するものであり、それぞれ、相互作用を計算する際に i 粒子に必要な情報、相互作用を計算する際に j 粒子に必要な情報、相互作用の結果の情報を持つ派生データ型 (Fortran) 或いは 構造体 (C 言語) である。これらは FullParticle 型のサブセットであるため、これらを FullParticle 型で代用することも可能である。しかし、FullParticle 型は相互作用の定義に必要のないデータを多く含む場合も考えられるため、計算コストを軽減したいならば、これらの型を使用することを検討するべきである。

以下では、はじめにユーザ定義型を記述する上での共通の規則について記述する。その後、FullParticle 型、EssentialParticle I 型、Force 型の順で記述する。

5.1.1 共通規則

5.1.1.1 Fortran 文法に関する要請

本節では、ユーザ定義型となるために派生データ型が満たすべき最低限の Fortran 文法について記述する。第3章で述べた通り、本 FDPS Fortran インターフェースは、FDPS の C

言語インターフェースを通して、FDPS 本体とデータをやり取りする。このため、すべてのユーザ定義型は C 言語と (Fortran 2003 標準で)**interoperable** である必要がある。具体的には、ユーザ定義型となる派生データ型は次の条件を満たしている必要がある:

- (1) 派生データ型は bind(c) 属性を持たなければならない。
- (2) すべてのメンバ変数が interoperable なデータ型である。Fortran 2003 標準 (ISO/IEC 1539-1:2004(E))で定義される「C言語と interoperable な」データ型の一覧は本書表 8.1 や言語仕様書の第 15 節「Interoperability with C」で確認できる^{注 1)}ほか、GCC Wiki のページ GFortranStandards で紹介されている各種非公式文書 (ドラフト段階の言語仕様書) やGNU gfortran のオンラインドキュメントでも解説されている。「C言語と interoperable」な派生データ型をメンバ変数として持つことは可能である。
- (3) すべてのメンバ変数は allocatable 属性を持たない。
- (4) すべてのメンバ変数は pointer 属性を持たない。
- (5) メンバ関数を持たない。

加えて、FDPS 側からの要請として、次の条件を満たす必要がある:

- (6) 派生データ型はモジュール内で定義されている。
- (7) 派生データ型は public 属性を持つ。
- (8) メンバ変数として持たせることが可能な派生データ型はベクトル型と対称行列型 (第4章 参照) のみである。
- (9) 派生データ型は多次元配列をメンバ変数として持てない (これは将来のバージョンにおいて対応する予定である)。
- (10) メンバ変数の (1 次元) 配列の形状を指定する場合、dimension 文で指定するか、変数名に (配列要素数) を付けるかの、どちらか片方の方法でなければならない。

以上の条件が、派生データ型がユーザ定義型となるために満たす必要がある Fortran 文法である。これに加え、次節 5.1.1.3 で説明する FDPS 指示文によって、どのユーザ定義型 (Full-Particle 型,Essential Particle J 型,Force 型) に対応するかや、必須物理量がどのメンバ変数に対応しているか等を指定してはじめてユーザ定義型となる。

5.1.1.2 C言語 文法に関する要請

本節では、ユーザ定義型となるために構造体が満たすべき最低限のC言語文法について記述する。第3章で述べた通り、C言語インターフェースプログラムの1つ FDPS_ftn_if.cpp は、Fortran インターフェースでも共用される。このため、自由に構造体を定義できるわけではなく、前節5.1.1.1で述べたような制限を受ける。具体的には、ユーザ定義型となる構造体は次の条件を満たさなければならない:

(1) 構造体はタグ名を持つ必要がある。タグ名はすべて小文字でなければならない。

注 1)Fortran の言語仕様書を販売している ISO (International Organization for Standardization) からは Fortran 2008 Standard (ISO/IEC 1539-1:2010(E)) のみ購入可能である。

- (2) メンバ変数のデータ型として利用できるのは、(i) Fortran 2003 標準 (ISO/IEC 1539-1:2004(E)) と相互運用可能なデータ型 (詳細は第 5.1.1.1 節の (2)、及び本書表 8.1 を参照 のこと)、(ii) ベクトル型、(iii) 対称行列型のみである。特に、符号なし整数、及び、あらゆるポインタは持てないことに注意して頂きたい。
- (3) 構造体は多次元配列をメンバ変数として持てない (これは将来のバージョンにおいて対応する予定である)。
- (4) メンバ変数名はすべて小文字でなければならない。

Fortran の場合と同様、これに加え、次節 5.1.1.3 で説明する FDPS 指示文を付け加えて、はじめてユーザ定義型の資格を得る。

5.1.1.3 FDPS 指示文 (共通項目のみ)

本節では、すべてのユーザ定義型に共通して使用可能な FDPS 指示文の概要と記述方法について解説する。各ユーザ定義型に固有の指示文に関しては、第 $5.1.2 \sim 5.1.5$ 節で解説する。 FDPS 指示文には以下の3つの種類がある:

- (a) 派生データ型/構造体がどのユーザ定義型に対応するかを指定する指示文。
- (b) 派生データ型/構造体のメンバ変数がどの必須物理量に対応するかを指定する指示文。
- (c) ユーザ定義型同士のデータ移動の方法を指定する指示文。

これらの指示文の内、以下で、最初の2つ(a),(b)について解説する。以降の解説では、まず、Fortran における FDPS 指示文の書き方について説明し、その後、C 言語の場合を説明する。

5.1.1.3.1 ユーザ定義型の種別を指定する FDPS 指示文

派生データ型 $type_name$ がどのユーザ定義型に対応するかを指定するには、次の書式の指示文を記述する:

type, public, bind(c) :: type_name !\$fdps keyword
end type [type_name]

或いは、

!\$fdps keyword

type, public, bind(c) :: type_name
end type [type_name]

ここで [] は、その中身が省略可能であることを示す記号である。FDPS 指示文は必ず文字列!\$fdps で開始される。英字はすべて小文字でなければならない。!で始まることからわかるように、FDPS 指示文は単なるコメント文であり、Fortran プログラムの動作に影響を与えるものではない。インターフェース生成スクリプトだけが、このコメント文を指示文として

解釈する。!\$fdps に半角スペースを置いて続く keyword は、ユーザ定義型を指定するための文字列である。可能なキーワードは、FP, EPI, EPJ, Force であり、大文字・小文字を区別する。それぞれ FullParticle 型、EssentialParticle I型、EssentialParticle J型、Force 型に対応している。FDPS 指示文は派生データ型名の右側か、1 つ前の行に記述しなければならない。FDPS 指示文の中で改行を行うことはできない。第 5.1 節で述べた通り、EssentialParticle I型、EssentialParticle J型、Force 型は FullParticle 型のサブセットでり、FullParticle 型がこれら3 つを兼ねることが可能である。その場合には、以下のリスト 5.1 に示されるように、キーワードをカンマで区切って並べればよい:

Listing 5.1: FullParticle 型が他を兼ねる場合の例

```
type, public, bind(c) :: full_particle !$fdps FP,EPI,EPJ,Force
end type full_particle
```

FullParticle 型が EssentialParticle I 型だけを兼ねるといったことも可能である。

構造体 tag_name がどのユーザ定義型に対応するかを指定するには、次の書式の指示文を記述する:

或いは、

```
//$fdps keyword
struct tag_name {
};
```

指示文の書き方は Fortran の場合とほぼ同じである。違いのみ以下に示す。

- コメント文からコメント記号と先頭の空白文字をすべて取り除いたときに得られる文字列が、文字列\$fdps で開始される場合 (後続の文字列と空白文字で区切られている必要がある)、そのコメント文は指示文として解釈される。上の例では、コメント記号//を使っているが、別のコメント記号/*,*/を使って、/* \$fdps */のように記述してもよい。
- 指示文(a)と解釈されるのは、structの直前の指示文、或いは、tag_name の後の最初の 指示文である。指示文はどちらか一方の位置に記述しなければならない。

5.1.1.3.2 必須物理量を指定する FDPS 指示文

次に、必須物理量に対応するメンバ変数を指定する指示文 (b) について解説する。FDPSでは必須物理量として、粒子の電荷量 (質量)、粒子の位置が必要である。また、ある種の粒子シミュレーションでは探索半径も必要となる。派生データ型 $type_name$ のメンバ変数 mbr_name がどの必須物理量に対応するかを指定するには、次の書式の指示文を記述する:

type, public, bind(c) :: type_name

data_type :: mbr_name !\$fdps keyword

end type [type_name]

或いは、

type, public, bind(c) :: type_name

!\$fdps keyword

data_type :: mbr_name
end type [type_name]

ここでは、見やすさのため、ユーザ定義型の種別を指定する指示文は省略している。指示文は、指示文の開始を示す文字列!\$fdps で始まり、半角スペースを置いて keyword が続く。可能なキーワードは、id、charge、position、rsearch、velocity である 12)。それぞれ、粒子の識別番号、粒子の電荷量 (質量)、粒子の位置、粒子の探索半径、粒子の速度に対応している。キーワードはすべて小文字でなければならない。また、1つのメンバ変数に対して1つの指示文を対応させなければならない。指示文は、変数名の右側か1つ前の行に記述しなければならない。

メンバ変数のデータ型 data_type は、対応する必須物理量が持つべきデータ型に一致していなければならない。以下に、各必須物理量が持つべきデータ型をまとめる:

物理量名	可能なデータ型
粒子の識別番号	<pre>integer(kind=c_long_long)</pre>
電荷 (質量) および探索半径	<pre>real(kind=c_float) real(kind=c_double)</pre>
位置および速度	<pre>type(fdps_f32vec) real(kind=c_float), dimension(space_dim)[†] type(fdps_f64vec) real(kind=c_double), dimension(space_dim)[†]</pre>

[†] space_dim は空間次元を表す。コンパイル時にマクロ PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION が定義されている場合は2、それ以外は3である必要がある(第7章参照)。

表 5.1: 各必須物理量が持つべきデータ型。

構造体 tag_name のメンバ変数 mbr_name がどの必須物理量に対応するかを指定するには、次の書式の指示文を記述する:

^{注 2)}但し、velocity は予約語であり、現時点で生成されるインターフェースプログラムの内容に影響しない

```
struct tag_name {
    data_type mbr_name; //$fdps keyword
};
```

或いは、

```
struct tag_name {
   //$fdps keyword
   data_type mbr_name;
};
```

指示文の書き方は Fortran の場合と同じである。各必須物理量が持つべきデータ型は、上の表に記載された Fortran のデータ型を C 言語のデータ型に適切に読み替えることで得られる (表 8.1 を参照のこと)。

5.1.1.3.3 FDPS 指示文の記述例

最後に、FullParticle 型の実装例を示す (リスト 5.2 および 5.3)。 この例ではここで説明しなかった FDPS 指示文 (c) が使用されているが、FDPS 指示文 (a),(b) がどのように使用されているかに注意してほしい。

Listing 5.2: ユーザ定義型の例 (Fortran)

```
1 module user_defined_types
     use, intrinsic :: iso_c_binding
      use :: fdps_vector
3
      implicit none
4
5
6
      !**** Full particle type
7
      type, public, bind(c) :: full_particle !$fdps FP,EPI,EPJ,Force
8
         !$fdps copyFromForce full_particle (pot,pot) (acc,acc)
9
         !$fdps copyFromFP full_particle (id,id) (mass,mass) (eps,eps) (pos,
               pos)
         integer(kind=c_long_long) :: id !$fdps id
10
11
         real(kind=c_double) :: mass !$fdps charge
         real(kind=c_double) :: eps
12
13
         type(fdps_f64vec) :: pos !$fdps position
         type(fdps_f64vec) :: vel !$fdps velocity
14
15
         real(kind=c_double) :: pot
         type(fdps_f64vec) :: acc
16
17
      end type full_particle
18
19 end module user_defined
```

Listing 5.3: ユーザ定義型の例 (C 言語)

```
1 #include "FDPS_c_if.h"
2
3 //**** Full particle type
```

```
4 typedef struct full_particle { //$fdps FP,EPI,EPJ,Force
      //$fdps copyFromForce full_particle (pot,pot) (acc,acc)
      //$fdps copyFromFP full_particle (id,id) (mass,mass) (eps,eps) (pos,pos
7
      long long int id; //$fdps id
      double mass; //$fdps charge
8
9
      double eps;
      fdps_f64vec pos; //$fdps position
10
      fdps_f64vec vel; //$fdps velocity
11
12
      double pot;
13
      fdps_f64vec acc;
14 } Full_particle;
```

以下では、各ユーザ定義型に個別の指示文も含めて、記述の規則を解説していく。

5.1.2 FullParticle 型

FullParticle 型は粒子情報すべてを持つ派生データ型 (Fortran) 或いは 構造体 (C 言語) であり、第2章2.3節の手順0に対応して、粒子群オブジェクトを生成するのに必要なユーザー定義型である。ユーザーはこの派生データ型/構造体に対して、どのようなメンバ変数を定義してもかまわない。ただし、ユーザーは、FDPS 指示文を用いて、必須物理量に対応するメンバ変数と、FullParticle 型と他のユーザ定義型の間のデータ移動の方法を記述する必要がある。以下、常に必要な FDPS 指示文と、場合によっては必要な FDPS 指示文について記述する。

5.1.2.1 常に必要な FDPS 指示文とその記述法

常に必要な FDPS 指示文は、以下である:

- 粒子の電荷量 (質量) に対応するメンバ変数を指定する指示文
- 粒子の位置に対応するメンバ変数を指定する指示文
- 計算された相互作用の結果を Force 型から FullParticle 型に書き戻す方法を指定する指示文

最初の2つに関しては、第5.1.1.3節で説明した方法で記述すればよい。最後のものは、Fortranでは、次の書式で指示文を記述する必要がある:

```
type, public, bind(c) :: FP
   !$fdps copyFromForce force (src_mbr,dst_mbr) (src_mbr,dst_mbr) ...
end type FP
```

FDPS 指示文は文字列!\$fdps で開始される。その後、1 個以上の半角スペースを挟み、キーワード copyFromForce を記述する。このキーワードによって、この FDPS 指示文が Force 型から FullParticle 型へのデータコピーの仕方を記述する指示文であるとみなされる。キーワード copyFromForce の後には、Force 型に対応する派生データ型名 force を記述する。キーワードとの間には1 個以上の半角スペースが必要である。続いて、1 個以上の変数ペア (src)

 mbr, dst_mbr) が半角スペースを区切り文字として並ぶ。これは Force 型のどのメンバ変数を FullParticle 型のどのメンバ変数にコピーするかを示している。 src_mbr が Force 型のメンバ変数であり、 dst_mbr が FullParticle 型のメンバ変数である。FDPS 指示文は途中で改行することはできない。

C 言語では、次の書式で指示文を記述する必要がある:

```
struct fp {
    //$fdps copyFromForce force (src_mbr,dst_mbr) (src_mbr,dst_mbr) ...
}
```

記述方法は Fortran の場合と同じである。

粒子シミュレーションによっては、1つの FullParticle 型に対し、複数種の相互作用を定義する必要がある場合が想定される。その場合には、各々の Force 型に対して、この FDPS 指示文を記述する必要がある。

本指示文の記述例がリスト5.2及び5.3に示されているので、そちらも参照されたい。

5.1.2.2 場合によっては必要な FDPS 指示文とその記述法

本節では、以下に示す場合に必要となる指示文について記述する:

- (i) 次の種別の相互作用ツリーオブジェクトを使用する場合:
 - Long-MonopoleWithScatterSearch 型
 - Long-QuadrupoleWithScatterSearch 型
 - Long-MonopoleWithCutoff 型
 - Short 型に分類されるすべてのツリー
- (ii) 拡張機能 Particle Mesh を用いる場合
- (iii) FullParticle 型が他のユーザ定義型を兼ねる場合
- (i) の場合、ユーザは派生データ型 或いは 構造体のメンバ変数のどれが探索半径であるかを指定しなければならない (相互作用ツリーの種別に関しては、第8章で解説する)。これは、第5.1.1.3 節で説明した方法で記述すればよい。
- (ii) の場合には、ユーザは FDPS の Particle Mesh モジュールで計算された力を FullParticle 型に書き戻す方法を指示する必要がある。これは、Fortran の場合、次の書式の FDPS 指示文を使って指定する:

```
type, public, bind(c) :: FP
  !$fdps copyFromForcePM mbr_name
end type FP
```

FDPS 指示文は文字列!\$fdps で開始される。その後、1 個以上の半角スペースを挟み、キーワード copyFromForcePM が続く。これによって、この指示文が Particle Mesh モジュール

から FullParticle 型への力のコピーの仕方を指定する指示文であると解釈される。キーワードの次に 1 個以上の半角スペースをおいて、コピー先である FullParticle 型のメンバ変数名 mbr_name が続く。コピー先のメンバ変数は第 4 章で説明したベクトル型でなければならない。FDPS 指示文は途中で改行することはできない。

C 言語の場合には、指示文は次の書式で記述する必要がある:

```
struct FP {
    //$fdps copyFromForcePM mbr_name
};
```

Fortranと全く同じ書式なので説明は省略する。

(iii) の場合には、他のユーザ定義型で常に必要となる FDPS 指示文のすべてと、場合によっては必要となる FDPS 指示文を必要なだけ記述する必要がある。これらに関しては、対応するユーザ定義型の節を参照して頂きたい。

5.1.3 EssentialParticleI 型

EssentialParticleI 型は相互作用の計算に必要なi粒子の情報を持つ派生データ型 (Fortran) 或いは 構造体 (C言語) であり、相互作用関数 (ユーザ定義関数) の定義に必要となるほか、相互作用ツリーオブジェクトの生成に必要となる。EssentialParticleI 型は FullParticle 型 (第5.1.2節) のサブセットである。ユーザは FDPS 指示文を用いて、必須物理量に対応するメンバ変数と、FullParticle 型との間のデータ移動の方法を記述する必要がある。以下、常に必要な FDPS 指示文と、場合によっては必要な FDPS 指示文について記述する。

5.1.3.1 常に必要な FDPS 指示文とその記述法

常に必要となる FDPS 指示文は、以下である:

- 粒子の電荷量 (質量) に対応するメンバ変数を指定する指示文
- 粒子の位置に対応するメンバ変数を指定する指示文
- FullParticle 型から相互作用計算に必要な粒子データをコピーするための方法を指定する 指示文

最初の2つに関しては、第5.1.1.3節で説明した方法で記述すればよい。最後のものは、Fortranの場合、次の書式で指示文を記述する必要がある:

```
type, public, bind(c) :: EPI
   !$fdps copyFromFP fp (src_mbr,dst_mbr) (src_mbr,dst_mbr) ...
end type EPI
```

書式は、(i)!\$fdps に続く文字列が copyFromFP である点、(ii) fp がコピー元となる FullParticle 型の派生データ型名である点、の 2 つ除き、第 5.1.2.1 節に記述した copyFromForce 指

示文と同じである。この場合、*src_mbr* が FullParticle 型のメンバ変数名であることに注意されたい。

C言語の場合、次の書式で記述する必要がある:

Fortranと全く同じ書式なので説明は省略する。

5.1.3.2 場合によっては必要な FDPS 指示文とその記述法

本節では、以下に示す場合に必要となる指示文について記述する:

- (i) 次の種別の相互作用ツリーオブジェクトを使用する場合:
 - Short 型に分類されるすべてのツリー
- (ii) EssentialParticleI型が他のユーザ定義型を兼ねる場合
- (i) の場合、ユーザは派生データ型 (Fortran) 或いは 構造体 (C 言語) のメンバ変数のどれ が探索半径であるかを指定しなければならない (相互作用ツリーの種別に関しては、第8章 で解説する)。これは、第5.1.1.3 節で説明した方法で記述すればよい。
- (ii) の場合には、他のユーザ定義型で常に必要となる FDPS 指示文のすべてと、場合によっては必要となる FDPS 指示文を必要なだけ記述する必要がある。これらに関しては、対応するユーザ定義型の節を参照して頂きたい。

5.1.4 EssentialParticleJ 型

EssentialParticleJ 型は相互作用の計算に必要なj粒子の情報を持つ派生データ型 (Fortran) 或いは 構造体 (C言語) であり、相互作用関数 (ユーザ定義関数) の定義に必要となるほか、相互作用ツリーオブジェクトの生成に必要となる。EssentialParticleJ 型は FullParticle 型 (第5.1.2 節) のサブセットである。ユーザは FDPS 指示文を用いて、必須物理量に対応するメンバ変数と、FullParticle 型との間のデータ移動の方法を記述する必要がある。以下、常に必要な FDPS 指示文と、場合によっては必要な FDPS 指示文について記述する。

5.1.4.1 常に必要な FDPS 指示文とその記述法

常に必要となる FDPS 指示文は、以下である:

- 粒子の電荷量 (質量) に対応するメンバ変数を指定する指示文
- 粒子の位置に対応するメンバ変数を指定する指示文
- FullParticle 型から相互作用計算に必要な粒子データをコピーするための方法を指定する 指示文

最初の2つに関しては、第5.1.1.3節で説明した方法で記述すればよい。最後のものは、第5.1.3.1節で説明した copyFromFP 指示文を記述すればよい。

5.1.4.2 場合によっては必要な FDPS 指示文とその記述法

本節では、以下に示す場合に必要となる指示文について記述する:

- (i) 次の種別の相互作用ツリーオブジェクトを使用する場合:
 - Long-MonopoleWithScatterSearch 型
 - Long-QuadrupoleWithScatterSearch 型
 - Long-MonopoleWithCutoff 型
 - Short 型に分類されるすべてのツリー
- (ii) EssentialParticleJ型が他のユーザ定義型を兼ねる場合
- (iii) 粒子の識別番号から対応する EPJ を取得したい場合 (API (fdps_)get_epj_from_id を使用する場合;接頭辞 fdps_がつくのは C 言語用 API のみ)
- (i) の場合、ユーザは派生データ型/構造体のメンバ変数のどれが探索半径であるかを指定しなければならない (相互作用ツリーの種別に関しては、第8章で解説する)。これは、第5.1.1.3節で説明した方法で記述すればよい。
- (ii) の場合には、他のユーザ定義型で常に必要となる FDPS 指示文のすべてと、場合によっては必要となる FDPS 指示文を必要なだけ記述する必要がある。これらに関しては、対応するユーザ定義型の節を参照して頂きたい。
- (iii) の場合には、ユーザは派生データ型/構造体のメンバ変数のどれが粒子の識別番号であるかを指定しなければならない。これは、第5.1.1.3 節で説明した方法で記述すればよい。

5.1.5 Force 型

Force 型は相互作用の結果を保持する派生データ型 (Fortran) 或いは 構造体 (C言語) であり、相互作用関数の定義に必要となるほか、相互作用ツリーオブジェクトの生成に必要となる。以下、常に必要な FDPS 指示文と、場合によっては必要な FDPS 指示文について記述する。

5.1.5.1 常に必要な FDPS 指示文とその記述法

常に必要な FDPS 指示文は、相互作用の計算結果を初期化する方法を指示する指示文である。この指示文の書式は、初期化の仕方に応じて3<u>通り</u>ある。ユーザはいずれか1つの方法で初期化を指示しなければならない。以下、各書式について解説する。

(1) すべてのメンバ変数をデフォルト初期化する場合

Force 型のすべてのメンバ変数に対して、デフォルトの初期化を行う場合には、何も記述しない。ここで、デフォルトの初期化とは、整数と浮動小数点数は0に、論理型は.false.(Fortran)/false(C言語)に、第4章のベクトル型と対称行列型はその各成分を0にする初期化のことである。

(2) メンバ変数の初期化を個別に指定したい場合

Force 型のメンバ変数を個別に、ある決まった値に初期化したい場合には、Fortran では、 以下のように記述する:

```
type, public, bind(c) :: Force
   !$fdps clear [mbr=val, mbr=keep, ...]
end type Force
```

ここで、Force は Force 型の派生データ型名である。見やすさのため、この派生データ型が Force 型であることを示す指示文は省略していることに注意されたい。文字列!\$fdpsが指示文の開始を示す。その後、1個以上の半角スペースを挟み、キーワード clear が続く。このキーワードによって、この FDPS 指示文が Force 型の初期化の方法を指示する文であるとみなされる。キーワード clear の後の [] はその中身が省略可能であることを示す記号であり、実際には [] を記述してはならないことに注意して頂きたい。

個別指定の内容はキーワード clear の後に記述する。個別指定のないメンバ変数には自動的にデフォルト初期化が適用される。個別指定の方法は2種類あり、以下でそれを説明する。

まず、特定のメンバ変数 mbr を特定の値 val に初期化したい場合には、mbr=val と記述する。ここで、記号=の前後に0 個以上の半角スペースを入れることが可能である。初期値はメンバ変数の型と矛盾してはならず、Fortran の言語仕様に従って記述されなければならない。例えば、メンバ変数が論理型の場合には.true.か.false.のいずれかでなければならない。メンバ変数がベクトル型や対称行列型の場合、全成分を同じ値に初期化する初期化だけが指定可能であり、val はスカラー値である必要がある。各成分を異なる値に初期化したい場合には、次項の初期化方法を使用して頂きたい。

次に、特定のメンバ変数 mbr を初期化したくない場合には、mbr=keep と記述する。右辺の keep が初期化しないことを指示するキーワードである。同様、記号=の前後に0個以上の半角スペースを入れることが可能である。

複数の個別指定を並べることが可能で、その場合には、それらをカンマで区切って並べる。 C 言語では、次の書式で記述する:

```
struct force {    //\$fdps clear [mbr=val, mbr=keep, ...] };
```

Fortranと全く同じ書式なので説明は省略する。

(3) 複雑な初期化を行いたい場合

より複雑な初期化を行いたい場合には、初期化を Fortran ではサブルーチン、C 言語では関数、を用いて行うことができる。この場合には、Fortran では、以下のように記述する:

```
type, public, bind(c) :: Force
   !$fdps clear subroutine subroutine_name
end type Force
```

ここで、subroutine_name は初期化に使用するサブルーチン名である。このサブルーチンはグローバル領域に定義されていなければならない。言い換えれば、Fortran のモジュール内や他のサブルーチンや関数の内部手続として定義されてはならない。初期化を行うサブルーチンは以下のインターフェースを持たなければならない:

```
subroutine subroutine_name(f) bind(c)
use, intrinsic :: iso_c_binding
implicit none
type(Force), intent(inout) :: f

! Initialize Force
end subroutine [subroutine_name]
```

ここで、[] はその中身が省略可能であることを示す記号である。

C 言語では、次の書式で記述する:

```
struct force {
   //$fdps clear function function_name
};
```

書式はFortran の場合とほぼ同じである。初期化に使用する関数はグローバル領域に定義されていなければならない。初期化を行う関数は以下のインターフェースを持つ必要がある:

```
void function_name(struct force *f) {
    // Initialize Force
}
```

5.1.5.2 場合によっては必要な FDPS 指示文とその記述法

なし

5.2 ユーザ定義関数

まず概要を述べる。関数 calcForceEpEp と calcForceEpSp は、それぞれ j 粒子から i 粒子への作用を計算する関数と超粒子から i 粒子への作用を計算する関数である。これらの関数ポインタは、相互作用ツリー用の API の引数として渡される。相互作用が短距離力の場合には超粒子を必要としない。その場合、関数 calcForceEpSp を定義する必要はない。

5.2.1 共通規則

まず最初に Fortran で関数 calcForceEpEp と calcForceEpSp を定義するための規則について説明を行い、その後、C言語での規則について説明を行う。

5.2.1.1 Fortran 文法に関する要請 および FDPS 本体の仕様による要請

本節では、Fortran のサブルーチンがユーザ定義関数となるために満たすべき最低限の Fortran 文法について記述する。これを説明するため、FDPS Fortran インターフェースを 使って相互作用計算を行うまでにユーザが踏むべき手順について述べる。インターフェース プログラムの生成が成功したと仮定すると、次のようになる:

- (I) 相互作用計算の内容を Fortran サブルーチンとして実装する。
- (II) ユーザプログラムにおいて、関数の C 言語アドレスを格納するための変数を用意する。これは Fortran 2003 のモジュール iso_c_binding で提供される派生データ型 type(c_funloc)の変数を用意すればよい。
- (III) ユーザプログラムにおいて、相互作用計算に使用する Fortran サブルーチンの C 言語アドレスを、モジュール iso_c_binding で提供される関数 c_funloc によって取得し、前項の変数に代入する。
- (IV) FDPS API の引数に関数ポインタが格納された変数を渡して、API を呼び出す。
- (V) FDPS 本体は受け取った C 言語アドレスを C 言語で記述された関数と理解して、実行する。

上記手順の (III) において、関数 c_funloc でユーザ定義関数の C 言語アドレスを取得するためには、ユーザ定義関数が C 言語と interoperable でなければならない。具体的には、ユーザ定義関数となる Fortran サブルーチンは次の条件を満たしている必要がある:

- (1) 関数は bind(c) 属性を持たなければならない。
- (2) すべての仮引数が interoperable なデータ型である。interoperable なデータ型に関しては、第5.1.1 節の記述を参照されたい。

上に述べた条件に加え、FDPS 本体の仕様に起因する条件がある。それは以下の条件である:

(3) ユーザ定義関数の仮引数の内、i 粒子と j 粒子の粒子数に対応する仮引数は value 属性が付いていなければならない。value 属性は、いわゆる値渡しであることを指示するものである。

以上がユーザ定義関数が満たすべき最低限の条件である。理解を助ける目的で、N 体計算のサンプルコードの粒子-粒子相互作用に対応したユーザ定義関数の例をリスト 5.4 に示しておく。相互作用関数の記述方法の詳細はまだ解説していないので、ここでは、bind(c) 属性と value 属性の位置だけを確認して頂きたい。

Listing 5.4: 粒子-粒子相互作用に対応したユーザ定義関数の実装例

```
1 subroutine calc_gravity_pp(ep_i,n_ip,ep_j,n_jp,f) bind(c)
      integer(c_int), intent(in), value :: n_ip,n_jp
2
3
      type(full_particle), dimension(n_ip), intent(in) :: ep_i
4
      type(full_particle), dimension(n_jp), intent(in) :: ep_j
5
      type(full_particle), dimension(n_ip), intent(inout) :: f
      !* Local variables
6
7
      integer(c_int) :: i,j
8
      real(c_double) :: eps2,poti,r3_inv,r_inv
9
      type(fdps_f64vec) :: xi,ai,rij
10
11
      do i=1, n_ip
12
          eps2 = ep_i(i)\%eps * ep_i(i)\%eps
13
          xi\%x = ep_i(i)\%pos\%x
          xi\%y = ep_i(i)\%pos\%y
14
          xi\%z = ep_i(i)\%pos\%z
15
          ai\%x = 0.0d0
16
          ai\%y = 0.0d0
17
18
          ai\%z = 0.0d0
          poti = 0.0d0
19
20
          do j=1,n_{jp}
21
             rij\%x = xi\%x - ep_j(j)\%pos\%x
                    = xi\%y - ep_j(j)\%pos\%y
22
             rij%y
             rij\%z = xi\%z - ep_j(j)\%pos\%z
23
24
             r3_{inv} = rij%x*rij%x &
25
                     + rij%y*rij%y &
26
                     + rij%z*rij%z &
27
                     + eps2
28
             r_inv
                    = 1.0d0/sqrt(r3_inv)
29
             r3_{inv} = r_{inv} * r_{inv}
30
             r_inv
                    = r_{inv} * ep_{j(j)}%mass
             r3_{inv} = r3_{inv} * r_{inv}
31
                     = ai\%x - r3_inv * rij\%x
32
             ai%x
33
                     = ai%y - r3_inv * rij%y
             ai%y
34
             ai%z
                    = ai\%z - r3_inv * rij\%z
35
             poti
                     = poti - r_inv
36
          end do
          f(i)\%pot = f(i)\%pot
37
38
          f(i)\%acc\%x = f(i)\%acc\%x + ai\%x
          f(i)\%acc\%y = f(i)\%acc\%y + ai\%y
39
         f(i)\%acc\%z = f(i)\%acc\%z + ai\%z
40
```

```
41 end do4243 end subroutine calc_gravity_pp
```

5.2.1.2 C 言語 文法に関する要請 および FDPS 本体の仕様による要請

Fortran の場合と異なり (第 5.2.1.1 節参照)、C 言語から FDPS を利用する場合、ユーザは任意の関数の C 言語アドレスを自由に取得することが可能である。そのため、void 関数を使ってユーザ定義関数を実装する際、C 言語文法的な制限は存在しない。しかしながら、FDPS 本体ではユーザ定義関数の仮引数仕様が決まっているため、C 言語でもそれを満たす必要がある。これについては次節以降に説明する。

5.2.2 関数 calcForceEpEp

関数 calcForceEpEp は粒子同士の相互作用を記述するものであり、相互作用の定義に必要となる。関数 calcForceEpEp は、以下の書式で記述しなければならない。

Fortran 書式

```
subroutine calc_force_ep_ep(ep_i,n_ip,ep_j,n_jp,f) bind(c)
  use, intrinsic :: iso_c_binding
  implicit none
  integer(kind=c_int), intent(in), value :: n_ip,n_jp
  type(essential_particle_i), dimension(n_ip), intent(in) :: ep_i
  type(essential_particle_j), dimension(n_jp), intent(in) :: ep_j
  type(force), dimension(n_ip), intent(inout) :: f
```

C 言語 書式

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
n_ip n_jp ep_i ep_j f	integer(kind=c_int) または int integer(kind=c_int) または int essential_particle_i 型† essential_particle_j 型† force 型†	入力 入力 入力 入力 入力 入出力	i 粒子の粒子数を格納した変数。 j 粒子の粒子数を格納した変数。 i 粒子情報を持つ配列。 j 粒子情報を持つ配列。 i 粒子の相互作用結果を返す配
			列。

[‡] それぞれ Essential Particle I 型、Essential Particle J 型、Force 型の派生データ型名 (Fortran) または 構造体名 (C言語) である。Fortran においては、もしこれらが本サブルーチンと別なモジュールで定義されている場合には、そのモジュールを use する必要がある点に注意されたい。同様に、C言語の場合でも必要なヘッダーファイルをインクルードする必要がある。

返り値

なし

機能

j 粒子から *i* 粒子への作用を計算する。

5.2.3 関数 calcForceEpSp

関数 calcForceEpSp は超粒子から粒子への作用を記述するものであり、相互作用の定義に必要となる。関数 calcForceEpEp は以下の書式で記述しなければならない。

Fortran 書式

```
subroutine calc_force_ep_sp(ep_i,n_ip,ep_j,n_jp,f) bind(c)
   use, intrinsic :: iso_c_binding
   use :: fdps_super_particle
   implicit none
   integer(kind=c_int), intent(in), value :: n_ip,n_jp
   type(essential_particle_i), dimension(n_ip), intent(in) :: ep_i
   type(super_particle_j), dimension(n_jp), intent(in) :: ep_j
   type(force), dimension(n_ip), intent(inout) :: f
```

C 言語 書式

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
n_ip n_jp ep_i ep_j f	integer(kind=c_int) または int integer(kind=c_int) または int essential_particle_i 型 † super_particle_j 型 ‡ force 型 †	入力 入力 入力 入力 入出力	i 粒子の粒子数を格納した変数。 超粒子の粒子数を格納した変数。 i 粒子情報を持つ配列。 超粒子情報を持つ配列。 i 粒子の相互作用結果を返す配
			列。

[†] それぞれ Essential Particle I 型と Force 型の派生データ型名 (Fortran) または 構造体名 (C言語) である。Fortran では、これらが本サブルーチンと別なモジュールで定義されている場合には、そのモジュールを use する必要がある点に注意されたい。同様に、C言語でも必要なヘッダーファイルをインクルードする必要がある。

返り値

なし

機能

超粒子から i 粒子への作用を計算する。

[‡]第4章4.4節で定義されるいずれかの超粒子型でなければならない。

第6章 Fortran/C言語 インターフェース の生成

本章では、FDPS Fortran/C 言語 インターフェース生成スクリプトの動作条件と使用方法 について記述する。

6.1 スクリプトの動作条件

本節では、インターフェース生成スクリプト gen_ftn_if.py (Fortran インターフェース生成用) 及び gen_c_if.py (C言語インターフェス生成用) の動作条件について記述する。2つのインターフェース生成スクリプトはディレクトリ scripts の直下に配置されている。本スクリプトは、プログラミング言語 Python で実装されており、正常な動作のためには、Python 2.7.5 以上、或いは、Python 3.4 以上が必要である。ユーザの環境に合わせて、スクリプト第1行目の

#!/usr/bin/env python

の部分を適宜修正して使用されたい。ここで、確認すべき点は env コマンドの PATH と Python インタープリタの名称である (利用する計算機システムによっては python が存在 せず、python2.7や python3.4 のように名称にバージョン名が付いたもののみが用意されて いる場合がある)。もし Python インタープリタに PATH が通っていない場合には、PATH を 通すか、以下のように、絶対 PATH で Python インタープリタを指定する:

#!/path/to/python

上記に加え、正常な動作のためには、以下の条件を満たす必要がある:

- スクリプト gen_ftn_if.py に入力されるすべての Fortran コードが Fortran 2003 標準 (ISO/IEC 1539-1:2004(E)) の文法に従って記述されていること。本スクリプトに言語の 自動判別機能や詳細な文法チェック機能は実装されておらず、誤った文法が使用された場合の動作は不定である。
- スクリプトgen_c_if.pyに入力されるすべてのC言語コードはC99 (ISO/IEC 9899:1999(E))、または、それよりも新しい規格に従って記述されていること。本スクリプトに言語の自動判別機能や詳細な文法チェック機能は実装されておらず、誤った文法が使用された場合の動作は不定である。

6.2 スクリプトの使用方法

本スクリプトを使ってインターフェースプログラムを生成するためには、コマンドライン上で、以下のようにしてスクリプトを実行すればよい。Fortran インターフェースを生成する場合には

\$ gen_ftn_if.py -o output_directory user1.F90 user2.F90...

C言語インターフェースを生成する場合には

\$ gen_c_if.py -o output_directory user1.h user2.h...

ここで、環境変数 PATH にディレクトリ scripts が追加されていると仮定している。PATH を通さずにスクリプトを使用する場合には、絶対 PATH か相対 PATH でスクリプトを実行する必要がある。スクリプトの引数には、ユーザ定義型が記述された Fortran ファイル (gen_ftn_if.py を使用する場合) 或いは C 言語ヘッダーフェイル (gen_c_if.py を使用する場合) を指定する。複数のファイルを指定する場合には、1 個以上の半角スペースを空けて、ファイル名を並べる。この際、並べる順番は任意でよい。

オプション「-o」でインターフェースプログラムを出力するディレクトリを指定することができる。オプション「-o」の代わりに、「--output」あるいは「--output_dir」を使用することもできる。指定がない場合には、カレントディレクトリに出力される。

オプション「-DPARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION」を指定した場合、シミュレーションの空間次元数が2と仮定される。このオプションに引数はない。本オプションが無指定の場合、3が仮定される。空間次元数は、ユーザ定義型の位置と速度に対応するメンバ変数のデータ型のチェックに使用される。ユーザコードのコンパイル時にマクロ PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSIONが定義される場合には、必ずこのオプションを指定しなければならない (無指定の場合、インターフェースプログラムの正常な動作は保証されない)。

本スクリプトの使用方法はオプション「-h」あるいは「--help」でも確認することできる。以下は、gen_ftn.if.py の場合の例である。

Analyze user's Fortran codes and generate C++/Fortran source files required to use FDPS from the user's Fortran code.

positional arguments:

FILE The PATHs of input Fortran files

optional arguments:

-h, --help show this help message and exit

-o DIRECTORY, --output DIRECTORY, --output_dir DIRECTORY

The PATH of output directory

-DPARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION

Indicate that simulation is performed in the 2-dimensional space (equivalent

to define the macro

PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION)

生成されたインターフェースプログラムをユーザプログラムと一緒にコンパイルすることで、実行ファイルが得られる。コンパイルの仕方に関しては、次の第7章を参照されたい。

第7章 Fortran/C言語 インターフェース のコンパイル

ここまでの章で、FDPSの Fortran/C言語 インターフェースの生成に必要な情報に関して解説を行ってきた。本章では、インターフェースプログラムのコンパイルに関連したトピックを扱う。第3章の図3.1に示されるように、FDPS Fortran インターフェースプログラムは、C++言語のソースファイルと Fortran 言語のソースファイルから構成される。同様、FDPS C言語インターフェースプログラムも C++言語のソース・ファイルと C言語のソースファイルから構成される (図3.2)。本章のはじめに、複数の言語で構成されるインターフェースプログラムをコンパイルする際の注意点について記述する。次に、FDPS Fortran/C言語 インターフェースで使用可能なマクロ定義について記述する。FDPSでは、コンパイル時のマクロ定義によって、座標系の指定や並列処理の有無等を選択することができる。使用可能なマクロとその機能について解説する。

7.1 コンパイル

本節では、Fortran/C言語 インターフェースプログラムを含むユーザコードをコンパイルする方法に関して記述する。はじめにコンパイラ依存しない事項に関して記述した後に、例として GCC (The GNU Compiler Collection) を使った場合のコンパイル方法を示す。

7.1.1 コンパイルの基本手順

ここでは、(コンパイラ依存しない) コンパイルの一般的な手順について説明する。まずは じめに Fortran インターフェースを利用する場合を述べ、その後、C 言語インターフェース を利用する場合を述べる。

7.1.1.1 Fortran インターフェースを利用する場合

前提条件として、C++言語と Fortran 言語で記述された複数のソースファイルをコンパイルして実行ファイルを得るためには、相互運用可能な C++ コンパイラ、C++ リンカー、および、Fortran コンパイラが必要である。今日では、通常、C++ コンパイラは C++ リンカーとして動作するため、事実上必要となるのは相互運用可能な C++ コンパイラと Fortran コンパイラである。Fortran コンパイラは Fortran 2003 標準 (ISO/IEC 1539-1:2004(E)) に対応し

ていなければならない。また、FDPS 本体のコンパイルのため、 C_{++} コンパイラは C_{++} 03標準 (ISO/IEC 14882:2003) に対応している必要がある。

第3章で述べた通り、Fortran インターフェースを用いたコードでは main 関数が C++側に存在する。したがって、コンパイルは、まずコンパイラで Fortran と C++のソースファイルからオブジェクトファイルを生成し、その後、C++リンカーでオブジェクトファイルをリンクするという手順となる。より詳細には、以下の手順でコンパイルを行う:

[1] Fortran ソースのコンパイル

ユーザが記述したすべての Fortran ソースコードの他、インターフェースプログラムの1つである FDPS_module.F90、FDPS から提供される Fortran ファイル群 (src/fortran_interface/modules/*.F90)を、Fortran コンパイラでコンパイルし、オブジェクトファイルを生成する。多くの場合、オブジェクトファイルの生成はコンパイラオプション「-c」を付けてコンパイルすることよってなされる。

コンパイル時に注意しなければならないのは、コンパイラに渡すファイルの順序である。多くのコンパイラでは、あるファイル foo.F90 でモジュール bar を使用している場合 (use している場合)、モジュール bar が記述されたファイルは先にコンパイルされていなければならない。コンパイラは引数に渡されたファイルを先頭から順に処理するため、独立なモジュールを先に記述し、その後、依存関係の順にファイルを並べる必要がある。すなわち、Fortran コンパイラを FC とすれば、以下のようにコンパイルする:

\$ FC -c \

```
FDPS_time_profile.F90 \
FDPS_vector.F90 \
FDPS_matrix.F90 \
FDPS_super_particle.F90 \
user_defined_1.F90 ... user_defined_n.F90 \
FDPS_module.F90 \
user_code_1.F90 ... user_code_n.F90
```

ここで、\ はコマンドラインが次の行に継続することを表す。これは、本文書のスペースの都合上導入したものであり、実際には不要である。サブルーチン f_{main} ()はユーザコード (user_code_*.F90) のどれかに実装されていると仮定する。この例におけるファイルの依存関係は次のようになっている:

- FDPS_super_particle.F90 は FDPS_vector.F90 と FDPS_matrix.F90 に依存
- FDPS_module.F90 はユーザ定義型が記述された n 個のファイル user_defined_i.F90 (i=1-n) に依存
- n 個のユーザコード user_code_i.F90 (i=1-n) は、FDPS_module.F90 に依存

$[2] C + + y - \lambda 0 + \lambda 1 + y - \lambda 0 + y - \lambda 1 + y - \lambda 0 + y - \lambda 1 + y - \lambda 0 + y - \lambda 1 + y - \lambda 0 + y - \lambda 1 + y - \lambda 0 + y - \lambda 0$

インターフェースプログラムのすべての C++ファイル (main.cpp, FDPS_Manipulators.cpp, FDPS_ftn_if.cpp) を、C++コンパイラでコンパイルし、オブジェクトファイルを

生成する。C++はヘッダファイルが存在するため、ファイルの順番を気にする必要はない。したがって、コンパイラを CXX とすれば、以下のようにコンパイルする:

\$ CXX -c FDPS_Manipulators.cpp FDPS_ftn_if.cpp main.cpp

[3] オブジェクトファイルのリンク

[1], [2] で作成したオブジェクトファイル (*.o) を、C++のリンカーでリンクし、実行ファイルを作成する。コンパイラによって、C++リンカーでFortranのオブジェクトファイル C++のオブジェクトにリンクするために、特別なコンパイルオプションが必要となる場合がある。これをLDFLAGS とすると、リンクは以下のようにすればよい:

\$ CXX *.o [LDFLAGS]

ここで、[] はその中身がコンパイラによっては省略可能であることを示す記号である。リンクが成功すれば、実行ファイルが作成されるはずである。

上に示した基本手順では、言語仕様を指定するコンパイラオプション等は省略している。 また、並列計算や拡張機能を使う際に必要となるライブラリ等もすべて省略している。これらはコンパイラ依存する部分であり、使用するコンパイラに応じて適切に指定する必要がある。

7.1.1.2 C 言語インターフェースを利用する場合

C++言語と C 言語で記述された複数のソースファイルをコンパイルして実行ファイルを得るためには、相互運用可能な C++ コンパイラ、C++ リンカー、および、C コンパイラが必要である。前節で述べた理由により、事実上必要となるのは相互運用可能な C++ コンパイラと C コンパイラである。 C コンパイラは C の 規格 (ISO/IEC 9899:1999(E)) に対応していなければならない。また、FDPS 本体のコンパイルのため、C++ コンパイラは C++ の 標準 (ISO/IEC 14882:2003) に対応している必要がある。

第3章で述べた通り、C言語 インターフェースを用いたコードでは main 関数が C++側に存在する。したがって、コンパイルは、まずコンパイラで C言語と C++のソースファイルからオブジェクトファイルを生成し、その後、C++リンカーでオブジェクトファイルをリンクするという手順となる。より詳細には、以下の手順でコンパイルを行う:

[1] C言語ソースのコンパイル

ユーザが記述したすべてのC言語ソースコードを、Cコンパイラでコンパイルし、オブジェクトファイルを生成する。多くの場合、オブジェクトファイルの生成はコンパイラオプション「-c」を付けてコンパイルすることよってなされる。すなわち、Cコンパイラを CC とすれば、以下のようにコンパイルする:

\$ CC -c user_code_1.c ... user_code_n.c

[2] C++ソースのコンパイル

インターフェースプログラムのすべてのC++ファイル (main.cpp, FDPS_Manipulators.cpp, FDPS_ftn_if.cpp) を、C++コンパイラでコンパイルし、オブジェクトファイルを生成する。したがって、コンパイラを CXX とすれば、以下のようにコンパイルする:

\$ CXX -c FDPS_Manipulators.cpp FDPS_ftn_if.cpp main.cpp

[3] オブジェクトファイルのリンク

[1], [2] で作成したオブジェクトファイル (*.o) を、C++のリンカーでリンクし、実行ファイルを作成する。場合によっては、ライブラリをリンクする必要がある。リンクオプションを LDFLAGS とすると、リンクは以下のようにすればよい:

\$ CXX *.o [LDFLAGS]

ここで、[] はその中身が場合によっては省略可能であることを示す記号である。リンクが成功すれば、実行ファイルが作成されるはずである。

上に示した基本手順では、言語仕様を指定するコンパイラオプション等は省略している。 また、並列計算や拡張機能を使う際に必要となるライブラリ等もすべて省略している。これらはコンパイラ依存する部分であり、使用するコンパイラに応じて適切に指定する必要がある。

7.1.2 GCC を用いたコンパイルの仕方

本節では、例として、GCC (バージョン 4.8.3 以上) の場合のコンパイルの仕方を記述する。本節を通して、C++コンパイラ、Fortran コンパイラ、C コンパイラをそれぞれ g++、 gfortran、gcc とする。また、MPI に対応した GCC コンパイラをぞれぞれ mpic++、 mpif90、 mpicc とし、使用する MPI ライブラリは OpenMPI (バージョン 1.6.4 以上) であるとする。以下、はじめに Fortran インターフェースを利用する場合について述べ、その後、C 言語インターフェースを利用する場合について述べる。

7.1.2.1 Fortran インターフェースを利用する場合

7.1.2.1.1 MPI を使用しない場合

gfortran で Fortran のソースコードを Fortran 2003 標準としてコンパイルするためには、コンパイルオプション -std=f2003 が必要である。また、GCC の場合には、C++のオブジェクトファイルと Fortran のオブジェクトファイルをリンクするためには、リンク時にオプション -lgfortran が必要となる。したがって、第 7.1.1 節で説明した手順において、FC、CXX、LDFLAGS を、以下のように設定すればよい:

```
FC = gfortran -std=f2003
```

CXX = g++

LDFLAGS = -lgfortran

7.1.2.1.2 MPI を使用する場合

MPIを使用する場合で問題となるのは、Fortran で記述されたユーザコードの中で MPIを使用する場合である。この場合、C++用の MPI ライブラリだけでなく、Fortran 用の MPI ライブラリをリンクする必要がある。それぞれのライブラリの名称が libmpi と libmpi_f90 であるとすれば、コンパイルは、第 7.1.1 節で説明した手順において、FC、CXX、LDFLAGS を、以下のように設定して行えばよい:

```
FC = mpif90 -std=f2003

CXX = mpic++
```

LDFLAGS = -lgfortran -LPATH -lmpi -lmpi_f90

ここで、 $\it PATH$ は MPI ライブラリがインストールされているディレクトリの絶対 PATH である。

MPI ライブラリの名称は当然ユーザの計算機環境ごとに異なりうる。詳細は、ユーザの利用している計算機システムの管理者に問い合わせて確認して頂きたい。

7.1.2.2 C 言語インターフェースを利用する場合

7.1.2.2.1 MPI を使用しない場合

コンパイルは、第7.1.1節で説明した手順において、CC、CXX、LDFLAGS を以下のように設定して行えばよい:

```
\begin{array}{ccc} & & & \\ & & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\
```

7.1.2.2.2 MPI を使用する場合

コンパイルは、第7.1.1節で説明した手順において、CC、CXX、LDFLAGS を以下のように設定して行えばよい:

```
CC = mpicc

CXX = mpic++

LDFLAGS = -LPATH -lmpi
```

ここで、 $\it PATH$ は MPI ライブラリがインストールされているディレクトリの絶対 PATH である。

MPI ライブラリの名称は当然ユーザの計算機環境ごとに異なりうる。詳細は、ユーザの利用している計算機システムの管理者に問い合わせて確認して頂きたい。

7.2 コンパイル時マクロ定義

7.2.1 座標系の指定

座標系は直角座標系3次元と直角座標系2次元の選択ができる。以下、それらの選択方法 について述べる。

7.2.1.1 直角座標系 3 次元

デフォルトは直角座標系3次元である。なにも行わなくても直角座標系3次元となる。

7.2.1.2 直角座標系 2 次元

コンパイル時に PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION をマクロ定義すると直交座標系 2次元となる。

7.2.2 並列処理の指定

並列処理に関しては、OpenMPの使用/不使用、MPIの使用/不使用を選択できる。以下、選択の仕方について記述する。

7.2.2.1 OpenMP の使用

デフォルトは OpenMP 不使用である。使用する場合は、PARTICLE_SIMULATOR_THREAD_PARALLEL をマクロ定義すればよい。GCC コンパイラの場合はコンパイラオプションにfopenmp をつける必要がある。

7.2.2.2 MPI の使用

デフォルトは MPI 不使用である。使用する場合は、PARTICLE_SIMULATOR_MPI_PARALLEL をマクロ定義すればよい。

7.2.3 データ型の精度の指定

超粒子型 (第4.3節参照) のメンバ変数の型の精度を選択できる。以下、選択の仕方について記述する。

7.2.3.1 超粒子型のメンバ変数の型の精度の指定

デフォルトはすべてのメンバ変数が 64 ビットである。32 ビットにしたい場合、PARTICLE_SIMULATOR_SPMOM_F32 をマクロ定義すればよい。

7.2.4 拡張機能 Particle Mesh の使用

拡張機能 Particle Mesh を使用するためには、PARTICLE_SIMULATOR_USE_PM_MODULE をマクロ定義すればよい。デフォルトでは Particle Mesh 機能は使用できない。

7.2.5 デバッグ用出力の指定

デバッグ作業のため、マクロ PARTICLE_SIMULATOR_DEBUG_PRINT が用意されている。このマクロが定義済みの場合、FDPS の動作ログが出力されるようになる。

第8章 API 仕様一覧

この章では、Fortran/C言語 インターフェースの各 API の仕様について記述する。第3章で述べた通り、Fortranでは、各 API は派生データ型 fdps_controller のオブジェクトのメンバ関数として用意されている。以下では、このオブジェクトの名称が fdps_ctrl であるとして説明を行う。また、説明を簡略化するため、多くの場合、仮引数のデータ型はFortranの場合のみを示す。C言語のデータ型との対応は以下の表 8.1 を参考にして頂きたい。

Fortran のデータ型	C 言語でのデータ型
integer(kind=c_int)	int
integer(kind=c_short)	short int
integer(kind=c_long)	long int
integer(kind=c_long_long)	long long int
<pre>integer(kind=c_signed_char)</pre>	signed char/unsigned char
<pre>integer(kind=c_signed_char) integer(kind=c_size_t)</pre>	size t
	int8 t
integer(kind=c_int8_t)	
integer(kind=c_int16_t)	int16_t
integer(kind=c_int32_t)	int32_t
integer(kind=c_int64_t)	int64_t
<pre>integer(kind=c_int_least8_t)</pre>	int_least8_t
<pre>integer(kind=c_int_least16_t)</pre>	int_least16_t
<pre>integer(kind=c_int_least32_t)</pre>	int_least32_t
<pre>integer(kind=c_int_least64_t)</pre>	int_least64_t
<pre>integer(kind=c_int_fast8_t)</pre>	int_fast8_t
$integer(kind=c_int_fast16_t)$	int_fast16_t
$integer(kind=c_int_fast32_t)$	int_fast32_t
$integer(kind=c_int_fast64_t)$	int_fast64_t
$integer(kind=c_intmax_t)$	intmax_t
<pre>integer(kind=c_intptr_t)</pre>	intptr_t
real(kind=c_float)	float
real(kind=c_double)	double
real(kind=c_long_double)	long double
<pre>complex(kind=c_float_complex)</pre>	float _Complex
<pre>complex(kind=c_double_complex)</pre>	double _Complex
<pre>complex(kind=c_long_double_complex)</pre>	long double _Complex
logical(kind=c_bool)	_Bool
character(kind=c_char)	char

表 8.1: C言語と相互運用可能な Fortran のデータ型と対応する C言語のデータ型

8.1 開始および終了処理に関わる API

この節では、FDPS の初期化および終了処理に関わる API について記述する。 関連する全 API の名称の一覧を以下に示す:

ps_initialize (Fortran のみ) fdps_initialize (C言語のみ) ps_finalize (Fortran のみ) fdps_finalize (C言語のみ) ps_abort (Fortran のみ) fdps_abort (C言語のみ)

以下、順に、各APIの仕様を記述する。ただし、Fortran版とC言語版で同じ機能を持つAPIについては、まとめて一つの節で説明する。以降、本文書では、簡単のため、FortranとC言語のAPIの仕様を1つの節で説明する場合、その節の名前はFortranのAPI名を使用することにする。

8.1.1 ps_initialize

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%ps_initialize()

C言語 構文

void fdps_initialize();

仮引数仕様

なし

返値

なし

機能

FDPS の初期化を行う。FDPS の API のうち最初に呼び出さなければならない。

8.1.2 ps_finalize

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%ps_finalize()

C言語 構文

void fdps_finalize();

仮引数仕様

なし

返値

なし

機能

FDPS の終了処理を行う。

8.1.3 ps_abort

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%ps_abort(err_num)

C言語 構文

void fdps_abort(const int err_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
err_num	$integer(kind=c_int)$	入力	プログラムの終了ステータスを与える。Fortranでは、この引数は省略可能であり、省略した場合、デフォルト値 -1 が使用される。

返り値

なし

機能

FDPS の異常終了処理を行う。引数はプログラムの終了ステータスである。この引数は、MPI を使用していない場合は C++の std::exit 関数に渡され、MPI を使用している場合は MPI の MPI_Abort 関数に渡される。

8.2 粒子群オブジェクト用 API

本節では、第2章で説明した粒子群クラスのオブジェクト(以後、粒子群オブジェクトと呼ぶ)に関するAPIについて説明する。FDPS本体において、粒子群オブジェクトはFullParticle型に記述された粒子の情報のすべてを持ち、粒子交換を行うAPIを提供する。ユーザは、粒子群オブジェクトを通じて、粒子情報の初期化・更新を行うこととなる。Fortran/C言語インターフェースを用いたプログラムでは、粒子群オブジェクトを識別番号で管理する。

粒子群オブジェクトを操作する全 API の名称の一覧を以下に示す:

```
(fdps_)create_psys
(fdps_)delete_psys
(fdps_)init_psys
(fdps_)get_psys_info
(fdps_)get_psys_memsize
(fdps_)get_psys_time_prof
(fdps_)clear_psys_time_prof
(fdps_)set_nptcl_smpl
(fdps_)set_nptcl_loc
(fdps_)get_nptcl_loc
(fdps_)get_nptcl_glb
get_psys_fptr (Fortran のみ)
fdps_get_psys_cptr (C言語のみ)
(fdps_)exchange_particle
(fdps_)add_particle
(fdps_)remove_particle
(fdps_)adjust_pos_into_root_domain
(fdps_)sort_particle
```

ここで、(fdps_) は C 言語の場合のみ API 名に接頭辞 $fdps_$ が付くことを示している。以下、順に、各 API の仕様を記述する。

8.2.1 create_psys

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%create_psys(psys_num,psys_info_in)

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
psys_num	$integer(kind=c_int)$	入出力	粒子群オブジェクトの識別番号を受け取るための変数。 C言語では変数のアドレスを引数として指定する必要があることに注意。
$psys_info_in$	$character(len=*,kind=c_char)$	入力	FullParticle型の派生データ 型名を格納した文字列。
${\tt psys_info}$	char *	入力	FullParticle型の構造体名を 格納した文字列定数。

返り値

なし

機能

文字列 psys_info_in (Fortran の場合) 或いは 文字列定数 psys_info (C 言語の場合) で指定される名称の FullParticle 型に対応した粒子群オブジェクトを生成し、そのオブジェクトの識別番号を返す。 FullParticle型の派生データ型名 (Fortran の場合) 或いは 構造体名 (C 言語の場合)はすべて小文字で入力されなければならない。

8.2.2 delete_psys

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%delete_psys(psys_num)

C言語 構文

void fdps_delete_psys(const int psys_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
psys_num	$integer(kind=c_int)$	入力	粒子群オブジェクトの識別番号。

返り値

なし

機能

メモリー上から、識別番号 psys_num を持つ粒子群オブジェクトを削除する。

8.2.3 init_psys

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%init_psys(psys_num)

C言語 構文

void fdps_init_psys(const int psys_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
psys_num	$integer(kind=c_int)$	入力	粒子群オブジェクトの識別番号。

返り値

なし

機能

識別番号 psys_num の粒子群オブジェクトを初期化する。以降に記述する粒子群オブジェクト用 API を使用する前に、必ず1度呼び出す必要がある。

8.2.4 get_psys_info

Fortran 構文

```
subroutine fdps_ctrl%get_psys_info(psys_num,psys_info)
```

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
psys_num	$integer(kind = c_int)$	入力	粒子群オブジェクトの識別番号。
$psys_info$	$character(len=*,kind=c_char)$	入出力	粒子群オブジェクトに対応した FullParticle 型の派生データ型
charlen	$\mathrm{size}_{-}\mathrm{t}^{*}$	入出力	名 (Fortran の場合) 或いは 構造 体名 (C言語の場合)。 変数 psys_info に書き込まれた 文字列の長さ。

返り値

なし

機能

識別番号 psys_num の粒子群オブジェクトに対応した FullParticle 型の派生データ型名 (Fortran の場合) 或いは 構造体名 (C言語の場合) を取得する。これは粒子群オブジェクト生成時に指定した文字列そのものである。

8.2.5 get_psys_memsize

Fortran 構文

function fdps_ctrl%get_psys_memsize(psys_num)

C言語 構文

long long int fdps_get_psys_memsize(const int psys_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
psys_num	$integer(kind{=}c_int)$	入力	粒子群オブジェクトの識別番号。

返り値

integer(kind=c_long_long) 型のスカラー値。

機能

識別番号 psys_num の粒子群オブジェクトが消費しているメモリー量を Byte 単位で返す。

8.2.6 get_psys_time_prof

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%get_psys_time_prof(psys_num,prof)

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
psys_num prof	integer(kind=c_int) type(fdps_time_prof)	入力 入出力	粒子群オブジェクトの識別番号。 粒子群オブジェクト用のAPIでかかった 時間を受け取るための変数。C言語では 変数のアドレスを引数として指定す る必要があることに注意。

返り値

なし

機能

識別番号 psys_num の粒子群オブジェクトで粒子交換 (API (fdps_)exchange_particle) にかかった時間 (ミリ秒単位) を fdps_time_prof 型のメンバ変数 exchange_particle に格納する。

8.2.7 clear_psys_time_prof

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%clear_psys_time_prof(psys_num)

C言語 構文

void fdps_clear_psys_time_prof(const int psys_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
psys_num	$integer(kind=c_int)$	入力	粒子群オブジェクトの識別番号。

返り値

なし

機能

FDPS 本体に用意された識別番号 psys_num の粒子群オブジェクトの TimeProfile 型プライベートメンバ変数のメンバ変数 exchange_particles_の値を 0 クリアする。ここで、TimeProfile 型は Fortran/C 言語インターフェースで用意された fdps_time_prof 型に対応する C++のデータ型のことである (詳細は、FDPS 本体の仕様書を参照)。本 API は時間計測をリセットするために使用する。

$8.2.8 \text{ set_nptcl_smpl}$

Fortran 構文

```
subroutine fdps_ctrl%set_nptcl_smpl(psys_num,nptcl)
```

C 言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
psys_num nptcl	integer(kind=c_int) integer(kind=c_int)	入力 入力	粒子群オブジェクトの識別番号。 1つの MPI プロセスでサンプルする粒子 数目標。

返り値

なし

機能

1 つの MPI プロセスでサンプルする粒子数の目標を設定する。呼び出さなくてもよいが、 呼び出さないとこの目標数が 30 となる。

8.2.9 set_nptcl_loc

Fortran 構文

```
subroutine fdps_ctrl%set_nptcl_loc(psys_num,nptcl)
```

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
- •	integer(kind=c_int)	入力	粒子群オブジェクトの識別番号。
	integer(kind=c_int)	入力	粒子数。

返り値

なし

機能

1つの MPI プロセスの持つ粒子数を設定する。 MPI プロセスごとに異なる粒子数を指定してもよい。

8.2.10 get_nptcl_loc

Fortran 構文

function fdps_ctrl%get_nptcl_loc(psys_num)

C言語 構文

int fdps_get_nptcl_loc(const int psys_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
psys_num	$integer(kind{=}c_int)$	入力	粒子群オブジェクトの識別番号。

返り値

integer(kind=c_int) 型のスカラー値。

機能

自分の MPI プロセスの持つ粒子数を返す。

8.2.11 get_nptcl_glb

Fortran 構文

function fdps_ctrl%get_nptcl_glb(psys_num)

C言語 構文

int fdps_get_nptcl_glb(const int psys_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
psys_num	$integer(kind{=}c_int)$	入力	粒子群オブジェクトの識別番号。

返り値

integer(kind=c_int) 型のスカラー値。

機能

全粒子数を返す。

8.2.12 get_psys_fptr (Fortran のみ)

Fortran 構文

```
subroutine fdps_ctrl%get_psys_fptr(psys_num,fptr_to_FP)
```

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
psys_num	integer(kind=c_int)	入力	粒子群オブジェクトの 識別番号。
fptr_to_FP	FullParticle型, dimension(:), pointer	入出力	粒子群オブジェクトで 管理されている Full- Particle 型の粒子配列 へのポインタ。

返り値

なし

機能

識別番号 psys_num の粒子群オブジェクトで管理されている FullParticle 型の粒子配列へのポインタを取得する。配列サイズは本 API の呼出時のローカル粒子数 (API get_nptcl_loc の返り値) にセットされる。正常にアクセス可能なのは、 $fptr_to_FP(i)$ (i=1~ローカル粒子数) である。本 API は粒子群オブジェクトで管理される FullParticle 型の粒子配列への唯一のアクセス方法を提供する。本 API の使用例を以下に示す。この例では、粒子群オブジェクトで管理されている $full_particle$ 型 の粒子配列のポインタを取得し、値を設定している:

Listing 8.1: API get_psys_fptr の使用例

```
1 !* Local variables
2 type(full_particle), dimension(:), pointer :: ptcl
3 !* Get the pointer to full particle data
4 call fdps_ctrl%get_psys_fptr(psys_num,ptcl)
5 !* Set particle data
6 do i=1,nptcl_loc
7    ptcl(i)%mass = ! do something
8    ptcl(i)%pos%x = ! do something
9    ptcl(i)%pos%y = ! do something
10    ptcl(i)%pos%z = ! do something
11 end do
```

8.2.13 fdps_get_psys_cptr (C言語のみ)

C 言語 構文

```
void * fdps_get_psys_cptr(const int psys_num);
```

仮引数仕様

```
      仮引数名
      データ型
      入出力属性
      定義

      psys_num
      const int
      入力
      粒子群オブジェクトの識別番号。
```

返り値

void *型。

機能

識別番号 psys_num の粒子群オブジェクトで管理されている FullParticle 型の粒子配列の先頭アドレスを取得する。正常にアクセス可能なのは、配列要素が0から $n_{\text{ptcl,loc}}$ -1 の間である。ここで、 $n_{\text{ptcl,loc}}$ は API fdps_get_nptcl_loc の返り値である。本 API は粒子群オブジェクトで管理される FullParticle 型の粒子配列への唯一のアクセス方法を提供する。本 API の使用例を以下に示す。この例では、粒子群オブジェクトで管理されている full_particle 型の粒子配列のポインタを取得し、値を設定している:

Listing 8.2: API fdps_get_psys_cptr の使用例

```
1 // Local variables
2 struct full_particle *ptcl;
3 // Get the pointer to full particle data
4 ptcl = (struct full_particle *) fdps_get_psys_cptr(psys_num);
5 // Set particle data
6 for (i = 0; i < nptcl_loc; i++) {
7    ptcl[i].mass = // do something
8    ptcl[i].pos.x = // do something
9    ptcl[i].pos.y = // do something
10    ptcl[i].pos.z = // do something
11 }</pre>
```

8.2.14 exchange_particle

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%exchange_particle(psys_num,dinfo_num)

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
- •	integer(kind=c_int)	入力	粒子群オブジェクトの識別番号。
	integer(kind=c_int)	入力	領域情報オブジェクトの識別番号。

返り値

なし

機能

粒子が適切なドメインに配置されるように、粒子の交換を行う。

8.2.15 add_particle

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%add_particle(psys_num,ptcl)

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
psys_num ptcl cptr_to_fp	integer(kind=c_int)	入力	粒子群オブジェクトの識別番号。
	FullParticle 型	入力	追加したい粒子のデータ。
	void *型	入力	追加したい粒子のデータのアドレス。

返り値

なし

機能

識別番号 psys_num の粒子群オブジェクトで管理されている FullParticle 型の粒子配列の末尾に、粒子 ptcl (Fortran の場合) 或いは ポインタ cptr_to_fp が指す粒子データのコピー (C言語の場合) を追加する。

8.2.16 remove_particle

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%remove_particle(psys_num,nptcl,ptcl_indx)

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
psys_num	$integer(kind=c_int)$	入力	粒子群オブジェクトの 識別番号。
nptcl	$integer(kind=c_int)$	入力	配列 ptcl_indx のサイ ズ。
$ptcl_indx$	integer(kind=c_int), dimension(nptcl)	入力	消去する粒子の配列インデックス (配列要素番号)を格納した配列。 C言語では配列の先頭アドレスを引数に指定することに 注意。

返り値

なし

機能

配列 ptcl_indx に格納されている配列インデックスの粒子を削除する。この関数を呼ぶ前後で、粒子の配列インデックスが同じである事は保証されない。

$8.2.17 \quad adjust_pos_into_root_domain$

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%adjust_pos_into_root_domain(psys_num,dinfo_num)

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
1 0	integer(kind=c_int)	入力	粒子群オブジェクトの識別番号。
	integer(kind=c_int)	入力	領域情報オブジェクトの識別番号。

返り値

なし

機能

周期境界条件の場合に、計算領域からはみ出した粒子を計算領域に適切に戻す。

8.2.18 sort_particle

Fortran 構文

```
subroutine fdps_ctrl%sort_particle(psys_num,pfunc_comp)
```

C 言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
psys_num	integer(kind=c_int)	入力	粒子群オブジェクトの識別番号。
pfunc_comp	type(c_funptr)	入力	比較関数の関数ポインタ。

返り値

なし

機能

粒子群オブジェクトが保持する FullParticle の配列を比較関数 comp (この関数ポインタが pfunc_comp) で指示したように並べ替える。比較関数は返り値を logical(kind=c_bool) 型とし、引数は 識別番号 psys_num に対応した FullParticle 型を 2 つ取るものである必要がある (比較関数の引数のデータ型が、識別番号 psys_num で指定される粒子群オブジェクトの生成 に使用した FullParticle 型と異なる場合の動作は不定である)。例として以下に FullParticle が メンバ変数 id を持っており id の昇順に並べ替える場合の比較関数を示す (Fortran の場合)。

Listing 8.3: 比較関数の例

```
1 function comp(left, right) bind(c)
2   use, intrinsic :: iso_c_binding
3   use user_defined_types
4   implicit none
5   logical(kind=c_bool) :: comp
6   type(full_particle), intent(in) :: left, right
```

- comp = (left%id < right%id)</pre>
- 8 end function comp

ここで、構造体 full_particle は、モジュール user_defined_types 内で定義されているものとする。

8.3 領域情報オブジェクト用 API

本節では、第2章で説明した領域情報クラスのオブジェクト (以後、領域情報オブジェクトと呼ぶ) に関する API について説明する。FDPS 本体において、領域情報オブジェクトは、領域情報を保持し、領域分割を行う API を提供する。Fortran/C 言語 インターフェースを用いたプログラムでは、領域情報オブジェクトを識別番号で管理する。

領域情報オブジェクトを操作する全 API の名称の一覧を以下に示す:

```
(fdps_)create_dinfo
(fdps_)delete_dinfo
(fdps_)init_dinfo
(fdps_)get_dinfo_time_prof
(fdps_)clear_dinfo_time_prof
(fdps_)set_nums_domain
(fdps_)set_boundary_condition
(fdps_)get_boundary_condition
(fdps_)set_pos_root_domain
(fdps_)collect_sample_particle
(fdps_)decompose_domain
(fdps_)decompose_domain_all
```

ここで、(fdps_) の意味は前節冒頭で述べた通りである。 以下、順に、各 API の仕様を記述する。

8.3.1 create_dinfo

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%create_dinfo(dinfo_num)

C言語 構文

void fdps_create_dinfo(int *dinfo_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
dinfo_num	integer(kind=c_int)	入出力	領域情報オブジェクトの識別番号を受け取るための変数。C言語では変数のアドレスを引数に指定する必要があることに注意。

返り値

なし

機能

領域情報オブジェクトをメモリ上に生成し、そのオブジェクトの識別番号を返す。

8.3.2 delete_dinfo

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%delete_dinfo(dinfo_num)

C言語 構文

void fdps_delete_dinfo(const int dinfo_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
dinfo_num	integer(kind=c_int)	入力	領域情報オブジェクトの識別番号を与え るための変数。

返り値

なし

機能

識別番号 dinfo_num の領域情報オブジェクトをメモリから消去する。

8.3.3 init_dinfo

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%init_dinfo(dinfo_num,coef_ema)

C 言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
dinfo_num	$integer(kind=c_int)$	入力	領域情報オブジェクトの識別番号を与え るための変数。
coef_ema	$real(kind = c_float)$	入力	指数移動平均の平滑化係数。Fortran の場合、この引数は省略可能で、省略された場合、デフォルト値は 1 が使用される。C言語の場合、変数の値が <0 または >1 の場合、自動的にFortran のデフォルト値が使用される。

返り値

なし

機能

領域情報オブジェクトを初期化し、指数移動平均の平滑化係数を設定する。この係数の許される値は0から1である。それ以外の値を入れた場合はエラーメッセージを送出しプログラムは終了する。大きくなるほど、最新の粒子分布の情報が領域分割に反映されやすい。1の場合、最新の粒子分布の情報のみ反映される。0の場合、最初の粒子分布の情報のみ反映される。1度は呼ぶ必要がある。過去の粒子分布の情報を領域分割に反映する必要がある理由については、Ishiyama, Fukushige & Makino (2009, Publications of the Astronomical Society of Japan, 61, 1319) を参照のこと。

8.3.4 get_dinfo_time_prof

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%get_dinfo_time_prof(dinfo_num,prof)

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
dinfo_num	integer(kind=c_int)	入力	領域情報オブジェクトの識別番号を与え
			るための変数。
prof	$type(fdps_time_prof)$	入出力	領域情報オブジェクトの API でかかった
			時間を受け取るための変数。C言語で
			は引数に変数のアドレスを指定す
			る必要があることに注意。

返り値

なし

機能

領域情報オブジェクトのAPIである (fdps_)collect_sample_particle と (fdps_)decompose_domain にかかった時間 (ミリ秒単位) を fdps_time_prof 型変数のメンバ変数である collect_sample_particles と decompose_domain に格納する。

8.3.5 clear_dinfo_time_prof

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%clear_dinfo_time_prof(dinfo_num)

C言語 構文

void fdps_clear_dinfo_time_prof(const int dinfo_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
dinfo_num	integer(kind=c_int)	入力	領域情報オブジェクトの識別番号を与え るための変数。

返り値

なし

機能

FDPS 本体に用意された識別番号 dinfo_num の領域情報オブジェクトの TimeProfile 型プライベートメンバ変数のメンバ変数 collect_sample_particles と decompose_domain の値を 0 クリアする。ここで、TimeProfile 型は Fortran/C 言語インターフェースで用意された fdps_time_prof 型に対応する C++のデータ型のことである (詳細は、FDPS 本体の仕様書を参照)。本 API は時間計測をリセットするために使用する。

8.3.6 set_nums_domain

Fortran 構文

```
subroutine fdps_ctrl%set_nums_domain(dinfo_num,nx,ny,nz)
```

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
dinfo_num	$integer(kind=c_int)$	入力	領域情報オブジェクトの識別番号を与え るための変数。
nx	$integer(kind=c_int)$	入力	x 軸方向のルートドメインの分割数。
ny	$integer(kind{=}c_int)$	入力	y軸方向のルートドメインの分割数。
nz	$integer(kind=c_int)$	入力	z軸方向のルートドメインの分割数で、デ
			フォルトは 1。

返り値

なし

機能

計算領域の分割する方法を設定する。nx, ny, nz はそれぞれ x 軸、y 軸、z 軸方向の計算領域の分割数である。呼ばなければ自動的にnx, ny, nz が決まる。呼んだ場合に入力するnx, ny, nz の総積がMPI プロセス数と等しくなければ、FDPS はエラーメッセージを送り、プログラムを止める。

8.3.7 set_boundary_condition

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%set_boundary_condition(dinfo_num,bc)

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
dinfo_num	$integer(kind=c_int)$	入力	領域情報オブジェクトの識別番号を与え るための変数。
bc	$integer(kind{=}c_int)$	入力	境界条件を与えるための変数。

返り値

なし

機能

境界条件の設定をする。許される入力は、第4.6節で説明した境界条件型である。すなわち、Fortranでは、fdps_bc_open(開境界)、fdps_bc_periodic_x と fdps_bc_periodic_y と fdps_bc_periodic_z(それぞれx, y, z 軸のみ周期境界でそれ以外が開境界)、fdps_bc_periodic_xy と fdps_bc_periodic_xz と fdps_bc_periodic_yz(それぞれxy, xz, yz 軸のみ周期境界でそれ以外が開境界)、fdps_bc_periodic_xyz(xyz 軸すべて周期境界)、fdps_bc_shearing_box(シアリングボックス)、fdps_bc_user_defined(ユーザー定義の境界条件)である。ただし、fdps_bc_shearing_box と fdps_bc_user_defined は未実装である。C 言語でも上記に対応する境界条件型が用意されているので、それらのみ指定可能である。

8.3.8 get_boundary_condition

Fortran 構文

function fdps_ctrl%set_boundary_condition(dinfo_num)

C言語 構文

int fdps_get_boundary_condition(const int dinfo_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
dinfo_num	integer(kind=c_int)	入力	領域情報オブジェクトの識別番号を与え るための変数。

返り値

integer(kind=c_int) 型のスカラー値。

機能

現在設定されている境界条件の情報を整数値として返す。取りうる値は境界条件型 (第 4.6 節参照) の各列挙子に対応する整数である。

8.3.9 set_pos_root_domain

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%set_pos_root_domain(dinfo_num,low,high)

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
dinfo_num	$integer(kind=c_int)$	入力	領域情報オブジェクトの識別番号を与えるため の変数。
low	Fortran の場合、以下のいずれか: real(kind=c_float), dimension(space_dim) real(kind=c_double), dimension(space_dim) type(fdps_f32vec) type(fdps_f64vec) C 言語では fdps_f32vec *型のみ	入力	ルートドメイン の下限 (閉境 界)。
high	low と同じ	入力	ルートドメイ ンの上限 (開境 界)。

返り値

なし

機能

計算領域の下限と上限を設定する。開放境界条件の場合は呼ぶ必要はない。それ以外の境界条件の場合は、呼ばなくても動作するが、その結果が正しいことは保証できない。highの座標の各値は1owの対応する座標よりも大きくなければならない。そうでない場合は、FDPSはエラーメッセージを送出し、ユーザープログラムを終了させる。

$8.3.10 \quad collect_sample_particle$

Fortran 構文

C 言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
dinfo_num	integer(kind=c_int)	入力	領域情報オブジェクトの識別番号を与え
			るための変数。
${\tt psys_num}$	$integer(kind{=}c_int)$	入力	領域分割のためのサンプル粒子を提供す
			る粒子群オブジェクトの識別番号を与え
			るための変数。
clear	$logical(kind=c_bool)$	入力	前にサンプルされた粒子情報をクリア
			するかどうかを決定するフラグ。.true.
			(Fortran の場合)/true (C言語の場合) でク
			リアする。Fortran では、この引数は省
			略可能であり、省略された場合のデフォ
	1/1 : 1 (1)	-1 - 1 -	ルト値は.true.である。
weight	$real(kind=c_float)$	入力	領域分割のためのサンプル粒子数を決め
			るためのウェイト。Fortranでは、この引数は省略可能であり、省略された場合の
			デフォルト値はこの API を呼び出したプ
			ロセスが担当する粒子数となる。C言語
			では負の値が入力された場合、自動的に
			Fortran におけるデフォルト値が設定さ
			れる。プロセス i のウェイトを w_i 、API
			(fdps_)set_nptcl_smpl で設定されたプ
			ロセスあたりのサンプル粒子数を n_{smpl} 、
			プロセス数を $n_{ m proc}$ とすると、プロセス
			i からは $n_{\mathrm{smpl}}n_{\mathrm{proc}}(w_i/\sum_k w_k)$ 個の粒子
			数がサンプルされる。

返り値

なし

機能

識別番号 psys_num の粒子群オブジェクトから粒子をサンプルする。clear によってこれより前にサンプルした粒子の情報を消すかどうか決める。weight によってその MPI プロセスからサンプルする粒子の量を調整する (weight が大きいほどサンプル粒子数が多い)。

$8.3.11 \quad decompose_domain$

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%decompose_domain(dinfo_num)

C言語 構文

void fdps_decompose_domain(const int dinfo_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
dinfo_num	integer(kind=c_int)	入力	領域情報オブジェクトの識別番号を与え るための変数。

返り値

なし

機能

計算領域の分割を実行する。

8.3.12 decompose_domain_all

Fortran 構文

C 言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
dinfo_num	$integer(kind=c_int)$	入力	領域情報オブジェクトの識別番号を与え るための変数。
psys_num	$integer(kind=c_int)$	入力	領域分割のためのサンプル粒子を提供する粒子群オブジェクトの識別番号を与えるための変数。
weight	$real(kind=c_float)$	入力	領域分割のためのサンプル粒子数を決めるためのウェイト。ウェイトの意味とデフォルト値については、API (fdps_)collect_sample_particleを参照。

返り値

なし

機能

識別番号 psys_num の粒子群オブジェクトから粒子をサンプルし、続けてルートドメインの分割を行う。すなわち、領域情報オブジェクトの API である (fdps_)collect_sample_particle と (fdps_)decompose_domain が行うことをこの API は一度に行う。

8.4 ツリーオブジェクト用 **API**

本節では、第2章で説明した相互作用ツリークラスのオブジェクト (以後、単に**ツリーオブジェクト**と呼ぶ) に関する API について説明する。FDPS 本体において、ツリーオブジェクトは粒子間相互作用の計算を行う API を提供する。Fortran/C 言語 インターフェースを用いたプログラムでは、ツリーオブジェクトを識別番号で管理する。

ツリーオブジェクトを操作する全 API の名称の一覧を以下に示す:

```
(fdps_)create_tree
(fdps_)delete_tree
(fdps_)init_tree
(fdps_)get_tree_info
(fdps_)get_tree_memsize
(fdps_)get_tree_time_prof
(fdps_)clear_tree_time_prof
(fdps_)get_num_interact_ep_ep_loc
(fdps_)get_num_interact_ep_sp_loc
(fdps_)get_num_interact_ep_ep_glb
(fdps_)get_num_interact_ep_sp_glb
(fdps_)clear_num_interact
(fdps_)get_num_tree_walk_loc
(fdps_)get_num_tree_walk_glb
(fdps_)set_particle_local_tree
(fdps_)get_force
(fdps_)calc_force_all_and_write_back
(fdps_)calc_force_all
(fdps_)calc_force_making_tree
(fdps_)calc_force_and_write_back
(fdps_)get_neighbor_list
(fdps_)get_epj_from_id
```

以下、ツリーの種類に関して記述した後に、順に、各APIの仕様を記述していく。

8.4.1 ツリーの種別

本節ではFDPS Fortran/C言語 インターフェースで使用可能なツリーの種類とその定義について説明する。自然界のほとんどの相互作用は、長距離力と短距離力に分類することができる。これに応じて、FDPS では長距離力計算と短距離力計算で異なるツリーを用いる。ここでは、簡単のため、それぞれ、長距離力用ツリーと短距離力用ツリーと呼ぶことにする。FDPS ではこれら 2 種類のツリーが、さらに動作モードに応じて細分される。以下、長距離力用ツリーと短距離力用ツリーに分けて、記述する。

8.4.1.1 長距離力用ツリーの種別

長距離用ツリーは、モーメントの計算方法別に 6種類に細分される。粒子の重心を中心として単極子まで計算する場合を Monopole 型、同じく四重極子までのモーメントを計算する場合を Quadrupole 型と呼ぶ。粒子の幾何中心を中心として単極子まで、双極子まで、そして、四重極子までのモーメントを計算する場合を、それぞれ、Monopole Geometric Center 型、Dipole Geometric Center 型、Quadrupole Geometric Center 型と呼ぶ。 P^3T (Particle-Particle-Particle-Tree) 法等、一部の相互作用計算法では、近傍粒子探索が必要となる場合がある。そのような方法を使うユーザ用に、近傍粒子探索を可能とした Monopole 型と Quadrupole 型も用意している。これらを、それぞれ、Monopole With Scatter Search 型と呼ぶ。 さらに、 P^3M (Particle-Particle-Particle-Mesh) 法や Tree PM 法などでは、長距離力をカットオフ半径によって遠方成分と近傍成分に分け、遠方成分は PM 法で、近傍成分は直接計算かツリー法で計算する。このような場合、カットオフ半径に含まれるツリー構造だけを考慮すればよく、この点における最適化を行える。これを Monopole 型に適用したものが、Monopole With Cutoff 型である。以上が、本 Fortran/C 言語 インターフェースで使用可能な長距離力用ツリーである。一覧は、第 4.4 節の表 4.3 に示している。

8.4.1.2 短距離カ用ツリーの種別

短距離用ツリーは、相互作用の仕方別に以下の3種類に細分される:

1. Gather 型

相互作用の到達距離が有限で、かつ、その到達距離がi粒子の大きさ、或いは、i粒子が持つ探索半径で決まる場合。

2. Scatter 型

相互作用の到達距離が有限で、かつ、その到達距離がj粒子の大きさ、或いは、j粒子が持つ探索半径で決まる場合。

3. Symmetry 型

相互作用の到達距離が有限で、かつ、その到達距離がi,j 粒子の大きさ (i,j 粒子が持つ探索半径) のどちらか大きい方で決まる場合。

8.4.2 create_tree

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%create_tree(tree_num,tree_info_in)

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind = c_int)$	入出力	ツリーオブジェクトの識別番号を受け取るための変数。C言語では引数に変数のアドレスを指定する必要があることに注意。
tree_info_in	character (len=*,kind=c_char)	入力	生成するツリーの種別を指定 するための文字列。
tree_info	char *	入力	生成するツリーの種別を指定 するための文字列定数。

返り値

なし

機能

メモリ上にツリーオブジェクトを生成し、そのオブジェクトの識別番号を返す。ツリーオブジェクトの種類は、文字列 tree_info_in (Fortran の場合) 或いは 文字列定数 tree_info (C言語の場合) により指定される。長距離力用ツリーオブジェクトを生成する場合、文字列を以下のように指定する:

"Long, <force_type>, <epi_type>, <tree_mode>"

ここで、<tree_mode>として取れるのは、Monopole, Quadrupole, MonopoleGeometricCenter, DipoleGeometricCenter, QuadrupoleGeometricCenter, MonopoleWithScatterSearch, QuadrupoleWithScatterSearch, MonopoleWithCutoff のいずれかである。Longも含め、これらのキーワードは大文字・小文字が区別される。さらに、角括弧<>は入力してはならない。これらは第8.4.1.1節で説明した長距離力用ツリーの種別に対応している。短距離力用ツリーオブジェクトを生成する場合、文字列を以下のように指定する:

"Short, <force_type>, <epi_type>, <epj_type>, <search_mode>"

ここで、<search_mode>として取れるのは、Gather, Scatter, Symmetry のいずれかである。同様に、大文字・小文字が区別される。これらは第8.4.1.2節で説明した短距離用ツリーの種別に対応している。

長距離力用ツリーと短距離力用ツリーに共通して、<force_type>, <epi_type>, <epi_type>にはユーザー定義型の派生データ型名 (Fortran の場合) 或いは 構造体名 (C言語の場合) を指定する。各カンマの前後に空白があってはならない。また、文字列はすべて小文字で入力されなければならない。

8.4.3 delete_tree

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%delete_tree(tree_num)

C言語 構文

void fdps_delete_tree(const int tree_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	integer(kind=c_int)	入力	ツリーオブジェクトの識別番号を受け取る ための変数。

返り値

なし

機能

識別番号 tree_num のツリーオブジェクトをメモリ上から削除する。

8.4.4 init_tree

Fortran 構文

C 言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind=c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。
nptcl	$integer(kind=c_int)$	入力	粒子配列の上限。
theta	$real(kind=c_float)$	入力	見こみ角に対する基準。Fortran の場
			合、この引数は省略可能であり、省
			略された場合のデフォルト値は0.7で
			ある。C言語では負値が入力された
			場合、自動的に Fortran におけるデ
			フォルト値が設定される。
n_{leaf_limit}	$integer(kind=c_int)$	入力	ツリーを切るのをやめる粒子数の上
			限。Fortran の場合、この引数は省略
			可能であり、省略された場合のデフォ
			ルト値は8である。C 言語では負値
			が入力された場合、自動的に Fortran
			におけるデフォルト値が設定される。
n_group_limit	$integer(kind=c_int)$	入力	相互作用リストを共有する粒子数の
			上限。Fortran では省略可能であり、
			省略された場合のデフォルト値は64
			である。C言語では負値が入力され
			た場合、自動的に Fortran における
			デフォルト値が設定される。

返り値

なし

機能

識別番号 tree_num のツリーオブジェクトを初期化する。

8.4.5 get_tree_info

Fortran 構文

```
subroutine fdps_ctrl%get_tree_info(tree_num,tree_info)
```

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind=c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。
tree_info	character(len=*,kind=c_char)	入出力	ツリーの種別を示す文字列を受け取るための変数。C言語では引数に変数のアドレスを指定する必要があることに注意。
charlen	$\mathrm{size_t}$ *	入出力	tree_info に書き込まれた文 字列の長さ。

返り値

なし

機能

識別番号 tree_num のツリーの種別を示す文字列を取得する。この文字列はツリー生成時に指定した文字列である。

8.4.6 get_tree_memsize

Fortran 構文

function fdps_ctrl%get_tree_memsize(tree_num)

C言語 構文

long long int fdps_get_tree_memsize(const int tree_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind=c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。

返り値

integer(kind=c_long_long)型。

機能

対象のオブジェクトが使用しているメモリー量を Byte 単位で返す。

8.4.7 get_tree_time_prof

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%get_tree_time_prof(tree_num,prof)

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	integer(kind=c_int) type(fdps_time_prof)	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。
prof		入出力	ツリーオブジェクトのAPIでかかった時間を受け取るための変数。C言語の場合、変数のアドレスを引数に指定する必要があることに注意。

返り値

なし

機能

ローカルツリー構築、グローバルツリー構築、力の計算 (walk 込)、ローカルツリーのモーメント計算、LET (Local Essential Tree) 構築、LET 交換にかかった時間(ミリ秒単位)を fdps_time_prof 型のメンバ変数の該当部分 make_local_tree, make_global_tree, calc_force, calc_moment_local_tree, calc_moment_global_tree, make_LET_1st_, make_LET_2nd, exchange_LET_1st, exchange_LET_2nd に格納する。長距離力や Short-Scatter 型ツリーの様に LET 交換が1段階通信の場合は make_LET_2nd, exchange_LET_2nd に値は格納されない。

8.4.8 clear_tree_time_prof

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%clear_tree_time_prof(tree_num)

C言語 構文

void fdps_clear_tree_time_prof(const int tree_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind=c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。

返り値

なし

機能

FDPS 本体に用意された識別番号 tree_num のツリーオブジェクトの TimeProfile 型プライベートメンバ変数のメンバ変数 make_local_tree, make_global_tree, calc_force, calc_moment_local_tree, calc_moment_global_tree, make_LET_1st, make_LET_2nd, exchange_LET_1st, exchange_LET_2nd の値を 0 クリアする。ここで、TimeProfile 型は Fortran/C 言語インターフェースで用意された fdps_time_prof 型に対応する C++のデータ型のことである (詳細は、FDPS 本体の仕様書を参照)。本 API は時間計測をリセットするために使用する。

8.4.9 get_num_interact_ep_ep_loc

Fortran 構文

function fdps_ctrl%get_num_interact_ep_ep_loc(tree_num)

C言語 構文

long long int fdps_get_num_interact_ep_ep_loc(const int tree_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind=c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。

返り値

integer(kind=c_long_long)型。

機能

自プロセス内で計算した EPIと EPJ の相互作用数を返す。

8.4.10 get_num_interact_ep_sp_loc

Fortran 構文

function fdps_ctrl%get_num_interact_ep_sp_loc(tree_num)

C言語 構文

long long int fdps_get_num_interact_ep_sp_loc(const int tree_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind=c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。

返り値

integer(kind=c_long_long)型。

機能

自プロセス内で計算した EPIと SPJ の相互作用数を返す。

8.4.11 get_num_interact_ep_ep_glb

Fortran 構文

function fdps_ctrl%get_num_interact_ep_ep_glb(tree_num)

C言語 構文

long long int fdps_get_num_interact_ep_ep_glb(const int tree_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind=c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。

返り値

integer(kind=c_long_long)型。

機能

全プロセス内で計算した EPIと EPJ の相互作用数を返す。

8.4.12 get_num_interact_ep_sp_glb

Fortran 構文

function fdps_ctrl%get_num_interact_ep_sp_glb(tree_num)

C言語 構文

long long int fdps_get_num_interact_ep_sp_glb(const int tree_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind{=}c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。

返り値

integer(kind=c_long_long)型。

機能

全プロセスで計算した EPIと SPJ の相互作用数を返す。

8.4.13 clear_num_interact

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%clear_num_interact(tree_num)

C言語 構文

void fdps_clear_num_interact(const int tree_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind=c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。

返り値

なし

機能

EP-EP,EP-SP の local,global の相互作用数を 0 クリアする。

8.4.14 get_num_tree_walk_loc

Fortran 構文

function fdps_ctrl%get_num_tree_walk_loc(tree_num)

C言語 構文

long long int fdps_get_num_tree_walk_loc(const int tree_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind{=}c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。

返り値

integer(kind=c_long_long)型。

機能

自プロセスでの相互作用計算時の tree walk 数を返す。

8.4.15 get_num_tree_walk_glb

Fortran 構文

function fdps_ctrl%get_num_tree_walk_glb(tree_num)

C言語 構文

long long int fdps_get_num_tree_walk_glb(const int tree_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind=c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。

返り値

integer(kind=c_long_long)型。

機能

全プロセスでの相互作用計算時の tree walk 数を返す。

8.4.16 set_particle_local_tree

Fortran 構文

C 言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num psys_num clear	integer(kind=c_int) integer(kind=c_int) logical(kind=c_bool)	入力 入力 入力	ツリーオブジェクトの識別番号。 粒子群オブジェクトの識別番号。 前に読込んだ粒子データをクリアするか どうか決定するフラグ。.true. (Fortran の場合)/true (C 言語の場合) でクリアす る。Fortran の場合、この引数は省略可能 引数で、デフォルト値は.true.である。

返り値

なし

機能

識別番号 tree_num のツリーオブジェクトに、識別番号 psys_num の粒子群オブジェクトが保持する粒子データを読み込ませる。引数 clear が.true. (Fortran の場合)/true (C言語の場合) ならば前に読込んだ粒子情報をクリアし、.false. (Fortran の場合)/false (C言語の場合) ならクリアしない。.false./false の場合、新しく読み込む粒子データは、これまで読み込まれた粒子データの後に (メモリ上連続して) 格納される。

8.4.17 get_force

Fortran 構文

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num i force	integer(kind=c_int) integer(kind=c_int) Force 型	入力 入力 入出力	ツリーオブジェクトの識別番号。 粒子配列のインデックス。 i番目に読み込まれた粒子の相互作用 計算の結果を格納する変数。
cptr_to_force	void *	入出力	i番目に読み込まれた粒子の相互作用 計算の結果を格納する変数のアドレ ス。

返り値

なし

機能

識別番号 tree_num のツリーオブジェクトが API (fdps_) set_particle_local_tree で i 番目に読み込んだ粒子の受ける作用を返す。i が取りうる最小値は、Fortran では 1、C 言語では 0 である。force のデータ型は、当該ツリーオブジェクトを生成するときに使用した派生データ型と同じでなければならない。同様、cptr_to_force が指す先のデータの型は、当該ツリーオブジェクトを生成するときに仕様した構造体と同じでなければならない。

8.4.18 calc_force_all_and_write_back

Fortran 構文 (短距離力の場合)

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num pfunc_ep_ep	integer(kind=c_int) type(c_funptr)	入力 入力	ツリーオブジェクトの識別番号。 EPIとEPJ間の相互作用を計算する関 数ポインタ。
<pre>psys_num dinfo_num list_mode</pre>	integer(kind=c_int) integer(kind=c_int) integer(kind=c_int)	入力 入力 入力	粒子群オブジェクトの識別番号。 領域情報オブジェクトの識別番号。 相互作用リストを使い回すかを決定す る変数(詳細は「機能」の欄を参照のこ と)。

返り値

なし

機能

短距離版。識別番号 psys_num で指定された粒子群オブジェクトの粒子すべての相互作用を計算し、その計算結果を粒子群オブジェクトに書き戻す。関数ポインタとして渡される関数は第5.2節で述べたインターフェースとなっている必要がある。

引数 list_mode は第 4.6.2 節で説明した相互作用リストモード型で、相互作用リストの使い回し (再利用) に関する振舞を制御するための変数である。値は、fdps_make_list、fdps_make_list_for_reuse、fdps_reuse_list のいずれかでなければならない。これ以外が指定された場合の動作は不定である。引数の値が fdps_make_list ならば、新たに相互作用リストを作成し、相互作用計算を行う。この際に作成した相互作用リストの情報は FDPS 内部に保持されず、次の相互作用計算時に再利用することはできない。値が fdps_make_list_for_

reuse のときは、新たに相互作用リストを作成し相互作用計算を行う。作成した相互作用リストを FDPS 内部に保持するため、次回の相互作用計算時に、今回作った相互作用リストを再利用して相互作用計算を行うことができる。値が fdps_reuse_list ならば、前回 fdps_make_list_for_reuse を選んだ際に作成した相互作用リストを再利用して相互作用計算を行う。引数が省略された場合、デフォルト値 fdps_make_list が採用される。

Fortran 構文 (長距離力の場合)

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	integer(kind=c_int)	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。
pfunc_ep_ep	$type(c_funptr)$	入力	EPIと EPJ 間の相互作用を計算する関
			数ポインタ。
pfunc_ep_sp	$type(c_funptr)$	入力	EPIと SPJ 間の相互作用を計算する関
			数ポインタ。
psys_num	$integer(kind=c_int)$	入力	粒子群オブジェクトの識別番号。
dinfo_num	$integer(kind=c_int)$	入力	領域情報オブジェクトの識別番号。
list_mode	$integer(kind=c_int)$	入力	相互作用リストを使い回すかを決定す
			る変数 (詳細は Fortran 構文 (短距離力
			の場合) の「機能」の欄を参照のこと)。

返り値

なし

機能

長距離版。関数ポインタを2つ取る点を除いて短距離版と同じ。

C言語 構文 (短距離力・長距離力共用)

仮引数仕様

仮引数名	定義
tree_num	
pfunc_ep_ep	EPI と EPJ 間の相互作用を計算する関数ポインタ。
pfunc_ep_sp	EPIと SPJ 間の相互作用を計算する関数ポインタ。識別番号tree_num の
	ツリーオブジェクトが短距離力用のツリーの場合には使用されない。その
	場合、NULLポインタを指定しておけばよい。
psys_num	粒子群オブジェクトの識別番号。
dinfo_num	領域情報オブジェクトの識別番号。
clear	前回の相互作用計算の結果をクリアするかを指定するためのフラグ。true
	の場合、クリアする。
list_mode	相互作用リストを使い回すかを決定する変数 (詳細は Fortran 構文 (短距離
	力の場合) の「機能」の欄を参照のこと)。ただし、Fortran の場合と次の
	相違点がある。(i)引数は省略可能ではない。もし負の整数値が指定された
	場合、自動的に Fortran におけるデフォルト値に設定される。 (ii) C 言語
	の相互作用リストモード型を使って指定する必要がある。

返り値

なし

機能

Fortran 版の API の説明を参照のこと。

8.4.19 calc_force_all

Fortran 構文 (短距離力の場合)

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	integer(kind=c_int)	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。
pfunc_ep_ep	$type(c_funptr)$	入力	EPIと EPJ間の相互作用を計算する関
			数ポインタ。
psys_num	$integer(kind=c_int)$	入力	粒子群オブジェクトの識別番号。
dinfo_num	$integer(kind=c_int)$	入力	領域情報オブジェクトの識別番号。
list_mode	$integer(kind=c_int)$	入力	相互作用リストを使い回すかを決定
			する変数 (詳細は API (fdps_)calc
			force_all_and_write_back ${\mathcal O}$ Fortran
			構文 (短距離力の場合) の「機能」の欄
			を参照のこと)。

返り値

なし

機能

短距離版。API calc_force_all_and_write_back から計算結果の書き戻しがなくなったもの。

Fortran 構文 (長距離力の場合)

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind=c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。
pfunc_ep_ep	$type(c_funptr)$	入力	EPIと EPJ間の相互作用を計算する関
pfunc_ep_sp	$type(c_funptr)$	入力	数ポインタ。 EPIと SPJ 間の相互作用を計算する関 数ポインタ。
psys_num	$integer(kind=c_int)$	入力	粒子群オブジェクトの識別番号。
dinfo_num	$integer(kind = c_int)$	入力	領域情報オブジェクトの識別番号。
list_mode	$integer(kind=c_int)$	入力	相互作用リストを使い回すかを決定する変数 (詳細は API (fdps_)calcforce_all_and_write_back の Fortran構文 (短距離力の場合) の「機能」の欄を参照のこと)。

返り値

なし

機能

長距離版。関数ポインタを2つ取る点を除いて短距離版と同じ。

C言語 構文 (短距離力・長距離力共用)

仮引数仕様

仮引数名	定義
tree_num	ツリーオブジェクトの識別番号。
pfunc_ep_ep	EPIと EPJ 間の相互作用を計算する関数ポインタ。
pfunc_ep_sp	EPIと SPJ 間の相互作用を計算する関数ポインタ。識別番号tree_num の
	ツリーオブジェクトが短距離力用のツリーの場合には使用されない。その
	場合、NULLポインタを指定しておけばよい。
psys_num	粒子群オブジェクトの識別番号。
dinfo_num	領域情報オブジェクトの識別番号。
clear	前回の相互作用計算の結果をクリアするかを指定するためのフラグ。true
	でクリアする。
list_mode	相互作用リストを使い回すかを決定する変数 (詳細は API (fdps_)calc_
	force_all_and_write_back の C 言語構文の記述を参照のこと)。

返り値

なし

機能

Fortran 版の API の説明を参照のこと。

8.4.20 calc_force_making_tree

Fortran 構文 (短距離力の場合)

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind=c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番 号。
pfunc_ep_ep	$type(c_funptr)$	入力	EPIとEPJ間の相互作用を計 算する関数ポインタ。
pfunc_ep_sp	$type(c_funptr)$	入力	EPIとSPJ間の相互作用を計 算する関数ポインタ。
dinfo_num	$integer(kind=c_int)$	入力	領域情報オブジェクトの識別 番号。

返り値

なし

機能

短距離版。ツリーオブジェクトに読み込まれた粒子群オブジェクトの粒子すべての相互作用を計算する。API calc_force_all_and_write_back に対して、粒子群オブジェクトからの粒子読み込みと計算結果の書き戻しがなくなったもの。

Fortran 構文 (長距離力の場合)

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind=c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。
pfunc_ep_ep	$type(c_funptr)$	入力	EPIと EPJ間の相互作用を計 算する関数ポインタ。
pfunc_ep_sp	$type(c_funptr)$	入力	EPIとSPJ間の相互作用を計 算する関数ポインタ。
dinfo_num	$integer(kind=c_int)$	入力	粒子群オブジェクトの識別番 号。

返り値

なし

機能

長距離版。関数ポインタを2つ取る点を除いて短距離版と同じ。

C言語 構文 (短距離力・長距離力共用)

仮引数仕様

仮引数名	定義
tree_num	ツリーオブジェクトの識別番号。
pfunc_ep_ep	EPIと EPJ 間の相互作用を計算する関数ポインタ。
pfunc_ep_sp	EPIと SPJ 間の相互作用を計算する関数ポインタ。識別番号tree_num の
	ツリーオブジェクトが短距離力用のツリーの場合には使用されない。その
	場合、NULLポインタを指定しておけばよい。
dinfo_num	粒子群オブジェクトの識別番号。
clear	前回の相互作用計算の結果をクリアするかを指定するためのフラグ。true
	でクリアする。

返り値

なし

機能

Fortran 版の API の説明を参照のこと。

8.4.21 calc_force_and_write_back

Fortran 構文 (短距離力の場合)

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind = c_int)$	入力	
pfunc_ep_ep	$type(c_funptr)$	入力	EPIとEPJ間の相互作用を計 算する関数ポインタ。
dinfo_num	$integer(kind=c_int)$	入力	粒子群オブジェクトの識別番 号。

返り値

なし

機能

短距離版。calc_force_all_and_write_backに対して、粒子群オブジェクトからの粒子読込、ローカルツリーの構築、グローバルツリーの構築、グローバルツリーのモーメントの計算がなくなったもの。

Fortran 構文 (長距離力の場合)

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind=c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番号。
pfunc_ep_ep	$type(c_funptr)$	入力	EPIとEPJ間の相互作用を計 算する関数ポインタ。
pfunc_ep_sp	$type(c_funptr)$	入力	EPIとSPJ間の相互作用を計 算する関数ポインタ。
dinfo_num	$integer(kind=c_int)$	入力	領域情報オブジェクトの識別 番号。

返り値

なし

機能

長距離版。関数ポインタを2つ取る点を除いて短距離版と同じ。

C言語 構文 (短距離力・長距離力共用)

仮引数仕様

仮引数名	定義
tree_num	ツリーオブジェクトの識別番号。
pfunc_ep_ep	EPIと EPJ 間の相互作用を計算する関数ポインタ。
pfunc_ep_sp	EPIと SPJ 間の相互作用を計算する関数ポインタ。識別番号tree_num の
	ツリーオブジェクトが短距離力用のツリーの場合には使用されない。その
	場合、NULLポインタを指定しておけばよい。
dinfo_num	領域情報オブジェクトの識別番号。
clear	前回の相互作用計算の結果をクリアするかを指定するためのフラグ。true
	でクリアする。

返り値

なし

機能

Fortran 版の API の説明を参照のこと。

8.4.22 get_neighbor_list

Fortran 構文

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	$integer(kind=c_int)$	入力	ツリーオブジェクトの識別番 号。
pos	type(fdps_f64vec)	入力	近傍粒子を求めたい粒子の位置。C言語では引数に変数のアドレスを指定する必要があることに注意。
r_search	$real(kind=c_double)$	入力	近傍粒子を求めたい粒子の探 索半径。
num_epj	$integer(kind = c_int)$	入出力	探索して求めた近傍粒子数を 格納するための変数。C言語 では引数に変数のアドレ スを指定する必要がある ことに注意。
fptr_to_EPJ	EssentialParticleJ型, dimension(:), pointer	入出力	近傍粒子として同定された EssentialParticleJ型粒子へ のポインタ。
cptr_to_epj	void **	入出力	近傍粒子として同定された EssentialParticleJ型粒子の 配列の先頭アドレスを格納す る変数のアドレス。近傍粒子 配列の先頭アドレスは void *型として返ってくるため、 void *型を格納できる変数の アドレスを指定する必要があ る。

返り値

なし

機能

識別番号 tree_num のツリーオブジェクトを使って、位置 pos、探索半径 r_search の粒子に対して近傍粒子探索を行い、近傍粒子数および近傍粒子の粒子配列へのポインタを返す。この粒子配列のデータ型は、ツリーオブジェクト作成時に指定した Essential Particle J 型である必要がある。

8.4.23 get_epj_from_id

Fortran 構文

C 言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
tree_num	integer(kind=c_int)	入力	ツリーオブジェクトの識別番
			号。
id	$type(kind=c_long_long)$	入力	取得したい粒子の id。
fptr_to_EPJ	EssentialParticleJ 型,	入出力	EssentialParticleJ 型へのポ
	pointer		インタ。

返り値

Fortran の場合にはなし、C言語の場合にはvoid*型。

機能

識別番号 tree_num のツリーオブジェクトの生成時に指定された EssentialParticleJ(EPJ) 型が、メンバ変数に粒子 id を持つ場合に使用可能 (対応するメンバ変数には id であることを示す FDPS 指示文が必要)。Fortran では、引数 fptr_to_EPJ に、引数 id で指定された粒子 id を持つ EPJ のポインタをセットする。対応する EPJ がない場合は、fptr_to_EPJ は未結合状態 (NULL() の状態) となる (組み込み関数 associated で結合状態を判定可能)。また、複数の EPJ が同じ id を持つ場合結果は保証されない。メンバ変数が粒子 id であることを指示する指示文については、第5章を参照。以下に使用例を示す。

Listing 8.4: 例

```
integer(kind=c_long_long) :: id
type(essential_particle_j), pointer :: epj

call fdps_ctrl%get_epj_from_id(tree_num,id,epj)
if (associated(epj)) then
   ! Do something using epj
write(*,*)'id_u=u',epj%id
else
write(*,*)'epj_uis_uNULL'
end if
```

C言語の場合、引数 id で指定された粒子 id を持つ EPJ のアドレスが返り値として返ってくる。対応する EPJ がない場合の振る舞いは NULL ポインタが返ってくる。

8.5 通信用 API

本節では、MPI プロセス間通信に関係した API について説明を行う。通信関係の全 API の名称の一覧を以下に示す:

```
(fdps_)get_rank
(fdps_)get_rank_multi_dim
(fdps_)get_num_procs
(fdps_)get_num_procs_multi_dim
(fdps_)get_logical_and
(fdps_)get_logical_or
get_min_value (Fortran のみ)
fdps_get_min_value_s32 (C言語のみ)
fdps_get_min_value_s64 (C言語のみ)
fdps_get_min_value_u32 (C言語のみ)
fdps_get_min_value_u64 (C言語のみ)
fdps_get_min_value_f32 (C言語のみ)
fdps_get_min_value_f64 (C言語のみ)
fdps_get_min_value_w_id_f32 (C言語のみ)
fdps_get_min_value_w_id_f64 (C言語のみ)
get_max_value (Fortran のみ)
fdps_get_max_value_s32 (C言語のみ)
fdps_get_max_value_s64 (C言語のみ)
fdps_get_max_value_u32 (C言語のみ)
fdps_get_max_value_u64 (C言語のみ)
fdps_get_max_value_f32 (C言語のみ)
fdps_get_max_value_f64 (C言語のみ)
fdps_get_max_value_w_id_f32 (C言語のみ)
fdps_get_max_value_w_id_f64 (C言語のみ)
```

```
get_sum (Fortran のみ)
fdps_get_sum_s32 (C言語のみ)
fdps_get_sum_s64 (C言語のみ)
fdps_get_sum_u32 (C言語のみ)
fdps_get_sum_u64 (C言語のみ)
fdps_get_sum_f32 (C言語のみ)
fdps_get_sum_f64 (C言語のみ)
broadcast (Fortran のみ)
fdps_broadcast_s32 (C言語のみ)
fdps_broadcast_s64 (C言語のみ)
fdps_broadcast_u32 (C言語のみ)
fdps_broadcast_u64 (C言語のみ)
fdps_broadcast_f32 (C言語のみ)
fdps_broadcast_f64 (C言語のみ)
(fdps_)get_wtime
(fdps_)barrier
```

以下、順に各 API の仕様を記述していく。ただし、API 名が次の正規表現パターンにマッチするものは単一の節でまとめて説明を行う:*get_min_value*、*get_max_value*、*get_sum*、*broadcast*。

$8.5.1 \text{ get_rank}$

Fortran 構文

integer(kind=c_int) fdps_ctrl%get_rank()

C言語 構文

int fdps_get_rank();

仮引数仕様

なし。

返り値

integer(kind=c_int) 型。全プロセス中でのランクを返す。

機能

全プロセス中でのランクを返す。

8.5.2 get_rank_multi_dim

Fortran 構文

integer(kind=c_int) fdps_ctrl%get_rank_multi_dim(id)

C言語 構文

int fdps_get_rank_multi_dim(const int id);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
id	$integer(kind=c_int)$	入力	軸の番号。x軸:0,y軸:1,z軸:2。

返り値

integer(kind=c_int)型。id番目の軸でのランクを返す。2次元の場合、id=2は1を返す。

機能

id 番目の軸でのランクを返す。2次元の場合、id=2 は1を返す。

8.5.3 get_num_procs

Fortran 構文

integer(kind=c_int) fdps_ctrl%get_num_procs()

C言語 構文

int fdps_get_num_procs();

仮引数仕様

なし。

返り値

integer(kind=c_int) 型。全プロセス数を返す。

機能

全プロセス数を返す。

8.5.4 get_num_procs_multi_dim

Fortran 構文

integer(kind=c_int) fdps_ctrl%get_num_procs_multi_dim(id)

C言語 構文

int fdps_get_num_procs_multi_dim(const int id);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
id	$integer(kind=c_int)$	入力	軸の番号。x軸:0,y軸:1,z軸:2。

返り値

integer(kind=c_int) 型。id番目の軸のプロセス数を返す。2次元の場合、id=2は1を返す。

機能

id 番目の軸のプロセス数を返す。2 次元の場合、id=2 は1 を返す。

8.5.5 get_logical_and

Fortran 構文

C言語構文

```
_Bool fdps_get_logical_and(const _Bool in);
```

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
f_in f_out	logical(kind=c_bool) logical(kind=c_bool) const. Bool	入力 入出力 入力	入力の論理値 出力の論理値 入力の論理値
in	COUST TROOL	人刀	八月97冊/生1世

返り値

Fortran の場合はなし。C言語の場合は _Bool 型。

機能

Fortran の場合、全プロセスでの f_{in} の論理積をとり f_{out} にいれる。C 言語の場合、全プロセスでの f_{in} の論理積をとり、その結果を返す。

8.5.6 get_logical_or

Fortran 構文

C 言語 構文

```
_Bool fdps_get_logical_or(const _Bool in);
```

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
f_in f_out	logical(kind=c_bool) logical(kind=c_bool) const. Bool	入力 入出力 入力	入力の論理値 出力の論理値 入力の論理値
in	COUST TROOL	人刀	八月97冊/生1世

返り値

Fortran の場合はなし。C言語の場合は_Bool型。

機能

Fortran の場合、全プロセスでの f_{in} の論理和をとり f_{out} にいれる。C 言語の場合、全プロセスでの f_{in} の論理和をとり、その結果を返す。

8.5.7 get_min_value

Fortran 構文 (1)

C 言語 構文 (1)

```
fdps_s32 fdps_get_min_value_s32(const fdps_s32 f_in);
fdps_s64 fdps_get_min_value_s64(const fdps_s64 f_in);
fdps_u32 fdps_get_min_value_u32(const fdps_u32 f_in);
fdps_u64 fdps_get_min_value_u64(const fdps_u64 f_in);
fdps_f32 fdps_get_min_value_f32(const fdps_f32 f_in);
fdps_f64 fdps_get_min_value_f64(const fdps_f64 f_in);
```

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
f_in	Fortran の場合、以下のいずれか:	入力	入力値
	$integer(kind=c_int)$		
	$integer(kind=c_long_long)$		
	$real(kind=c_float)$		
	$real(kind=c_double)$		
	C言語の場合、以下のいずれか:		
	fdps_s32, fdps_s64		
	$fdps_u32, fdps_u64$		
	fdps_f32, fdps_f64		
f_out	入力と同じ	入出力	出力値

返り値

Fortran の場合はなし。C言語の場合は入力値と同じデータ型。

機能

Fortran の場合、全プロセスで f_{in} の最小値を取り、結果を f_{out} に代入する。C 言語の場合、全プロセスで f_{in} の最小値を取り、その結果を返す。

最小値の他、最小値に対応したインデックスも返す API もある。これは以下のようになる。

Fortran 構文 (2)

C 言語 構文 (2)

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
f_in	$real(kind=c_float)$	入力	入力値
	$real(kind=c_double)$		
i_in	$integer(kind=c_int)$	入力	入力値に対応するインデックス
f_out	f_inと同じ	入出力	出力値
i_out	$integer(kind{=}c_int)$	入出力	出力値に対応するインデックス

返り値

なし。

機能

全プロセスで f_{in} の最小値を取り、結果を f_{out} に格納する。さらに、その値に対応する i_{in} の値を i_{out} に格納する。

8.5.8 get_max_value

Fortra 構文 (1)

C 言語 構文 (1)

```
fdps_s32 fdps_get_max_value_s32(const fdps_s32 f_in);
fdps_s64 fdps_get_max_value_s64(const fdps_s64 f_in);
fdps_u32 fdps_get_max_value_u32(const fdps_u32 f_in);
fdps_u64 fdps_get_max_value_u64(const fdps_u64 f_in);
fdps_f32 fdps_get_max_value_f32(const fdps_f32 f_in);
fdps_f64 fdps_get_max_value_f64(const fdps_f64 f_in);
```

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
f_in	Fortran の場合、以下のいずれか: integer(kind=c_int) integer(kind=c_long_long) real(kind=c_float)	入力	入力値
	real(kind=c_double) real(kind=c_double) C言語の場合、以下のいずれか: fdps_s32, fdps_s64 fdps_u32, fdps_u64 fdps_f32, fdps_f64		
f_out	入力と同じ	入出力	出力値

返り値

Fortran の場合はなし。C言語の場合は入力値と同じデータ型。

機能

全プロセスで f_in の最大値を取り、結果を返す。

最大値の他、最大値に対応したインデックスも返す API もある。これは以下のようになる。

Fortran 構文 (2)

C 言語 構文 (2)

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
f_in	$real(kind=c_float)$	入力	入力値
	$real(kind=c_double)$		
i_in	$integer(kind=c_int)$	入力	入力値に対応するインデックス
f_out	f_inと同じ	入出力	出力値
i_out	$integer(kind{=}c_int)$	入出力	出力値に対応するインデックス

返り値

Fortran の場合はなし。C言語の場合は入力値と同じデータ型。

機能

全プロセスで f_{-in} の最大値を取り、結果を f_{-out} に格納する。さらに、その値に対応する i_{-in} の値を i_{-out} に格納する。

$8.5.9 \text{ get_sum}$

Fortran 構文

C 言語 構文

```
fdps_s32 fdps_get_sum_s32(const fdps_s32 f_in);
fdps_s64 fdps_get_sum_s64(const fdps_s64 f_in);
fdps_u32 fdps_get_sum_u32(const fdps_u32 f_in);
fdps_u64 fdps_get_sum_u64(const fdps_u64 f_in);
fdps_f32 fdps_get_sum_f32(const fdps_f32 f_in);
fdps_f64 fdps_get_sum_f64(const fdps_f64 f_in);
```

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
f_in	Fortran の場合、以下のいずれか:	入力	入力値
	$integer(kind=c_int)$		
	$integer(kind=c_long_long)$		
	$real(kind=c_float)$		
	$real(kind=c_double)$		
	C 言語の場合、以下のいずれか:		
	fdps_s32, fdps_s64		
	fdps_u32, fdps_u64		
	fdps_f32, fdps_f64		
f_out	入力と同じ	入出力	出力値

返り値

Fortran の場合はなし。C言語の場合は入力値と同じデータ型。

機能

全プロセスで f_in の総和を取り、結果を返す。

8.5.10 broadcast

Fortran 構文

C言語 構文

```
void fdps_broadcast_s32(fdps_s32 *val, int n, int src);
void fdps_broadcast_s64(fdps_s64 *val, int n, int src);
void fdps_broadcast_u32(fdps_u32 *val, int n, int src);
void fdps_broadcast_u64(fdps_u64 *val, int n, int src);
void fdps_broadcast_f32(fdps_f32 *val, int n, int src);
void fdps_broadcast_f64(fdps_f64 *val, int n, int src);
```

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
val	Fortran の場合、以下のいずれかの型の変数または配列:	入出力	入力値。C言語では引数に変数 のアドレスを指定する必要が あることに注意。
	integer(kind=c_int) integer(kind=c_long_long) real(kind=c_float) real(kind=c_double) C言語の場合、以下のいずれ かの型の変数または配列 fdps_s32, fdps_s64 fdps_u32, fdps_u64		
n	fdps_f32, fdps_f64 integer(kind=c_int)	入力	入力値の数。スカラー変数の場合 には1を、配列の場合には配列サ イズを指定する。
src	$integer(kind=c_int)$	入力	放送するプロセスのランク番号

返り値

なし。

機能

ランク番号 src のプロセスが n 個の val で指定される n 個の変数を全プロセスに放送する。結果は val に格納される。

8.5.11 get_wtime

Fortran 構文

real(kind=c_double) fdps_ctrl%get_wtime()

C言語 構文

double fdps_get_wtime();

仮引数仕様

なし。

返り値

real(kind=c_double)型。ウォールクロックタイムを返す。単位は秒。

機能

ウォールクロックタイムを返す。単位は秒。

8.5.12 barrier

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%barrier()

C言語 構文

void fdps_barrier();

仮引数仕様

なし。

返り値

なし。

機能

プロセス間の同期を取る。

8.6 Particle Mesh用 API

本節では、FDPS 拡張機能 Particle Mesh を使用するための API を記述する。FDPS 本体において、Particle Mesh 計算に必要なデータは ParticleMesh オブジェクト (以後、単に **PM** オブジェクト) で管理される。他のオブジェクトと同様、Fortran/C 言語 インターフェースでは、PM オブジェクトを識別番号で管理する。

PM オブジェクトを操作する全 API の名称の一覧を以下に示す:

```
(fdps_)create_pm
(fdps_)delete_pm
(fdps_)get_pm_mesh_num
(fdps_)get_pm_cutoff_radius
(fdps_)set_dinfo_of_pm
(fdps_)set_psys_of_pm
(fdps_)get_pm_force
(fdps_)get_pm_force
(fdps_)get_pm_force_only
(fdps_)calc_pm_force_all_and_write_back
```

以下、順に、各APIの仕様を記述していく。

8.6.1 create_pm

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%create_pm(pm_num)

C言語 構文

void fdps_create_pm(int *pm_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
pm_num	integer(kind=c_int)	入出力	PM オブジェクトの識別番号を受け取るための変数。C言語では変数のアドレスを引数に指定する必要があることに注意。

返り値

なし。

機能

メモリ上に、Particle Mesh 計算で使用される PM オブジェクトを生成し、そのオブジェクトの識別番号を返す。

8.6.2 delete_pm

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%delete_pm(pm_num)

C言語 構文

void fdps_delete_pm(const int pm_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
pm_num	$integer(kind=c_int)$	入力	PM オブジェクトの識別番号。

返り値

なし

機能

メモリ上から、識別番号 pm_num の PM オブジェクトを削除する。

$8.6.3 \text{ get_pm_mesh_num}$

Fortran 構文

integer(kind=c_int) fdps_ctrl%get_pm_mesh_num()

C言語 構文

int fdps_get_pm_mesh_num();

仮引数仕様

なし。

返り値

Particle Mesh 計算で使用されるメッシュの1次元方向当たりのメッシュ数。integer(kind=c_int) 型。

機能

Particle Mesh 計算に使用されるメッシュの1次元方向あたりのメッシュ数を返す。

8.6.4 get_pm_cutoff_radius

Fortran 構文

real(kind=c_double) fdps_ctrl%get_pm_cutoff_radius()

C言語 構文

double fdps_get_pm_cutoff_radius();

仮引数仕様

なし。

返り値

Particle Mesh 計算に使用されるカットオフ半径。カットオフ半径はメッシュの格子間隔で規格化されている。real(kind=c_double)型。

機能

Particle Mesh 計算で使われるカットオッフ半径を、メッシュ間隔で規格化された値として返す。

$8.6.5 \text{ set_dinfo_of_pm}$

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%set_dinfo_of_pm(pm_num,dinfo_num)

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
pm_num	integer(kind=c_int)	入力	PM オブジェクトの識別番号。 Particle Mesh 計算の対象となる粒子群オブジェクトに関連した領域情報オブジェクトの識別番号。
dinfo_num	integer(kind=c_int)	入力	

返り値

なし。

機能

識別番号 pm_num を持つ PM オブジェクトに、領域情報オブジェクトの識別番号をセットする。ここでセットされる領域情報オブジェクトは、FDPS が領域情報を取得するのに使用される。そのため、Particle Mesh 計算の対象となる粒子群オブジェクトと関連付けられたものである必要がある。

$8.6.6 \text{ set_psys_of_pm}$

Fortran 構文

```
subroutine fdps_ctrl%set_psys_of_pm(pm_num,psys_num,clear)
```

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
pm_num	integer(kind=c_int)	入力	PM オブジェクトの識別番号。
psys_num	integer(kind=c_int)	入力	Particle Mesh 計算の対象となる粒子群オ ブジェクトの識別番号。
clear	logical(kind=c_bool)	入力	これまで読込んだ粒子情報をクリアするかどうか決定するフラグ。.true.ならばクリアする。Fortranの場合、引数は省略可能で、省略された場合、デフォルト値.true.が使用される。

返り値

なし。

機能

識別番号 pm_num を持つ PM オブジェクトに、粒子群オブジェクトの識別番号をセットする。ここでセットされる粒子群オブジェクトの粒子情報を使って、FDPS は Particle Mesh 計算を行うことになる。

8.6.7 get_pm_force

Fortran 構文

```
subroutine fdps_ctrl%get_pm_force(pm_num,pos,f)
```

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
pm_num	$integer(kind=c_int)$	入力	PM オブジェクトの識 別番号。
pos	Fortran の場合、以下のいずれか: real(kind=c_float), dimension(space_dim) real(kind=c_double), dimension(space_dim) type(fdps_f32vec) type(fdps_f64vec) C 言語では fdps_f32vec *型のみ	入力	メッシュからの力の計算に使用する位置座標。C言語の場合、引数に変数のアドレスを指定する必要がある。
f	pos と同じデータ型	入出力	位置 pos におけるメッ シュからの力。
force	fdps_f32vec *	入出力	位置 pos におけるメッシュからの力。引数に変数のアドレスを指定する必要がある。

コンパイル時にマクロ PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION が定義されている場合は space_-dim は 2。 それ以外は 3 である。

返り値

なし。

機能

位置 pos でのメッシュからの力を返す。この関数はスレッドセーフである。本 API 実行前に、識別番号 pm_num の PM オブジェクトを使い、後述する API (fdps_)calc_pm_force_only か (fdps_)calc_pm_force_all_and_write_back が少なくとも 1 回は実行されている必要がある。

8.6.8 get_pm_potential

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%get_pm_potential(pm_num,pos,pot)

C言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
pm_num	$integer(kind=c_int)$	入力	PM オブジェクト の識別番号。
pos	Fortran の場合、以下のいずれか:	入力	
	real(kind=c_float), dimension(space_dim)		メッシュからの
	real(kind=c_double), dimension(space_dim)		ポテンシャルの
	type(fdps_f32vec)		計算に使用する
	type(fdps_f64vec)		位置座標。
	C言語では fdps_f32vec *型のみ		
pot	Fortran では real(kind=c_float)	入出力	位置 pos におけ
-	C言語では fdps_f32		- るメッシュポテ
	-		ンシャル値。

コンパイル時にマクロ PARTICLE_SIMULATOR_TWO_DIMENSION が定義されている場合は space_dim は 2。それ以外は 3 である。C 言語では引数 posと pot は、変数のアドレスである。

返り値

なし。

機能

位置 pos でのメッシュポテンシャルの値を返す。この関数はスレッドセーフ である。本 API でポテンシャルの値を取得するためには、事前に、識別番号 pm_num の PM オブジェクトを使い、後述する API (fdps_)calc_pm_force_only か (fdps_)calc_pm_force_all_and_write_back が少なくとも1回は実行されている必要がある。

8.6.9 calc_pm_force_only

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%calc_pm_force_only(pm_num)

C言語 構文

void fdps_calc_pm_force_only(const int pm_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
pm_num	$integer(kind=c_int)$	入力	PM オブジェクトの識別番号。

返り値

なし。

機能

識別番号 pm_num の PM オブジェクトを使い、メッシュ上の力を計算する。正しく機能するには、事前に粒子情報や領域情報が PM オブジェクトにセットされている必要がある。

$8.6.10 \quad calc_pm_force_all_and_write_back$

Fortran 構文

C 言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
pm_num psys_num	integer(kind=c_int) integer(kind=c_int)	入力 入力	PM オブジェクトの識別番号。 Particle Mesh 計算に使用する粒子群オブ
dinfo_num	$integer(kind=c_int)$	入力	ジェクトの識別番号。 Particle Mesh 計算に使用する領域情報オ ブジェクトの識別番号。

返り値

なし。

機能

指定された識別番号を持つ粒子群オブジェクト, 領域情報オブジェクト, PM オブジェクト を使って、メッシュ上のポテンシャルおよび力を計算した上で、<u>力のみ</u>を粒子群オブジェクトに書き戻す。

8.7 その他の API

本節ではFortran/C言語 インターフェースに用意されている他のAPIについて記述する。 本節で説明するAPIの名称の一覧を以下に示す:

```
(fdps_)create_mtts
(fdps_)delete_mtts
(fdps_)mtts_init_genrand
(fdps_)mtts_genrand_int31
(fdps_)mtts_genrand_real1
(fdps_)mtts_genrand_real2
(fdps_)mtts_genrand_res53
(fdps_)mt_init_genrand
(fdps_)mt_genrand_int31
(fdps_)mt_genrand_real1
(fdps_)mt_genrand_real2
(fdps_)mt_genrand_real2
(fdps_)mt_genrand_res53
```

ここに示された API の内、名称に mt が含まれる API は擬似乱数列生成器メルセンヌ・ツイスタ (Mersenne twister) を操作・使用するための API である。

以下、順に各APIの仕様について記述していく。

8.7.1 create_mtts

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%create_mtts(mtts_num)

C言語 構文

void fdps_create_mtts(int * mtts_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
mtts_num	integer(kind=c_int)	入出力	疑似乱数生成用オブジェクトの識別番号を受け取る変数。C言語では変数のアドレスを引数に指定する必要があることに注意。

返り値

なし。

機能

メモリ上にメルセンヌ・ツイスタ (Mersenne twister) を使って疑似乱数を生成するオブジェクトを 1 つ生成し、そのオブジェクトの識別番号を返す。

8.7.2 delete_mtts

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%delete_mtts(mtts_num)

C言語 構文

void fdps_delete_mtts(const int mtts_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
mtts_num	integer(kind=c_int)	入力	疑似乱数生成用オブジェクトの識別番号を 格納した変数。

返り値

なし。

機能

識別番号mtts_numの疑似乱数生成用オブジェクトをメモリ上から削除する。

8.7.3 mtts_init_genrand

Fortran 構文

```
subroutine fdps_ctrl%mtts_init_genrand(mtts_num,s)
```

C 言語 構文

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
mtts_num	$integer(kind=c_int)$	入力	疑似乱数生成用オブジェクトの識別番号を 格納した変数。
s	$integer(kind{=}c_int)$	入力	疑似乱数生成に使用するシード。

返り値

なし

機能

識別番号 mtts_num の疑似乱数生成用オブジェクトを初期化する。

8.7.4 mtts_genrand_int31

Fortran 構文

function fdps_ctrl%mtts_genrand_int31(mtts_num)

C言語 構文

int fdps_mtts_genrand_int31(const int mtts_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
mtts_num	integer(kind=c_int)	入力	疑似乱数生成用オブジェクトの識別番号を 格納した変数。

返り値

integer(kind=c_int) 型スカラー値

機能

識別番号 $mtts_num$ の疑似乱数生成用オブジェクトを使って、[0,0x7fffffff]の範囲で一様な整数乱数を生成する。

$8.7.5 \quad mtts_genrand_real1$

Fortran 構文

function fdps_ctrl%mtts_genrand_real1(mtts_num)

C言語 構文

double fdps_mtts_genrand_real1(const int mtts_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
mtts_num	integer(kind=c_int)	入力	疑似乱数生成用オブジェクトの識別番号を 格納した変数。

返り値

real(kind=c double) 型スカラー値。

機能

識別番号mtts_num の疑似乱数生成用オブジェクトを使って、[0.0,1.0] の範囲で一様な浮動 小数点数乱数を生成する。

8.7.6 mtts_genrand_real2

Fortran 構文

function fdps_ctrl%mtts_genrand_real2(mtts_num)

C言語 構文

double fdps_mtts_genrand_real2(const int mtts_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
mtts_num	integer(kind=c_int)	入力	疑似乱数生成用オブジェクトの識別番号を 格納した変数。

返り値

real(kind=c double) 型スカラー値。

機能

識別番号 $\mathtt{mtts_num}$ の疑似乱数生成用オブジェクトを使って、[0.0,1.0)の範囲で一様な浮動小数点数乱数を生成する。

$8.7.7 \quad mtts_genrand_real3$

Fortran 構文

function fdps_ctrl%mtts_genrand_real3(mtts_num)

C言語 構文

double fdps_mtts_genrand_real3(const int mtts_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
mtts_num	integer(kind=c_int)	入力	疑似乱数生成用オブジェクトの識別番号を 格納した変数。

返り値

real(kind=c double) 型スカラー値。

機能

識別番号 $mtts_num$ の疑似乱数生成用オブジェクトを使って、(0.0,1.0) の範囲で一様な浮動小数点数乱数を生成する。

8.7.8 mtts_genrand_res53

Fortran 構文

function fdps_ctrl%mtts_genrand_res53(mtts_num)

C言語 構文

double fdps_mtts_genrand_res53(const int mtts_num);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
mtts_num	integer(kind=c_int)	入力	疑似乱数生成用オブジェクトの識別番号を 格納した変数。

返り値

real(kind=c double) 型スカラー値。

機能

識別番号 mtts_num の疑似乱数生成用オブジェクトを使って、[0.0,1.0) の範囲で一様な浮動小数点乱数を生成する。前述した mtts_genrand_realx (x=1-3) は浮動小数点数へ変換するのに 32 ビット整数乱数を使用しているのに対し、本 API では 53 ビット整数乱数を使用している。

$8.7.9 \quad mt_init_genrand$

Fortran 構文

subroutine fdps_ctrl%mt_init_genrand(s)

C言語 構文

void fdps_mt_init_genrand(const int s);

仮引数仕様

仮引数名	データ型	入出力属性	定義
S	$integer(kind{=}c_int)$	入出力	擬似乱数生成に使用するシード。

返り値

なし。

機能

擬似乱数列生成器メルセンヌ・ツイスタ (Mersenne twister) のオブジェクトを生成し初期 化を行う。

$8.7.10 \quad mt_genrand_int31$

Fortran 構文

function fdps_ctrl%mt_genrand_int31()

C言語 構文

int fdps_mt_genrand_int31();

仮引数仕様

なし。

返り値

integer(kind=c_int) 型スカラー値。

機能

擬似乱数列生成器メルセンヌ・ツイスタ (Mersenne twister) を使って、[0,0x7fffffff] の範囲で一様な整数乱数を生成する。

$8.7.11 \quad mt_genrand_real1$

Fortran 構文

function fdps_ctrl%mt_genrand_real1()

C言語 構文

double fdps_mt_genrand_real1();

仮引数仕様

なし

返り値

real(kind=c_double) 型スカラー値。

機能

擬似乱数列生成器メルセンヌ・ツイスタ (Mersenne twister) を使って、[0.0,1.0] の範囲で一様な浮動小数点数乱数を生成する。

8.7.12 mt_genrand_real2

Fortran 構文

function fdps_ctrl%mt_genrand_real2()

C言語 構文

double fdps_mt_genrand_real2();

仮引数仕様

なし

返り値

real(kind=c_double) 型スカラー値。

機能

擬似乱数列生成器メルセンヌ・ツイスタ (Mersenne twister) を使って、[0.0,1.0) の範囲で一様な浮動小数点数乱数を生成する。

8.7.13 mt_genrand_real3

Fortran 構文

function fdps_ctrl%MT_genrand_real3()

C言語 構文

double fdps_mt_genrand_real3();

仮引数仕様

なし。

返り値

real(kind=c_double) 型スカラー値。

機能

擬似乱数列生成器メルセンヌ・ツイスタ (Mersenne twister) を使って、(0.0,1.0) の範囲で一様な浮動小数点乱数を生成する。

8.7.14 mt_genrand_res53

Fortran 構文

function fdps_ctrl%MT_genrand_res53()

C言語 構文

double fdps_mt_genrand_res53();

仮引数仕様

なし。

返り値

real(kind=c_double) 型スカラー値。

機能

擬似乱数列生成器メルセンヌ・ツイスタ (Mersenne twister) を使って、[0.0,1.0) の範囲で一様な浮動小数点乱数を生成する。前述した $\mathrm{mt_genrand_real}x$ (x=1-3) は浮動小数点数へ変換するのに 32 ビット整数乱数を使用しているのに対し、本 API では 53 ビット整数乱数を使用している。

第9章 エラーメッセージ

本章では、FDPS Fortran インターフェースを用いたプログラムを実行した際に出力されるエラーメッセージ (エラー検出) について記述する。Fortran インターフェースは FDPS 本体を使用しているため、まず FDPS 本体が検出するエラーについて記述する。その後、Fortran インターフェースに固有のエラー検出について記述する。

9.1 FDPS 本体

ここでは、FDPS 本体に関するエラーメッセージを記述するが、以下の点に関しては注意して頂きたい:

- 簡単のため、FDPS 本体をFDPSと略して記述する。
- ▶ FDPS 本体で定義された C++のデータ型、関数、API 名を使用する。
- Fortran インターフェースを使用する限り発生しないエラーに関しても記述されている。

9.1.1 概要

FDPSではのコンパイル時もしくは実行時のエラー検出機能を備えている。ここでは、FDPSで検出可能なエラーとその場合の対処について記述する。ただし、ここに記述されていないエラーも起こる可能性がある。(その場合は開発者に報告していただけると助かります。)

9.1.2 コンパイル時のエラー

9.1.3 実行時のエラー

FDPS が実行時エラーを検出すると標準エラー出力に以下のような書式でメッセージを出力し、PS::Abort(-1) によってプログラムを終了する。

PS_ERROR: ERROR MESSAGE

function: FUNCTION NAME, line: LINE NUMBER, file: FILE NAME

• ERROR MESSAGE

エラーメッセージ

- FUNCTION NAMEエラーが起こった関数の名前
- LINE NUMBERエラーが起こった行番号
- FILE NAMEエラーが起こったファイルの名前

以下、FDPSで用意されている実行時エラーメッセージを列挙していく。

9.1.3.1 PS_ERROR: can not open input file

ユーザーが FDPS のファイル入力関数を使っており、ユーザーが指定した入力ファイルがなかった場合に表示される。

エラーメッセージのあとに以下のメッセージも標準エラー出力に表示される。

input file: "入力ファイル名"

9.1.3.2 PS_ERROR: can not open output file

ユーザーが FDPS のファイル出力関数を使っており、ユーザーが指定した出力ファイルがなかった場合に表示される。

エラーメッセージのあとに以下のメッセージも標準エラー出力に表示される。

output file: "出力ファイル名"

9.1.3.3 PS_ERROR: Do not initialize the tree twice

同一のツリーオブジェクトに対して関数 PS::TreeForForce::initialize(...) を 2 度呼び出した場合に表示される。同一のツリーオブジェクトに対して PS::TreeForForce::initialize(...) の呼び出しを一回にする。

9.1.3.4 PS_ERROR: The opening criterion of the tree must be >= 0.0

長距離力モードでツリーのオープニングクライテリオンに負の値が入力された場合に表示される。関数 PS::TreeForForce::initialize(...) を使ってオープニングクライテリオンに 0 以上の値を指定する必要がある。

エラーメッセージのあとに以下のメッセージも標準エラー出力に表示される。

theta_= "入力されたオープニングクライテリオンの値"

SEARCH_MODE: "対象となるツリーのサーチモードの型名"

Force: "対象となるツリーのフォースの型名"

EPI: "対象となるツリーの EPI の型名"

EPJ: "対象となるツリーの EPJ の型名"

SPJ: "対象となるツリーの SPJ の型名"

9.1.3.5 PS_ERROR: The limit number of the particles in the leaf cell must be > 0

長距離力モードでツリーのリーフセルの最大粒子数に負の値が入力された場合に表示される。関数 PS::TreeForForce::initialize(...) を使ってリーフセルの最大粒子数に正の整数を指定する必要がある。

エラーメッセージのあとに以下のメッセージも標準エラー出力に表示される。

n_leaf_limit_="入力されたリーフセルの最大粒子数"

SEARCH_MODE: "対象となるツリーのサーチモードの型名"

Force: "対象となるツリーのフォースの型名"

EPI: "対象となるツリーの EPI の型名"

EPJ: "対象となるツリーの EPJ の型名"

SPJ: "対象となるツリーの SPJ の型名"

9.1.3.6 PS_ERROR: The limit number of particles in ip groups msut be >= that in leaf cells

長距離力モードでツリーのリーフセルの最大粒子数がi粒子グループの粒子の最大数より大きかった場合に表示される。関数 PS::TreeForForce::initialize(...) を使ってi粒子グループの最大粒子数をリーフセルの最大粒子数以上にする必要がある。

エラーメッセージのあとに以下のメッセージも標準エラー出力に表示される。

n_leaf_limit_="入力されたリーフセルの最大粒子数"

n_grp_limit_="入力されたi粒子グループの内の最大粒子数"

SEARCH_MODE: "対象となるツリーのサーチモードの型名"

Force: "対象となるツリーのフォースの型名"

EPI: "対象となるツリーの EPI の型名"

EPJ: "対象となるツリーの EPJ の型名"

SPJ: "対象となるツリーの SPJ の型名"

9.1.3.7 PS_ERROR: The number of particles of this process is beyond the FDPS limit number

FDPSでは1プロセスあたりに扱える粒子数は $2G(G=2^{30})$ であり、それ以上の粒子を確保しようとした場合に表示される。この場合、プロセス数を増やすなどして、1プロセスあたりの粒子数を減らす必要がある。

9.1.3.8 PS_ERROR: The forces w/o cutoff can be evaluated only under the open boundary condition

開放境界以外の条件下でカットオフなし長距離力を設定した場合に表示される。カットオフなし長距離力の計算では必ず、開放境界条件を使う。無限遠までの粒子からの力を計算したい場合はカットオフあり長距離力の計算を FDPS で行い、カットオフ外からの力の計算は外部モジュールである Particle Mesh を使う事ができる。

9.1.3.9 PS_ERROR: A particle is out of root domain

ユーザーが *PS::DomainInfo::setRootDomain(...)* 関数を用いてルートドメインを設定しており、粒子がそのルートドメインからはみ出していた場合に表示される。周期境界条件の場合はユーザーは粒子をルートドメイン内に収まるように位置座標をシフトする必要がある。FDPS では粒子をルートドメイン内にシフトする関数

PS::ParticleSystem::adjustPositionIntoRootDomain(...) を用意しており、それを使うこともできる。

エラーメッセージのあとに以下のメッセージも標準エラー出力に表示される。

position of the particle=" 粒子の座標" position of the root domain="ルートドメインの座標"

9.1.3.10 PS_ERROR: The smoothing factor of an exponential moving average is must between 0 and 1.

ユーザーが PS::DomainInfo::initialize(...) 関数を用いて平滑化係数に 0 未満もしくは 1 を超える値を設定した場合に表示される。エラーメッセージのあとに以下のメッセージも標準エラー出力に表示される。

The smoothing factor of an exponential moving average=" 平滑化係数の値"

9.1.3.11 PS_ERROR: The coordinate of the root domain is inconsistent.

ユーザーが PS::DomainInfo::setPosRootDomain(...) 関数を用いてルートドメインを設定した時に、ユーザーが設定した小さい側の頂点の座標の任意の成分が大きい側の頂点の対応する座標の値よりも大きかった場合に表示される。エラーメッセージのあとに以下のメッセージも標準エラー出力に表示される。

The coordinate of the low vertex of the rood domain="小さい側の頂点の座標" The coordinate of the high vertex of the rood domain="大きい側の頂点の座標"

9.1.3.12 PS_ERROR: Vector invalid accesse

Vector 型の [] 演算子で定義されている範囲外の成分にアクセスを行った場合に表示される。エラーメッセージのあとに以下のメッセージも標準エラー出力に表示される。

Vector element=" 指定した成分" is not valid

9.2 FDPS Fortran/C言語 インターフェース

本節では、FDPS Fortran/C 言語 インターフェース固有のエラーメッセージについて記述する。

9.2.1 コンパイル時のエラー検出

FDPS Fortran/C 言語 インターフェースにコンパイルエラーを検出する機能はない。

9.2.2 実行時のエラー検出

FDPS Fortran/C 言語 インターフェースが実行時エラーを検出すると、標準出力に以下のような書式でメッセージを出力し、PS_abort(-1) によってプログラムを終了する。

*** PS_FTN_IF_ERROR ***
message: error_message
function: function_name
file: file_name

ここで、

パラメータ名	定義
	エラーメッセージ
$function_name$	エラーを検出したサブルーチン、或いは、関数の名前
$file_name$	上記のサブルーチン、或いは、関数が定義されているファイルの名前

である。

以下、本 Fortran/C 言語 インターフェースで用意されている実行時エラーメッセージを列挙していく。

9.2.2.1 FullParticle '派生データ型名' does not exist

これは、粒子群オブジェクトを生成する API create_psys に、FullParticle 型ではない派 生データ型名が指定された場合に表示される。

9.2.2.2 An invalid ParticleSystem number is received

これは、不正な粒子群オブジェクト識別番号が指定された場合に表示される。

9.2.2.3 cannot create Tree 'ツリーの種類'

これは、ツリーオブジェクトを生成する API create_tree に、不正なツリーの種類が指定された場合に表示される。このエラーは、例えば、探索半径を持たない Essential Particle J型で短距離力用ツリーを生成しようとしたとき等に起こる。

9.2.2.4 An invalid Tree number is received

これは、不正なツリーオブジェクト識別番号が指定された場合に表示される。

9.2.2.5 The combination psys_num and tree_num is invalid

これは、相互作用計算を行う次の API calc_force_all_and_write_back,calc_force_all, calc_force_and_write_back において、次の条件が満たされた場合に表示される:

- 粒子群オブジェクトとツリーオブジェクトの識別番号の組み合わせが不適切な場合
- 識別番号で指定された粒子群オブジェクトとツリーオブジェクトが存在しない場合

9.2.2.6 tree_num passed is invalid

これは API に不正なツリーオブジェクトの識別番号が渡された場合に表示される。

9.2.2.7 EssentialParticleJ specified does not have a member variable representing the search radius or Tree specified does not support neighbor search

これは近傍粒子リストを取得する API get_neighbor_list において、次の条件が満たされた場合に表示される:

- 識別番号で指定されたツリーオブジェクトを生成する際に、探索半径を持たない Essential-Particle J 型が指定されている場合
- 識別番号で指定されたツリーオブジェクトが近傍粒子探索をサポートしないタイプのツリーの場合

エラーメッセージの後に、以下の情報も標準出力に表示される:

Please check the definitions of EssentialParticleJ and tree object:

- EssentialParticleJ: EPJ_name

- TreeInfo: tree_info

ここで、

パラメータ名	定義
EPJ_name	ツリーオブジェクト生成時に指定した EssentialParticleJ 型として指定し た派生データ型名
$tree_info$	ツリーオブジェクト生成時に指定したツリーの種類を示す文字列 (第8章 8.4 節参照)

である。

9.2.2.8 Unknown boundary condition is specified

これは境界条件を指定する API set_boundary_condition に、不正な列挙型が渡された場合に表示される。

第10章 限界と制約

本章では、FDPS および FDPS Fortran/C 言語 インターフェースの限界と制約について 記述する。FDPS Fortran/C 言語 インターフェースは FDPS 本体の仕様による制限を無条件 に受けるため、まずはじめに、FDPS 本体の限界について記述する。次に、FDPS Fortran/C 言語 インターフェース固有の限界およびユーザが受ける制約について記述する。

10.1 FDPS 本体

● FDPS 独自の整数型を用いる場合、GCC コンパイラと K コンパイラでのみ正常に動作することが保証されている。

10.2 FDPS Fortran/C言語 インターフェース

現時点で、本 Fortran/C 言語 インターフェースには次の制約・限界がある。

- FDPS 本体の一部の低レベル API、および、入出力用 API はサポートしていない。
- GPU (Graphics Processing Unit) 上での実行はまだサポートしていない。
- ユーザが C++言語で記述されたユーザコードから FDPS 本体を直接使用する場合、ユーザは超粒子が持つべきモーメント情報を自由にカスタマイズすることが可能である。ここで、モーメント情報とは、粒子-超粒子間相互作用を計算する上で必要となる量で、超粒子を構成する粒子の持つ物理量から計算されるものである。例としては、単極子や双極子、高次の多重極子等がある。本 Fortran/C言語 インターフェースでは、FDPS 本体が予めで用意しているモーメント情報のみをサポートする (第4章4.4節および第8章8.4節参照)。

第11章 変更履歴

本章では、本仕様書の変更履歴を記述する。

- 2016/12/26
 - Fortran インターフェース 初リリース (FDPS 3.0 として)
- 2017/08/23
 - FDPS に予め用意された超粒子型のデフォルトの精度を 64 ビットに変更 (FDPS 3.0a)。
- 2017/11/01
 - 粒子群オブジェクト用 API に粒子の並び替えを行う API sort_particle を追加。
 - ツリーオブジェクト用 API calc_force_all_and_write_back と calc_force_all に 相互作用リストを再利用する機能を追加。
 - ツリーオブジェクト用 API に粒子 ID からそれに対応する EssentialParticleJ を取得する API get_epj_from_id を追加。
- 2017/11/08
 - FDPS 4.0 リリース
- 2017/11/17
 - API broadcast の不具合を修正 (FDPS 4.0a)
- 2018/8/1
 - Fortran インターフェス生成スクリプト get_ftn_if.py の以下の不具合を修正 (FDPS 4.1b)
 - * 従来のスクリプトでは、copyFromForce 指示文の処理を正しく行っていなかった。具体的には、\$!fdps copyFromForce (src_mbr, dst_mbr) ... と処理すべきところを、\$!fdps copyFromForce (dst_mbr, src_mbr)... として処理していた。このバグのため、スクリプトがエラーで停止する場合があった。
 - * 従来のスクリプトでは、内部の処理で、与えられたユーザ定義型からは生成できないはずの tree クラスを生成する場合があった。この場合、コンパイルエラーが発生する問題があった。
- 2018/8/2

- API get_boundary_condition を追加
- API collect_sample_particle の引数 weight のデフォルト値を1からローカル粒子数に変更。
- API decompose_domain_all の引数 weight のデフォルト値が1と記述されていたが、 実際にはローカル粒子数だったため、記述を修正。

2018/8/31

- API barrier, set_particle_local_tree, get_force を追加
- スレッドセーフな疑似乱数生成用 API を追加 (APIに "mtts" がつくもの)